

「麦の穂を摘んで食べる弟子たち」

§ 050 マコ 2 : 23~28、**マタ 12 : 1~8**、ルカ 6 : 1~5

1. はじめに

(1) 口伝律法の中の安息日に関する論争が続いている。

① イエス時代のユダヤ教では、安息日が最も重要な律法であった。

② ソフリム学派の教え

「神は、なぜイスラエルを創造したのか」

「それは、イスラエルに安息日を守らせるためである」

「すべてのユダヤ人が一回でも安息日を完全に守ったなら、メシアが来られる」

③ 38年間病気であった人の癒しをきっかけに、論争が始まった。

④ § 49~51 まで、安息日論争が続く。

(2) **A. T. ロバートソンの調和表**

弟子たちが麦の穂を摘んで食べたときに起こった、パリサイ人とのほうひとつの論争 (§ 50)

マコ 2 : 23~28、マタ 12 : 1~8、ルカ 6 : 1~5

(3) マタイの記録法は、古代世界での「論争の手順」を記録している。

① 取税人、文筆家としての才能を見ることができる。

2. アウトライン (マタ 12 : 1~8)

(1) 状況の要約 (1~2 節)

① 弟子たちの行動

② パリサイ人たちの糾弾

(2) 議論の手順 (3~8 節)

① 例示

② 類推

③ 対比

④ 引用

⑤ すべてを統合する超法規

3. メッセージのゴール

(1) 安息日についての誤解を解く。

「麦の穂を摘んで食べる弟子たち」

- (2) パリサイ人についての誤解を解く。
- (3) 安息日と私たち

このメッセージは、安息日の意味について考えようとするものである。

I. 状況の要約 (1~2 節)

1. 弟子たちの行動 (1 節)

「そのころ、イエスは、安息日に麦畑を通られた。弟子たちはひもじくなったので、穂を摘んで食べ始めた」

- (1) これは、春から夏にかけての時期であろう。
 - ①ロバートソンは、エルサレムからガリラヤに帰る途中と見ている。
 - ②大麦が先、小麦がその後に収穫期を迎える。大麦か小麦かは、判断し難い。
 - ③この日は、安息日であった。
- (2) 「弟子たちはひもじくなった」
 - ①彼らは、職を捨ててイエスに従った。
 - ②イエス自身、「狐には穴があり、空の鳥には巣があるが、人の子には枕する所もありません」(マタ8:20)と言われた。
 - ③このひもじさ(空腹)は、この時だけではないだろう。
 - ④イエスに従ったがゆえのひもじさである。

(3) 「穂を摘んで食べ始めた」

- ①ルカ6:1
 - 「ある安息日に、イエスが麦畑を通っておられたとき、弟子たちは麦の穂を摘んで、手でもみ出しては食べていた」
- ②イエスも同じようにしたのであろう。
(例話) ヨッシーさんとオレンジ畑に入った時のこと
- ③申23:24~25
 - 「隣人のぶどう畑に入ったとき、あなたは思う存分、満ち足りるまでぶどうを食べてもよいが、あなたのかごに入れてはならない。隣人の麦畑の中に入ったとき、あなたは穂を手で摘んでもよい。しかし、隣人の麦畑でかまを使ってはならない」
- ④弟子たちの行為自体は、律法違反ではない。

2. パリサイ人たちの糾弾 (2 節)

「すると、パリサイ人たちがそれを見つけて、イエスに言った。『ご覧なさい。あなたの

弟子たちが、安息日にはならないことをしています』

- (1) 律法学者たちは、安息日に行ってはならない主な労働 39 種類を列挙した。
 - ①39 種類の主な労働のそれぞれをさらに細分化した。
 - ②その結果、1500 種以上の労働が禁じられた。
 - ③ミシュナの中の「シャバット 7 : 2」にその規定がある。

- (2) パリサイ人たちは、イエスの言動を見張っていた。
 - ①学ぼうという態度ではなく、欠点を見つけようという態度である。
 - ②信頼ではなく、反抗である。

- (3) 彼らは、4 種類の律法違反を指摘した。これらは、主な労働に該当する。
 - ①麦の穂を摘むことは、収穫に当たる。
 - ②手でもみ出すことは、脱穀に当たる。
 - ③息を吹きかけることは、もみ殻の選別に当たる。
 - ④麦を食べることは、貯蔵に当たる。

- (4) 口伝律法には、安息日に草の上を歩いてはいけないという規定さえあった。
 - ①目に見えない麦を、足で踏む可能性がある。これは収穫である。
 - ②麦ともみ殻が分離する可能性がある。これは脱穀である。
 - ③足が風を巻き上げ、もみ殻を飛ばす可能性がある。これはもみ殻の選別である。
 - ④鳥が来て、その麦を食べる可能性がある。これは貯蔵である。

II. 議論の手順 (3~8 節)

1. 例示 (3~4 節)

「しかし、イエスは言われた。『ダビデとその連れの者たちが、ひもじかったときに、ダビデが何をしたか、読まなかったのですか。神の家に入って、祭司のほかは自分も供の者たちも食べてはならない供えのパンを食べました』

- (1) 供えのパン
 - ①聖所の中に2列に置かれた12個のパンで、イスラエル12部族を象徴している。
 - ②神とイスラエルの民の交わりを象徴している。
 - ③安息日ごとに、新しいパンと交換した。
 - ④レビ 24 : 9

「これはアロンとその子らのものとなり、彼らはこれを聖なる所で食べる。これは最も聖なるものであり、【主】への火によるささげ物のうちから、彼の受け取る

永遠の分け前である」

*古いパンは、祭司たちが食べた。

*これは「聖別されたパン」と呼ばれた。

(2) ダビデはこのパンを食べた(1サム21:1~6)。

①ノブの祭司アヒメレクのもとには、「聖別されたパン」しかなかった。

②彼は、ダビデとその従者たちに、祭司しか食べてはならないパンを与えた。

(3) ダビデとイエスの対比

①ともに、拒否された状態にあった。

②ともに、従者を連れていた。

③ともに、ひもじかった。

④ダビデと従者たちは、いのちを維持するために、「聖別されたパン」を食べた。

⑤ダビデの時代には口伝律法はなかったという言い訳は成り立たない。

⑥パリサイ人の教えでは、モーセは口伝律法も神から受けたことになっていた。

⑦イエスは、ダビデ以上のお方、「ダビデの子」である。

(4) いのちの維持は、律法の規定に優先する。

2. 類推(5節)

「また、安息日に宮にいる祭司たちは安息日の神聖を冒しても罪にならないということ、律法で読んだことはないのですか」

(1) 祭司たちは、安息日には普段以上に忙しく働く。

①民28:9~10。安息日ごとの捧げ物がある。

②しかし、それは律法違反にはならない。

(2) 安息日の規定は、宮の中で働く人には適用されなかった。

①すべての規定には、例外がある。

3. 対比(6節)

「あなたがたに言いますが、ここに宮より大きな者がいるのです」

(1) これは、ユダヤ的「小から大」への議論である。

①小とは、宮である。

②大とは、宮よりも大きな者、つまり、イエスである。

③パリサイ人は、「宮よりも大きな者」と自称するイエスに仰天したことだろう。

(2) 小のために安息日でも働くとしたら、大は安息日には縛られていない。

4. 引用 (7 節)

『わたしはあわれみは好むが、いけにえは好まない』ということがどういう意味かを知っていたら、あなたがたは、罪のない者たちを罪に定めはしなかったでしょう」

(1) ホセ 6 : 6 からの引用

① 憐みを示すことは、いかなる場合でも、善である。

(2) マコ 2 : 27

「また言われた。『安息日は人間のために設けられたのです。人間が安息日のために造られたものではありません』」

① 安息日は、イスラエルのために作られたのであって、その逆ではない。

② 安息日に許される労働もある。

③ 食べること、癒すことなどは、許される労働である。

5. すべてを統合する超法規 (8 節)

「人の子は安息日の主です」

(1) 口伝律法が禁じる労働であっても、「人の子」(メシア)には適用されない。

(2) 神の啓示を超えて律法を作ることは、誰にも許されていない。

結論：

1. 安息日についての誤解を解く。

(1) イエスは、安息日の意味を説明し、それを完成するために来られた。

(2) 安息日は、よいものである。

(3) 律法は、よいものである。

(4) 悪いのは、律法の誤った適用であり、口伝律法である。

2. パリサイ人についての誤解を解く。

(1) 彼らには、敬虔な生き方を求める熱心さがあった。

(2) 安息日を喜ぶユダヤ人たちは、彼らも含めて多数いた。

(3) パリサイ人とは無関係だと思った瞬間、この箇所は私たちへの適用を失う。

(4) 私の中に、また、教会の中にあるパリサイ主義とは何かを考える必要がある。

* 見かけをよくするために、ある種の行動を規制することが律法主義である。

(例話) 聖地旅行から帰った日に、空港のそばで教会を捜す婦人

(例話) マクドナルドのお店でケチャップが切れた話

3. 安息日と私たち

(1) 安息日を楽しむ。

①今の時代は、土曜日でなくてもよい。

(2) 安息日は、善を行う日である。

(3) クリスマンにとっては、毎日が安息日である。

(4) 私たちはやがて、永遠の安息日に入るようになる。

「それゆえ私たちは、神の諸教会の間で、あなたがたがすべての迫害と患難とに耐えながらその従順と信仰とを保っていることを、誇りとしています。このことは、あなたがたを神の国にふさわしい者とするため、神の正しいさばきを示すしるしであって、あなたがたが苦しみを受けているのは、この神の国のためです。つまり、あなたがたを苦しめる者には、報いとして苦しみを与え、苦しめられているあなたがたには、私たちとともに、報いとして安息を与えてくださることは、神にとって正しいことなのです。そのことは、主イエスが、炎の中に、力ある御使いたちを従えて天から現れるときに起こります」(2テサ1:4~7)

「片手のなえた人の癒し」

§051 マコ3:1~6、マタ12:9~14、ルカ6:6~11

1. はじめに

(1) 口伝律法の中の安息日に関する論争が続いている。

- ①ベテスダの池での癒し(38年間病気だった人)
- ②麦の穂を摘んで食べた出来事
- ③片手のなえた人の癒し

*これ以降、迫害が殺意に変わる。

(2) 安息日に関する最近のニュース

■2012年6月

*世俗派の夫と正統派の妻が離婚した。妻は、元夫が子どもを預かる際に、子どもに安息日を守らせていないと裁判所に提訴したが、却下された。理由は、安息日に探偵を雇って証拠集めをしたのは安息日違反であると判断されたこと。

*安息日の車の運転の禁止を求めて、超正統派のユダヤ人たちが、エルサレムでデモ行った。道路を封鎖しようとして警官隊と衝突した彼らは、警察官に向かって「ナチス」と罵倒した。

■2012年7月

*ペレス大統領がロンドン五輪の開会式への出席を中止した。開会式は金曜の夜に行われたが、この時間帯は安息日と重なっていた。会場から「安息日の道のり」で行ける範囲に適切な宿泊施設がなかったため、この決断となった。「安息日の道のり」とは、2000キュービット(900m弱)である。

■2012年9月

*超正統派に対抗して、世俗的ユダヤ人たちがエルサレムでデモ行進をした。彼らは、安息日の公共交通機関運行を求め、「自由のある安息日を!」と叫んだ。左派政党のメレツがこれを支援した。

■2012年11月

*アッコにあるホームセンターが安息日の営業を決めたところ、それに反対する超正統派や正統派のユダヤ人たち数百人が、店の前で抗議活動を行った。

■ユダヤ教を土台に、民主主義国家を建設しようとしていることから来る葛藤

(3) A. T. ロバートソンの調和表

3度目の安息日論争: 片手の萎えた人を安息日に癒したことについて (§51)

マコ3:1~6、マタ12:9~14、ルカ6:6~11

2. アウトライン (マタ 12 : 9~14)

- (1) パリサイ人たちの質問 (9~10 節)
- (2) イエスの回答 (11~12 節)
- (3) イエスの命令 (13 節)
- (4) パリサイ人たちの応答 (14 節)

3. メッセージのゴール

- (1) 「self-esteem」(自尊心、自負心、自己尊重) について
- (2) 「神のかたち」について

このメッセージは、人間の価値について考えようとするものである。

I. パリサイ人たちの質問 (9~10 節)

1. 9 節

「イエスはそこを去って、会堂に入られた」

(1) マタイは「their synagogue」としている。日本語訳には訳出されていない。

- ①会堂には、神の支配ではなく、パリサイ派の支配があった。
- ②イエスにとっては、アウェイの戦いである。

(2) マタ 23 : 38~39

「見なさい。あなたがたの家は荒れ果てたままに残される。あなたがたに告げます。『祝福あれ。主の御名によって来られる方に』とあなたがたが言うときまで、あなたがたは今後決してわたしを見ることはありません」

- ①神殿は「わたしの父の家」と呼ばれたが、ここでは「あなたがたの家」である。
- ②ユダヤ人たちがイエスをメシアとして歓迎するまでは再臨はない。

(3) 適用 : 私たちの集まりは、イエスにとってはホームかアウェイか。

2. 10 節

「そこに片手のなえた人がいた。そこで彼らはイエスに質問して『安息日にいやすのは正しいことでしょうか』と言った。イエスを訴えるためであった」

(1) 彼らは、イエスを訴えるために「片手のなえた人」をそこに置いた。

- ①ルカは、「右手のなえた人がいた」と書いている。
- ②監視の段階から、積極的に罠をしかける段階に進んでいる。

(2) パリサイ人たちは、2つの前提のもとに策略を練っている。

①イエスには、癒しを行う力がある。

*2000年後の私たちが、イエスの奇跡を否定するのは理に叶っているか。

②イエスには、安息日の律法を破ってでも癒しを行う憐みの心がある。

(3) 「安息日にいやすのは正しいことでしょうか」

①「安息日に病気を治すのは、律法で許されていますか」(新共同訳)

②現代のハラハー

*安息日に命を救うのは、義務である。

*重病の人を治療するのは、制限付きで許可される。

*その他の病気は、治療してはならない(薬を用意するのは労働である)。

③イエス時代でも、命にかかわる場合は治療してもよいとされていた。

④この病人の癒しは、昔の口伝律法でも現代のハラハーでも、許可されない。

II. イエスの回答 (11~12節)

1. 11節

「イエスは彼らに言われた。『あなたがたのうち、だれかが一匹の羊を持っていて、もしその羊が安息日に穴に落ちたら、それを引き上げてやらないでしょうか』」

(1) ラビ的教授法

①質問に対して質問で答える。

(2) パリサイ人たちは、安息日に羊を助けることを許可した。

①羊を襲ってくる獣を捕らえるために、穴が掘られていた。

②その穴に、家畜が落ちることがよくあった。

③この解釈は、モーセの律法の本質にも合致している(出23:4~5、申22:4)。

2. 12節

「人間は羊より、はるかに値うちのあるものでしょう。それなら、安息日に良いことをすることは、正しいのです」

(1) ユダヤ的議論の方法(qal vahomerとは「軽いと重い」という意味)

①「軽い」方は、羊の命である。

②「重い」方は、人間の命である。

(2) 安息日に人間を癒すのは良いことであり、律法に叶っている(許されている)。

①パリサイ人たちは、自分で掘った穴に落ち込んだ。

Ⅲ. イエスの命令 (13 節)

1. 13 節

「それから、イエスはその人に、『手を伸ばしなさい』と言われた。彼が手を伸ばすと、手は直って、もう一方の手と同じようになった」

(1) メッセージにおいて、メインテーマ以外の点から祝福を受けることがある。

①神の約束と人間の責務の関係

②38年間病気だった人：責任転嫁の姿勢から、自己責任の姿勢に変化した。

③彼は、床を取り上げて、歩き始めた。

(例話)「ヘブル人による福音」

「俺は石工でした。この両手で生活の糧を得ていました。イエス様、お願いします。2度と、恥を忍んで物乞いをしなくてもいいように、健康を回復させてください」

(2) ここでも、病人はイエスの命令に従った。

①質問や反論はなかった。

②従順と信仰が見える。

③パリサイ人に向かって手を伸ばしたと思いたい。

(3) 彼の右手は直り、左手と同じようになった。

Ⅳ. パリサイ人たちの応答 (14 節)

1. 14 節

「パリサイ人は出て行って、どのようにしてイエスを滅ぼそうかと相談した」

(1) 彼らは、イエスの論理に対して、また、イエスの恵みに対して心を閉ざした。

①怒りに満たされた。

(2) イエスに対する殺意を抱き始めた。

①マコ 3:6

「そこでパリサイ人たちは出て行って、すぐにヘロデ党の者たちといっしょになって、イエスをどのようにして葬り去ろうかと相談を始めた」

- ②パリサイ派は、政治的力を持っていなかった。
- ③政治的立場の違うヘロデ党の者たちと共闘の協議に入った。
 - *ヘロデ党は親ローマ、パリサイ派は反ローマである。
 - *「敵の敵は、友である」

結論：

1. 「self-esteem」(自尊心、自負心、自己尊重)について

(1) 「self-esteem」は大切な概念である。

①自らの存在意義を失っている時代

(2) 危険性は、他人が持っていないものを自分が持っていると考えること。

①誰が一番かを競うことになる。

②人間同士が孤立するようになる。

(例話) その危険性に警鐘を鳴らしたのが「世界にひとつだけの花」

花屋の店先に並んだ、いろんな花をみていた

ひとそれぞれ好みはあるけど、どれもみんなきれいだね

この中で誰が一番だなんて、争う事もしないで

バケツの中誇らしげに、しゃんと胸を張っている

それなのに僕ら人間は、どうしてこうも比べたがる？

一人一人違うのにその中で、一番になりたがる？

そうさ 僕らは、世界に一つだけの花

一人一人違う種を持つ、その花を咲かせることだけに

一生懸命になればいい

2. 「神のかたち」について

(1) 「self-esteem」から「God's esteem」への飛躍

①人間である限り、共通して持っているものに目をやる。

②人は、「神のかたち」に造られている。

③これは、人間同士のつながりを強くする。

(例話) ハンディを負った人に生きる権利はあるか(月刊紙 12/12月)

*ノース・フロリダ大学のクリス・ガバード博士の確信

*現代哲学者のピーター・シンガーの影響を多分に受けた。

*彼の息子は、出産の際に、脳に回復不可能な傷を負った。

*今も、脳性麻痺のために盲目で、肢体不自由の状態にある。

「誕生した息子を見て、私の心は揺れた。…それまでは、このような状態の新生児は、生かしておかない方がいいと考えていた。しかし、今日の前にいるのは、私の息子である。彼は、最先端の医療用保育器の中で眠っていた。…私を一番驚かせたのは、その子が私に似ていることであった。予想だにできなかった衝撃が、私を襲った。彼は、私が子ども時代の写真から抜け出て、そこにいるかのような顔をしていた」

*ガバード博士は、ハンディを負った新生児の尊厳を擁護する論客となった。

*2010年のギャラップ調査では、米国人の46%が、幫助自殺を容認している。
「そのような善良な市民の多くが、私の息子の苦難を終わらせてあげたいと思っている。しかし彼らは、私の息子が本当に苦しんでいるのかどうか、立ち止まって考えようとはしない。もちろん、彼が不快感を覚えることはたびたびあるが、唯一の痛みというのは、彼ではなく、周りの人たちが感じているものだ。彼らは、私の息子のような人間が存在しているという現実、耐えられないのだ」

*創造主である神は、「天の父」として「出来の悪い」私たちを愛しておられる。

(2) 旧約時代の「神のかたち」

①創1：26

「神は仰せられた。『さあ人を造ろう。われわれのかたちとして、われわれに似せて。彼らが、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地をはうすべてのものを支配するように』」

②「かたち (image)」とは、ヘブル語で「ツェレム」である。

③他の動物にはない特徴

* 善悪を選び取る能力 (道徳的存在である)

* 被造世界を管理する能力 (被造世界の冠である)

* 神を認識し、神を礼拝する能力 (霊的存在である)

④ペットブームによって、動物と人間の差が縮まってはならない。

⑤創造時の「神のかたち」は、完成形ではなく、その可能性を秘めたものである。

⑥墮落後は、「神のかたち」は曇ったが、破壊されたわけではない。

⑦詩8：3～5

「あなたの指のわざである天を見、あなたが整えられた月や星を見ますのに、人とは、何者なのでしょう。あなたがこれを心に留められるとは。人の子とは、何者なのでしょう。あなたがこれを顧みられるとは。あなたは、人を、神よりいっくらか劣るものとし、これに栄光と誉れの冠をかぶらせました」

(3) 新約時代の「神のかたち」

- ①単に、墮落によって失われたものを回復することではない。
- ②それ以上のものが与えられる。
- ③新生と聖化によって、信者は「キリストと同じかたち」に変えられていく。
- ④ロマ8：29～30

「なぜなら、神は、あらかじめ知っておられる人々を、御子のかたちと同じ姿に
あらかじめ定められたからです。それは、御子が多くの兄弟たちの中で長子とな
られるためです。神はあらかじめ定めた人々をさらに召し、召した人々をさらに
義と認め、義と認めた人々にはさらに栄光をお与えになりました」

- ⑤2 コリ3：18

「私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させ
ながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。これは
まさに、御霊なる主の働きによるのです」

(4) 安息日と「神のかたち」

- ①彼の右手は左手と同じようになった。
- ②彼は、他の人たちと同じようになった。
- ③50年目はヨベルの年と呼ばれた。

「あなたがたは第五十年目を聖別し、国中のすべての住民に解放を宣言する。こ
れはあなたがたのヨベルの年である。あなたがたはそれぞれ自分の所有地に帰り、
それぞれ自分の家族のもとに帰らなければならない」(レビ25：10)

「ガリラヤ湖畔での群衆の癒し」

§ 052 マコ 3 : 7~12、マタ 12 : 15~21

1. はじめに

(1) 安息日論争の結果、パリサイ人たちはイエスに対して殺意を抱くようになった。

- ①さて、メシアであり王であるイエスは、どう応答するか。
- ②弟子たちは、攻撃的なメシア像を持っていた。
- ③群衆は、ローマの圧政からイスラエルを解放してくれるメシアを期待していた。

(2) イエスは、予想外の行動に出る。

- ①人の道と神の道とは、遠く離れている。
- ②このことを知れば、今日の箇所の意味が理解できる。

(3) 常識を疑うこと、逆転の発想

- ①世界観を決するような重要なテーマで、科学的に証明されているものはない。
- ②神の存在を証明できないが、神が存在しないことも証明できない。
- ③宇宙の始まり、進化論と創造論など。

(例話) 創造論にとまどう生物学の教授

(4) A. T. ロバートソンの調和表

(§ 52) ガリラヤ湖畔での群衆の癒し

マコ 3 : 7~12、マタ 12 : 15~21

2. アウトライン

- (1) 群衆を癒すイエス
- (2) 汚れた霊を黙らせるイエス
- (3) メシア預言を成就するイエス

3. メッセージのゴール：逆転の発想

- (1) 理性中心から超理性へ
- (2) 広い道から狭い道へ
- (3) 成功哲学から奉仕哲学へ

このメッセージは、人生における逆転の発想について考えようとするものである。

I. 群衆を癒すイエス (マコ 3 : 7~10)

1. 7節 a

「それから、イエスは弟子たちとともに湖のほうに退かれた」

- (1) イエスは、ガリラヤ湖畔に退かれた。
- ①イエスは、パリサイ人たちの殺意を知っておられた。
 - ②まだ十字架の時は来ていない。
 - ③教えるという奉仕が残っている。
 - ④見通しの良い湖畔は、安全である。
- (2) イエスは、たびたび敵を避けて退いておられる。
- ①祈りのために
 - ②休息のために
 - ③弟子たちと時を過ごすために
 - ④多くの場合、群衆がその後を追った。

2. 7節 b~8節

「すると、ガリラヤから出て来た大ぜいの人々がついて行った。また、ユダヤから、エルサレムから、イドマヤから、ヨルダンの川向こうやツロ、シドンあたりから、大ぜいの人々が、イエスの行っておられることを聞いて、みもとにやって来た」

- (1) 広い範囲の場所から、群衆が集まって来た。
- ①ガリラヤは地元である。
 - ②ユダヤ、エルサレムは南である。
 - ③イドマヤは、死海の南東で、かつてエドムと言われた地である。
 - *ヘロデの出身地。聖書ではここにしか出てこない言葉である。
 - *当時は、イスラエルの領域の一部となっていた。
 - *そこからは、異邦人も来たであろう。
 - ④ヨルダンの川向うは、東の地である。
 - *当時は、ペレアと呼ばれた。
 - *また、デカポリスも含まれる。
 - *基本的には、異邦人の地である。
 - ⑤ツロとシドンは、北の地である。
 - *現在のレバノンに当たる。
 - *ここもまた、異邦人の地である。

- (2) 動機は、イエスが奇跡を行っているという噂を聞いたから。

- ①伝統的に、しるしを行う預言者は、多くの人を集めた。
 - *エルサレムの城壁を崩すと預言した預言者がいたが、失敗した。
 - *ヨルダン川の水を分けると預言した預言者もいたが、やはり失敗した。
- ②エリヤとエリシャ以来、イエスのような預言者は出なかった。

3. 9～10節

「イエスは、大ぜいの人なので、押し寄せて来ないように、ご自分のために小舟を用意しておくように弟子たちに言いつけられた。それは、多くの人をいやされたので、病気に悩む人たちがみな、イエスにさわろうとして、みもとに押しかけて来たからである」

(1) 病気に悩む人たちはみな、イエスに触ろうとして押しかけて来た。

①彼らは、痛みの中を、長距離移動してきた人々である。

②仕事を休んで来た人も多かったであろう。

(例話) ガリラヤボートの発掘現場に野次馬が群がった。

(2) イエスは、危険な状態になった。

①敵対的な群衆ではないが、熱心さの余り、イエスに迫ってくる。

②人々は、イエスに触れば癒されると考えた。

③イエスにとっては、ストレスの多い場面である。

(3) そこでイエスは、小舟を用意するように弟子たちに命じた。

①岸边に小舟を用意し、イエスの移動に合わせて移動させる。

②目撃者情報の生々しさが感じられる。

*マルコはペテロから聞いたと思われる。

(4) イエスは、彼らをみな癒された (マタ 12 : 15)。

II. 汚れた霊を黙らせるイエス (マコ 3 : 11～12)

1. 11節

「また、汚れた霊どもが、イエスを見ると、みもとにひれ伏し、『あなたこそ神の子です』と叫ぶのであった」

(1) 群衆の中に、悪霊につかれた人たちがいた。

①ひれ伏しているのは人間であるが、そうさせているのは悪霊である。

(2) 悪霊たちは、「あなたこそ神の子です」と叫んだ。

「ガリラヤ湖畔での群衆の癒し」

- ①カペナウムの会堂でも同じことが起こっていた。
- ②彼らは、イエスが「神の子」であることを知っていた。
 - *イエスの神性を認めていた。
- ③彼らは、叫び続けた。

2. 12節

「イエスは、ご自身のことを知らせないようにと、きびしく彼らを戒められた」

- (1) イエスは、悪霊の証言を認めないし、必要ともしない。
 - ①本来、彼らは嘘つきである。
 - ②彼らは知っているだけで、イエスに従おうとはしていない。
 - ③彼らの叫びは、イエスの奉仕の邪魔になる。
- (2) イエスは、癒された人たちにも、黙っているように命じた(マタ12:16)。
 - ①民衆のメシア像と、イエスが成就しようとしていることとは異なる。
- (3) 父なる神の計画に従って、正しいメシア像を示すことが、イエスの使命である。

Ⅲ. メシア預言を成就するイエス(マタ12:17~21)

1. 17節

「これは、預言者イザヤを通して言われた事が成就するためであった」

- (1) マタイは、ここでのイエスの行動は、メシア預言の成就であると言う。
 - ①マタイの福音書の読者は、ユダヤ人である。
 - ②引用は、イザ42:1~4である。
 - ③イザ42の一部を引用するだけで、ユダヤ人たちには文脈が分かった。

2. 18~21節

「これぞ、わたしの選んだわたしのしもべ、わたしの心の喜ぶわたしの愛する者。わたしは彼の上にわたしの霊を置き、彼は異邦人に公義を宣べる。争うこともなく、叫ぶこともせず、大路でその声を聞く者もない。彼はいたんだ葦を折ることもなく、くすぶる燈心を消すこともない、公義を勝利に導くまでは。異邦人は彼の名に望みをかける」

- (1) イエスが湖畔に退いたのは、イザヤ書が預言するメシア像に合致する。
 - ①「争うこともなく、叫ぶこともせず、大路でその声を聞く者もない」(19節)
 - ②イエスは、宣伝や大イベントを必要としないメシアである。

- (2) イエスは、イザヤ書が預言する憐み深いメシアである。
- ①「彼はいたんだ葦を折ることもなく、くすぶる燈心を消すこともない、公義を勝利に導くまでは」(20節a)
 - *「いたんだ葦」は、霊肉ともに傷ついている者のこと。
 - *イエスは、戦士としての王のように、その者たちを滅ぼすことはない。
 - ②「葦」は、弱いもの、揺れやすいもの、不安定なものの象徴である。
 - *「いたんだ葦」は、霊肉ともに傷ついている者のこと。
 - *イエスは、戦士としての王のように、その者たちを滅ぼすことはない。
 - ③「燈心」は、油がなくなるとくすぶり始め、やがて消える。
 - *「くすぶる燈心」は、命が消えかけている者たちのこと。
 - *イエスは、戦士としての王のように、その者たちを滅ぼすことはない。
- (3) イエスは、異邦人をも救うお方である。
- ①「彼は異邦人に公義を宣べる」(18節b)
 - *「公義」(新共同訳では「正義」とは、真理の全貌、福音の全貌のこと。
 - ②「異邦人は彼の名に望みをかける」(21節)
 - *異邦人の救いは、イザヤ書にすでに預言されている。
 - ③各地から異邦人が来ていることは、この預言の成就である。

結論：メッセージのゴール：逆転の発想

1. 理性中心から超理性へ

(1) マタ 12:18

「これぞ、わたしの選んだわたしのしもべ、わたしの心の喜ぶわたしの愛する者。わたしは彼の上にわたしの霊を置き、彼は異邦人に公義を宣べる」

- ①ここには、三位一体の神の顕現がある。
 - ②イエスがヨルダン川で洗礼を受けた時と、同じである。
- (2) 三位一体の神概念
- ①理性では把握できない。
 - ②しかし、非理性的ではなく、超理性的である。
 - ③三位一体は、救いの教理と深く関係している。
- (3) 父なる神が救いの計画を立てた。
- ①子なる神をしもべとして選び、派遣した。
 - ②聖霊なる神を、しもべの上に置いた。

- (4) 子なる神は、従順に父の計画を実行した。
- ①争うことも、叫ぶことのないのは、父に計画通りに進んでいる証拠である。
 - ②御子は、憐み深い王としての道を歩む。
- (5) 聖霊なる神は、御子を励まし、御子に力を与える。
- ①御子が人となられたのは、謙遜の極みである。
 - ②人としての御子は、聖霊の助けを必要とされた。
 - ③御子を見た者は、父を見たのである。

2. 広い道から狭い道へ

- (1) 一つの門が閉ざされても、別の門が開く。
- ①イエスは、パリサイ人たちからは拒否された。
 - ②しかし、イエスを慕って来る人たちの数は絶えなかった。
- (2) イエスは、すべての人に受け入れられる道ではなく、狭い道を選ばれた。
- ①私たちも、人気者になる道ではなく、狭い道を歩む者になるべきである。
 - ②自らのブランドイメージは、この世との差別化によって確立する。

3. 成功哲学から奉仕哲学へ

- (1) ユダヤ人たちが期待したメシア像は、ローマに対して勝利する王である。
- ①弟子たちも、同じ期待を抱いた。
- (2) イエスは確かに王として来られたが、戦いに勝利する王のイメージではない。
- ①イエスがどういう王として来られたかを理解する必要がある。
 - ②イエスは、「主のしもべ」である。
 - ③神のタイムテーブルに従って働きを進めるメシアである。
 - ④心優しい支配者である。
 - ⑤異邦人にも、救いをもたらすメシアである。
- (例話) 大阪市立桜ノ宮高校で、男子バスケ部主将の2年生男子が自殺

(2) マタ 11 : 28~30

「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです」

「12使徒の選抜 - ペテロ-」

§ 053 マコ 3 : 13~19、ルカ 6 : 12~16

1. はじめに

(1) 宣教の拡大のために、使徒たちを選抜し、彼らを各地に派遣する段階になった。

- ①弟子とは、師から学ぶ者。権威の付与はない。
- ②使徒とは、遣わされた者。遣わす者から権威が与えられている。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

(§ 53) 徹夜の祈りの後、イエスは12使徒を選ぶ。

マコ 3 : 13~19、ルカ 6 : 12~16

(3) 12使徒のリストは、4ヶ所に出て来る。

- ①マコ 3章、マタ 10章、ルカ 6章、使 1章
- ②同名の者、別名を持つ者などがいて、非常に難解である。

(4) 使徒たちのリストを理解するためのヒント

- ①4人一組である。
- ②ペテロは常に最初に出て来る。
- ③ピリポ (5番目)、ヤコブ (9番目) は、必ず同じ位置に出て来る (リーダー)。
- ④1組目の3人 (ペテロ、ヤコブ、ヨハネ) は、特にイエスに近い位置にある。
- ⑤兄弟たちが3組いた。

*ペテロとアンデレ

*ヤコブとヨハネ

*アルパヨの子ヤコブと、イスカリオテのユダでない方のユダ

<12使徒の歌 (ルカ 6 : 14~16) >

- 1. イエスの使徒たち12人、彼らは全員20代、
1組4人で活動し、御国の福音伝えます。
- 2. ペテロが最初の長 (おさ) となり、弟アンデレそこに付き、
ヤコブとヨハネの兄弟も、御国のために仕えます。
- 3. ピリポの組の者たちは、バルトロ、別名ナタナエル、
マタイ、もとは取税人、トマス、あだ名がデドモ (双子) です。

4. ヤコブの父はアルパヨで、シモンの前歴熱心党、
別名タダイのユダがいて、裏切り者のユダ最後。

4. アウトライン

- (1) イエスに出会う前の状態
- (2) パートタイムの弟子となる。
- (3) フルタイムの弟子となる。
- (4) 使徒として召される。
- (5) 復活の目撃者となる。

5. メッセージのゴール：ペテロの人生から学ぶ

このメッセージは、ペテロの人生から教訓を学ぼうとするものである。

I. イエスに出会う前の状態

- (1) シモンが元の名前である。
 - ①「ヨナの子シモン」(バルヨナ・シモン)
 - ②イエスによってペテロ(岩)という名が与えられた。
 - ③アンデレは、彼の弟である。
- (2) 職業は漁師である。
 - ①ガリラヤ湖の北方の町ベツサイダ出身
 - ②湖畔の町カペナウムに移り住んでいた。
 - ③結婚していた。
- (3) バプテスマのヨハネの弟子であった。
 - ①弟のアンデレとともに、メシアの到来を待ち望んでいた。
 - ②彼らは、当時の「イスラエルの残れる者(レムナント)」であった。

II. パートタイムの弟子となる。

- (1) 弟のアンデレがペテロをイエスに紹介した。
 - ①この時、ケパ(訳すとペテロ)という名が与えられた。
 - ②この時から、ペテロはイエスの弟子となる。

(2) イエスの活動を目撃した。

- ①カナの婚礼の奇跡
- ②過越の祭りでの宮清め
- ③ニコデモとの対話
- ④サマリヤの女との対話
- ⑤カペナウムの役人の息子の癒し
- ⑥ナザレでの伝道の失敗
- ⑦カペナウムへの移動
- ⑧大漁の奇跡を経験し、フルタイムの弟子として召される。

Ⅲ. フルタイムの弟子となる

(1) イエスの活動を目撃した。

- ①安息日に、カペナウムの会堂で悪霊を追い出す。
- ②姑の熱病の癒し
- ③ガリラヤ伝道を展開する。
- ④ツァラアト患者の癒し
- ⑤中風の人癒し
- ⑥マタイの召命
- ⑦パリサイ人との論争の激化
 - *断食論争
 - *安息日論争
 - *パリサイ人の殺意
- ⑧ガリラヤ湖畔での病人の癒しと悪霊の追い出し

(2) そして、12使徒のひとりに選ばれた。

Ⅳ. 使徒として召される。

1. イエスは、徹夜で祈って、多くの弟子たちの中から12人を選択した。

(1) マルコ3章は、3つの目的を記している。

- ①フルタイムでイエスのそばにいて、イエスに仕える。
- ②イエスがメシアであることと神の国を宣言するために、派遣される。
- ③彼らの宣言の信頼性を証明するために、悪霊を追い出す権威が与えられる。

2. ペテロは、最初に使徒として召された。

(1) 使徒集団の指導者であり、スポークスマンである。

①他の使徒たちもそれを認めていた。

(2) 常にイエスに従いたいと願っている。

①水の上を歩かせてくださいと言う願い

②自分に対して罪を犯している兄弟を、何度まで赦すべきかという質問

(3) 重要な局面では、ペテロ、ヤコブ、ヨハネの3人がイエスのそばにいる。

3. ペテロは、最初にイエスをメシアと認めた使徒である。

「シモン・ペテロが答えて言った。『あなたは、生ける神の御子キリストです』」

(マタ 16:16)

(1) この告白の意味

①私たちはみんな、広い意味では「神の子」である。

②「御子」とは、意味が非常に限定された言葉である。

③ペテロは、イエスが人であり、神であることを認めた。

④これを神学的には、「受肉」という。

(2) 受肉について

①受肉を認めない信仰は、いかなる意味においても、キリスト教とは言えない。

②神でなければ救えない。人でなければ死ねない。

③癒しの源は神である。癒しが起こる領域は人である。

(3) イエスは、ペテロのこの信仰告白の上に教会を建てると約束された。

4. ペテロは、大失敗をした使徒である(イスカリオテのユダを除いて)。

(1) 彼はイエスを3度否んだ。

①彼もまた、普通の人である。

(2) マルコの福音書がこの出来事を最も詳しく記録している。

①マルコはローマにおいてペテロの通訳であったという。

②ペテロの証言が、マルコに影響を与えている。

5. ペテロは、イエスの復活を最初に目撃した使徒である。

(1) 女たちが最初であるが、使徒集団の中では、ペテロが最初である。

- (2) 最も激しくイエスを拒否した人が、最初にイエスの復活を目撃した。
 - ①神の赦しと恵みの表れである。

V. 復活の目撃者となる。

- 1. 復活を認めない信仰は、いかなる意味においてもキリスト教ではない。
 - (1) 福音の3要素 (1 コリ 15 : 3~5)
 - ①使徒たちの言い伝え (伝統)
 - ②その中に、復活が含まれている。

- 2. ペテロには、「天の御国のかぎ」が与えられた (マタ 16 : 19)。
 - (1) 復活の目撃者として、「罪の赦しと死者の復活」を伝えるようになる。

- 3. 3種類の人たちのために、天の御国の扉を開いた。
 - (1) ユダヤ人のために
 - ①使 2 章 (ペンテコステのメッセージ)

 - (2) サマリヤ人のために
 - ①使 8 章 (ピリポの伝道のフォローアップ)

 - (3) 異邦人のために
 - ①使 10 章 (カイザリヤのコルネリオの救い)

- 4. これ以降、ペテロは表舞台からは姿を消す。
 - (1) 異邦人のための使徒パウロの時代に入る。
 - ①ペテロとパウロの間に、神学的矛盾はない。

結論：ペテロの人生から学ぶ

- 1. 求道者の皆さんへ
 - (1) イエスとの出会いが、人生を決める。
 - (2) 小さな始まりが、大きな結果につながる。

- 2. 靈的に幼いクリスチャンの皆さんへ
 - (1) パートタイムからフルタイムへの飛躍
 - (2) 私たちが信じている福音は、その他の教えよりも少し優れているというもので

はない。

(3) キリストの福音は、別次元の教えであり、唯一の救いの道である。

3. 霊的に成長したクリスチャンの皆さんへ

(1) 彼は、熱心さ(長所)と浅はかさ(短所)の両方を持っていた。

①彼の失敗のほとんどは、この性質によって説明できる。

(2) 神の恵みは、彼の短所を覆い、彼を作り変えた。

①神の恵みが、聖化のキーワードである。

(3) 彼は、2つの書簡を後世に遺した。

①これが、ペテロの完成形である。

②その一部を確認してみよう。

(4) 1ペテ1:3~9

「私たちの主イエス・キリストの父なる神がほめたたえられますように。神は、ご自分の大きなあわれみのゆえに、イエス・キリストが死者の中からよみがえられたことによって、私たちを新しく生まれさせて、生ける望みを持つようにしてくださいました。また、朽ちることも汚れることも、消えて行くこともない資産を受け継ぐようにしてくださいました。これはあなたがたのために、天にたくわえられているのです。あなたがたは、信仰により、神の御力によって守られており、終わりのときに現されるように用意されている救いをいただくのです。そういうわけで、あなたがたは大いに喜んでいます。いまは、しばらくの間、さまざまな試練の中で、悲しまなければならぬのですが、あなたがたの信仰の試練は、火で精錬されつつなお朽ちて行く金よりも尊く、イエス・キリストの現れるときに称賛と光栄と栄誉になることがわかります。あなたがたはイエス・キリストを見たことはないけれども愛しており、いま見てはいないけれども信じており、ことばに尽くすことのできない、栄えに満ちた喜びにおどっています。これは、信仰の結果である、たましいの救いを得ているからです」

(5) 私たちも、聖書的終末論から見た希望の告白をしようではないか。

「12使徒の選抜 - アンデレ-」

§ 053 マコ 3 : 13~19、ルカ 6 : 12~16

1. はじめに

(1) 宣教の拡大のために、使徒たちを選抜し、彼らを各地に派遣する段階になった。

- ①弟子とは、師から学ぶ者。権威の付与はない。
- ②使徒とは、遣わされた者。遣わす者から権威が与えられている。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

(§ 53) 徹夜の祈りの後、イエスは12使徒を選ぶ。

マコ 3 : 13~19、ルカ 6 : 12~16

(3) 12使徒のリストは、4ヶ所に出て来る。

- ①マコ 3章、マタ 10章、ルカ 6章、使 1章
- ②同名の者、別名を持つ者などがいて、非常に難解である。

(4) 使徒たちのリストを理解するためのヒント

- ①4人一組である。
- ②ペテロは常に最初に出て来る。
- ③ピリポ (5番目)、ヤコブ (9番目) は、必ず同じ位置に出て来る (リーダー)。
- ④1組目の3人 (ペテロ、ヤコブ、ヨハネ) は、特にイエスに近い位置にある。
- ⑤兄弟たちが3組いた。

*ペテロとアンデレ

*ヤコブとヨハネ

*アルパヨの子ヤコブと、イスカリオテのユダでない方のユダ

<12使徒の歌 (ルカ 6 : 14~16) >

- 1. イエスの使徒たち12人、彼らは全員20代、
1組4人で活動し、御国の福音伝えます。
- 2. ペテロが最初の長 (おさ) となり、弟アンデレそこに付き、
ヤコブとヨハネの兄弟も、御国のために仕えます。
- 3. ピリポの組の者たちは、バルトロ、別名ナタナエル、
マタイ、もとは取税人、トマス、あだ名がデドモ (双子) です。

4. ヤコブの父はアルパヨで、シモンの前歴熱心党、
別名タダイのユダがいて、裏切り者のユダ最後。

2. アウトライン：アンデレ

- (1) 概略の紹介
- (2) 兄のシモン・ペテロをイエスに紹介した。
- (3) 弁当を持っている少年をイエスに紹介した。
- (4) ギリシア人たちをイエスに紹介した。

3. 結論：アンデレの性質

このメッセージは、アンデレの人生から教訓を学ぼうとするものである。

I. 概略の紹介

- (1) ペテロの弟である。
 - ①有名な兄を持つ弟として、自分なりの性格を形成してきた。
- (2) 職業は漁師であった。
 - ①ベツサイダの出身
 - ②カペナウムに居住
 - ③ペテロと同居していた。

「イエスは会堂を出るとすぐに、ヤコブとヨハネを連れて、シモンとアンデレの家に入られた」(マコ1:29)
 - ④彼もまた、イエスの奇跡を目撃していた。
- (3) バプテスマのヨハネの弟子になった。

「その翌日、またヨハネは、ふたりの弟子とともに立っていたが、イエスが歩いて行かれるのを見て、『見よ、神の小羊』と言った」(ヨハ1:35~36)

 - ①ひとりは、アンデレである。
 - ②もうひとりの名は出ていないが、ヨハネである。
 - ③「見よ、神の小羊」という言葉を聞いたことが、彼の生涯を変えた。
- (4) 12使徒のリスト(4種類ある)の中では、必ず最初の4人に入っている。
 - ①オリーブ山の上で、終わりの時について質問している(マコ13:3~4)。

- ②ペテロ、ヤコブ、ヨハネ、アンデレ
- ③1組目の4人は、固定メンバーだったと思われる。

II. 兄のシモン・ペテロをイエスに紹介した。

「彼はまず自分の兄弟シモンを見つけて、『私たちはメシヤ(訳して言えば、キリスト)に会った』と言った。彼はシモンをイエスのもとに連れて来た。イエスはシモンに目を留めて言われた。『あなたはヨハネの子シモンです。あなたをケパ(訳すとペテロ)と呼ぶことにします』(ヨハ1:41~42)

- (1) 12使徒の中で、アンデレがイエスの最初の弟子になった。
 - ①彼の判断と行動が、それ以降のキリスト教の歴史を作ったと言える。
- (2) 兄のペテロをキリストに導いたのは、最高の奉仕である。
 - ①アンデレは、終生それを誇りとしたはずである。

III. 弁当を持っている少年をイエスに紹介した。

「弟子のひとりシモン・ペテロの兄弟アンデレがイエスに言った。『ここに少年が大麥のパンを五つと小さい魚を二匹持っています。しかし、こんなに大ぜいの人々では、それが何になりましょう』(ヨハ6:8~9)

- (1) 群衆の中で、誰が食物を持っているか調べた。
 - ①実践的な性格である。
- (2) 少年を見つけた。
 - ①大麥のパン5つと小さな魚2匹
 - ②庶民の食べ物であった。肉は高価であった。
- (3) 少年をイエスのもとに連れて来た。
 - ①少年はアンデレに心を開いた。
 - ②自分の食物をイエスに捧げたいと思うようになった。

IV. ギリシア人たちをイエスに紹介した。

「さて、祭りのとき礼拝のために上って来た人々の中に、ギリシヤ人が幾人かいた。この人たちがガリラヤのベツサイダの人であるピリポのところに来て、『先生。イエ

スにお目にかかりたいのですが』と言って頼んだ。ピリポは行ってアンデレに話し、アンデレとピリポとは行って、イエスに話した」(ヨハ12:20~22)

(1) ギリシア人たちは、異邦人の改宗者か、神を恐れる異邦人である。

①当時の認識では、異邦人が異邦人のままで救われるということはありません。

②アンデレは、異邦人伝道の先駆けとなっている。

(2) イエスはこの出来事によって、十字架の 때가近いことを再確認された。

「すると、イエスは彼らに答えて言われた。「人の子が栄光を受けるその時が来ました。まことに、まことに、あなたがたに告げます。一粒の麦がもし地に落ちて死ななければ、それは一つのままです。しかし、もし死ねば、豊かな実を結びます」(ヨハ12:23~24)

結論

5. まとめ：紹介者アンデレ

①12使徒の中では、脇役である。

②私たちの多くが脇役であるので、アンデレから学ぶことは多い。

③伝承では、アカヤのパトレという町で殉教の死を遂げたと言われる。

④X型の十字架は、後代の伝承である。

(1) 霊的感受性

①漁師の時代に、バプテスマのヨハネの弟子になっている。

②イエスがメシアであることを最初に認識した。

③イエスは、彼のそのような資質を見抜いて、使徒のひとりとして選抜した。

(2) 同情心

①困難な話しは、彼のところに来ることが多かった。

②話しやすい人であった。

(3) 伝道への情熱

①兄のペテロをイエスに紹介した。

②彼は終生、そのことを誇りとしたはずである。

③この伝道スタイルは、多くの者に参考になる。

(例話) フルクテンバウム師をキリストに導いたのは、Ruth Wardell 女史である。

「12使徒の選抜 - ヤコブ、ヨハネ -」

§ 053 マコ 3 : 13~19、ルカ 6 : 12~16

1. はじめに

(1) 宣教の拡大のために、使徒たちを選抜し、彼らを各地に派遣する段階になった。

①弟子とは、師から学ぶ者。権威の付与はない。

②使徒とは、遣わされた者。遣わす者から権威が与えられている。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

(§ 53) 徹夜の祈りの後、イエスは12使徒を選ぶ。

マコ 3 : 13~19、ルカ 6 : 12~16

(3) 12使徒のリストは、4ヶ所に出て来る。

①マコ 3章、マタ 10章、ルカ 6章、使 1章

②同名の者、別名を持つ者などがいて、非常に難解である。

<12使徒の歌 (ルカ 6 : 14~16) >

1. イエスの使徒たち12人、彼らは全員20代、

1組4人で活動し、御国の福音伝えます。

2. ペテロが最初の長(おさ)となり、弟アンデレそこに付き、

ヤコブとヨハネの兄弟も、御国のために仕えます。

3. ピリポの組の者たちは、バルトロ、別名ナタナエル、

マタイ、もとは取税人、トマス、あだ名がデドモ(双子)です。

4. ヤコブの父はアルパヨで、シモンの前歴熱心党、

別名タダイのユダがいて、裏切り者のユダ最後。

(4) 第1組に属するヤコブとヨハネの兄弟を取り上げる。

4. アウトライン

(1) 概略の紹介(両者に共通する)

(2) サマリヤの町に火を呼び下そうとした。

(3) 御国での地位を求めた。

- (4) イエスの側近3人の中にいた。
- (5) ヤコブは、最初の殉教者となった。
- (6) ヨハネは、初代教会のリーダーとして活躍した。

5. 結論

このメッセージは、ヤコブとヨハネの人生から教訓を学ぼうとするものである。

I. 概略の紹介

1. 父親はゼベダイである。

(1) ゼベダイの子ヤコブ

- ①アルパヨの子ヤコブ
- ②主の兄弟ヤコブ、などと混同しないこと。

(2) 父ゼベダイは漁師で、相当の資産家である。

「また少し行かれると、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネをご覧になった。彼らも舟の中で網を繕っていた。すぐに、イエスがお呼びになった。すると彼らは父ゼベダイを雇い人たちといっしょに舟に残して、イエスについて行った」(マコ1:19~20)

- ①彼らはカペナウムに住んでいた。
- ②父親は舟と雇い人を持っていた。
- ③彼らは、ペテロとアンデレに続いて召された。

(3) ゼベダイの一家は、ペテロとアンデレの兄弟たちとパートナーになっていた。

「シモンの仲間であったゼベダイの子ヤコブやヨハネも同じであった。イエスはシモンにこう言われた。『こわがらなくてもよい。これから後、あなたは人間をとるようになるのです』」(ルカ5:10)

- ①大規模な漁業をするためには、協力関係が必要である。

2. 母親はサロメである。

(1) イエスの母マリアの姉妹である(マタ27:56、マコ15:40、ヨハ19:25参照)。

- ①つまり、ヤコブとヨハネはイエスの従弟に当たる。

(2) サロメは、典型的なユダヤ人の母親である。

- ①熱心にイエスに仕えた。

「また、悪霊や病気を直していただいた女たち、すなわち、七つの悪霊を追い出していただいたマグダラの女と呼ばれるマリヤ、自分の財産をもって彼らに仕え

ているヘロデの執事クーザの妻ヨハンナ、スザンナ、そのほか大ぜいの女たちも
いっしょであった」(ルカ8:2~3)

「また、遠くのほうから見ていた女たちもいた。その中にマグダラのマリヤと、
小ヤコブとヨセの母マリヤと、またサロメもいた。イエスがガリラヤにおられた
とき、いつもつき従って仕えていた女たちである。このほかにも、イエスといっ
しょにエルサレムに上って来た女たちがたくさんいた」(マコ15:40~41)

②息子たちが御国で高い地位に着くことを願った(マタ20:20)。

3. 兄弟関係

(1) ヤコブは常にヨハネと並んでその名が出て来る。

①ヤコブの名が先に出て来るので、彼が兄であろう。

②ペテロとアンデレの場合とは異なり、弟の方が有名である。

(2) 裕福な家の息子で、イエスと親戚関係にある。

①ヤコブとヨハネの性質と行動パターンが見えてくる。

II. サマリヤの町に火を呼び下そうとした。

「さて、天に上げられる日が近づいて来たころ、イエスは、エルサレムに行こうとして御
顔をまっすぐ向けられ、ご自分の前に使いを出された。彼らは行って、サマリヤ人の町に
入り、イエスのために準備した。しかし、イエスは御顔をエルサレムに向けて進んでおら
れたので、サマリヤ人はイエスを受け入れなかった。弟子のヤコブとヨハネが、これを見
て言った。『主よ。私たちが天から火を呼び下して、彼らを焼き滅ぼしましょうか』。し
かし、イエスは振り向いて、彼らを戒められた。そして一行は別の村に行った」

(ルカ9:51~56)

1. サマリヤ人はイエスを受け入れなかった。

(1) エルサレムに上る途上にあつたから

2. ヤコブとヨハネは激怒した。

(1) イエスを思う心

①特権意識も混在している。

(2) 「天から火を呼び下して」

①復讐の言葉である。

②エリヤの前例がある。

*50人隊の隊長とその部下が、2度にわたって焼かれた。

*2列1:10

*2列1:12

3. イエスは平和の人である。

- (1) 彼らを戒めた。
- (2) 別の村に行った。

III. 御国での地位を求めた。

「さて、ゼベダイのふたりの子、ヤコブとヨハネが、イエスのところに来て言った。『先生。私たちの頼み事をかなえていただきたいと思います』。イエスは彼らに言われた。『何をしてほしいのです』。彼らは言った。『あなたの栄光の座で、ひとりを先生の右に、ひとりを左にすわらせてください』。しかし、イエスは彼らに言われた。『あなたがたは自分が何を求めているのか、わかっていないのです。あなたがたは、わたしの飲もうとする杯を飲み、わたしの受けようとするバプテスマを受けることができますか』。彼らは『できます』と言った。イエスは言われた。『なるほどあなたがたは、わたしの飲む杯を飲み、わたしの受けるべきバプテスマを受けはします。しかし、わたしの右と左にすわることは、わたしが許すことではありません。それに備えられた人々があるのです』。十人の者がこのことを聞くと、ヤコブとヨハネのことで腹を立てた」(マコ 10:35~41)

1. 母親のサロメが主導権を取っている(マタ 20:20~28)。

- (1) イエスとの親戚関係を利用したのであろう。

2. イエスは、父なる神の御心に判断を委ねた。

- (1) イエスは、彼らに受難の預言を与えた。
- (2) 彼らは、安易に「できます」と答えた。
- (3) 他の弟子たちは、腹を立てた。

IV. イエスの側近3人の中にいた。

1. ペテロ、ヤコブ、ヨハネの3人は、イエスの側近であった。

2. 彼らは、3つの重要な出来事を目撃した。

- (1) ヤイロの娘の蘇生(マコ 5:37、ルカ 8:51)
- (2) イエスの変貌(マタ 17:1、マコ 9:2、ルカ 9:28)
- (3) ゲツセマネの園での祈り(マタ 26:37、マコ 14:33)

V. ヤコブは、最初の殉教者となった。

「そのころ、ヘロデ王は、教会の中のある人々を苦しめようとして、その手を伸ばし、ヨハネの兄弟ヤコブを剣で殺した。それがユダヤ人の気に入ったのを見て、次にはペテロをも捕らえにかかった。それは、種なしパンの祝いの時期であった」(使12:1~3)

1. 紀元42~44年頃

- (1) ヘロデ・アグリッパ1世(ヘロデ大王の孫)
- (2) 新約聖書に記録されている唯一の使徒の殉教の死

2. ヤコブは、その行動的な性格のゆえに狙われたのであろう。

- (1) ユダヤ人はそれを喜んだ。

VI. ヨハネは、初代教会のリーダーとして活躍した。

1. ペテロと行動をともにしている。

- (1) 美しの門での、生まれつき足のなえた人の癒し
- (2) サンヘドリンでの信仰の告白
- (3) サマリヤ人の回心を確認する旅で、ペテロに同行している。
*かつてはサマリヤの町に火を下そうとしたのに、心が変化している。
- (4) 兄のヤコブの殉教以降、聖書にはヨハネの名は登場しなくなる。

2. 伝承

- (1) ヨハネは、小アジアのエペソに移り住んだ。
- (2) そこから、パトモス島に流された。
*皇帝ドミティアヌス(81~96年)の頃
*ここで黙示録が書かれた。
- (3) その後エペソに戻り、そこで死んだ。
*トラヤヌスが皇帝になって(98年)から

結論:

1. ヤコブとヨハネの性質

- (1) 短気、排他的、成功志向

「ゼベダイの子ヤコブとヤコブの兄弟ヨハネ、このふたりにはボアネルゲ、すなわち、雷の子という名をつけられた」(マコ3:17)

- ① アラム語で「ボアネルゲ」
- ② マルコはそれを「雷の子」と訳した。

- (2) ヨハネの排他的な気質

「ヨハネが答えて言った。『先生。私たちは、先生の名を唱えて悪霊を追い出している者を見ましたが、やめさせました。私たちの仲間ではないので、やめさせたのです』。しかしイエスは、彼に言われた。『やめさせることはありません。あなたがたに反対しない者は、あなたがたの味方です』(ルカ9:49~50)

- ①悪霊の追い出しは、使徒職の証明である。
- ②他の者が悪霊の追い出しをすることに、危機感を覚えた。

(3) イエスは彼らのそのような性質を受け入れたが、喜んではおられなかった。

- ①特に、成功志向は、使徒としてふさわしくない性質であった。
- ②ヨハネはいつも、自分はイエスから愛されていると感じていた。

2. ヤコブとヨハネの生涯の終え方

(1) ヤコブは最初に死ぬ使徒であり、ヨハネは最後に死ぬ使徒である。

- ①2人の寿命を足して、2で割ればバランスが取れる。
- ②しかしこれは、人間の思いであり、神の計画ではない。

(2) ヤコブは天国への一番槍となった。

- ①彼の殉教の死は、イエスの預言の成就である。
- ②彼の殉教の死は、活発な宣教につながっていく(使12:24)。
- ③死は悲劇であると同時に、最終的な解決でもある。

(3) ヨハネは、新約聖書の中の5つの書を著した。

- ①ヨハネの福音書
- ②ヨハネの手紙1~3
- ③黙示録
- ④ヨハネの完成形

「互いに愛し合うべきであるということは、あなたがたが初めから聞いている教えです。…私たちは、自分が死からいのちに移ったことを知っています。それは、兄弟を愛しているからです。愛さない者は、死のうちにとどまっているのです。兄弟を憎む者はみな、人殺しです。いうまでもなく、だれでも人を殺す者のうちに、永遠のいのちがとどまっていることはないのです。キリストは、私たちのために、ご自分のいのちをお捨てになりました。それによって私たちに愛がわかったのです。ですから私たちは、兄弟のために、いのちを捨てるべきです」

(1ヨハ3:11~16)

- ⑤主が愛された弟子

「12使徒の選抜 - ピリポ、ナタナエル」

§ 053 マコ 3 : 13~19、ルカ 6 : 12~16

1. はじめに

(1) 宣教の拡大のために、使徒たちを選抜し、彼らを各地に派遣する段階になった。

(2) 12使徒のリストは、4ヶ所に出て来る。

①マコ3章、マタ10章、ルカ6章、使1章

②同名の者、別名を持つ者などがいて、非常に難解である。

(3) A. T. ロバートソンの調和表

(§53) 徹夜の祈りの後、イエスは12使徒を選ぶ。

マコ3 : 13~19、ルカ6 : 12~16

(4) これまでに4人取り上げた。

①ペテロ : キーマン

②アンデレ : 紹介者

③ヤコブ : 天国への一番槍

④ヨハネ : 主が愛された弟子

(5) 今回は、第2組の最初の2人を取り上げる。

⑤ピリポと⑥ナタナエル (バルトロマイ)

<12使徒の歌 (ルカ6 : 14~16) >

1. イエスの使徒たち12人、彼らは全員20代、

1組4人で活動し、御国の福音伝えます。

2. ペテロが最初の長(おさ)となり、弟アンデレそこに付き、

ヤコブとヨハネの兄弟も、御国のために仕えます。

3. ピリポの組の者たちは、バルトロ、別名ナタナエル、

マタイ、もとは取税人、トマス、あだ名がデドモ(双子)です。

4. ヤコブの父はアルパヨで、シモンの前歴熱心党、

別名タダイのユダがいて、裏切り者のユダ最後。

2. アウトライン

(1) ピリポ

- ①概略の紹介
- ②5000人のパンの奇跡の場面
- ③ギリシア人訪問の場面
- ④最後の晩餐の場面

(2) ナタナエル

- ①概略の紹介
- ②イエスとの出会い
- ③復活のイエスとの出会い

3. 結論

- (1) ピリポの性格
- (2) ナタナエルの性格

このメッセージは、ピリポとナタナエルの人生から教訓を学ぼうとするものである。

I. ピリポ

1. 概略の紹介

(1) ベツサイダの出身

- ①「house of fishing」という意味
- ②カペナウムに近かったと思われる。
- ③ペテロとアンデレは、ベツサイダ出身であった。

(2) 恐らくバプテスマのヨハネの弟子であろう。

「その翌日、イエスはガリラヤに行こうとされた。そして、ピリポを見つけて『わたしに従って来なさい』と言われた」(ヨハ1:43)

- ①彼はイエスによって招かれて、イエスの弟子となった。
- ②ユダヤの習慣では、弟子志願者から申し出ることになっていた。
- ③彼はその招きにただちに応答した。

(3) 彼は、ナタナエルにイエスを紹介した。

「彼はナタナエルを見つけて言った。『私たちは、モーセが律法の中に書き、預言者

「**たちも書いている方に会いました。ナザレの人で、ヨセフの子イエスです」**」

(ヨハ1:45)

- ①アンデレとペテロの場合は、直感的、行動的である。
- ②ピリポの場合は、理性的である。
- ③「**モーセが律法の中に書き、預言者たちも書いている方**」
(例話) 第4回「再臨待望聖会」の講師セツ・ポステル師

(4) ピリポとナタナエルは、同時に出て来ることが多い。

- ①ふたりは似たようなタイプの人物である。

2. 5000人のパンの奇跡の場面

「**イエスは目を上げて、大ぜいの人々の群れがご自分のほうに来るのを見て、ピリポに言われた。『どこからパンを買って来て、この人々に食べさせようか』。もともと、イエスは、ピリポをためしてこう言われたのであった。イエスは、ご自分では、しようとしていることを知っておられたからである。ピリポはイエスに答えた。『めいめいが少しずつ取るにしても、二百デナリのパンでは足りません』**」(ヨハ6:5~7)

- (1) この質問は、ピリポを試すためのものであった。
 - ①ギリシア語で「ペイラゾウ」(英語で prove) である。
 - ②決して悪い意味ではない。
 - ③これは、弟子訓練の一環である。
- (2) なぜ試す必要があったのか。
 - ①ピリポの長所が欠点になっていたから。
 - ②理性中心の信仰からの脱却が必要。
- (3) ピリポの答えは、彼の特徴を反映させたものであった。
 - ①彼はすばやく計算した。
 - ②200デナリとは、労働者の200日分の賃金である。
- (4) 彼は、イエスの方法を目撃し、仰天したことであろう。

3. ギリシア人訪問の場面

「**さて、祭りのとき礼拝のために上って来た人々の中に、ギリシヤ人が幾人かいた。この人たちがガリラヤのベツサイダの人であるピリポのところに来て、『先生。イエスにお目にかかりたいのですが』**」と言って頼んだ。ピリポは行ってアンデレに話し、アンデレとピ

リポとは行って、イエスに話した」(ヨハ12:20~22)

- (1) ピリポという名前は、新約聖書に4人出て来る。
 - ①使徒ピリポ
 - ②ヘロデ大王とマリアンメの息子、ヘロデ・ピリポ(ヘロデヤの元夫)
 - ③ヘロデ大王とエルサレムのクレオパトラの息子、国主ピリポ
・ルカ3:1 「イツリヤとテラコニテ地方の国主」
 - ④伝道者ピリポ

- (2) ピリポというのはギリシア風の名前である。
 - ①ギリシア的なものとの関連性がうかがえる。
 - ②そう見ると、ギリシア人が最初にピリポに声をかけたのには理由がある。

- (3) ピリポの対応は、彼の性質を反映させたものである。
 - ①彼自身が、永遠の求道者なので、ギリシア人たちに同情できる。
 - ②しかし、思慮深くなり過ぎて、自分で判断できない。
 - ③それで直感型のアンデレに相談する。
(例話) 投資セミナーに出た無学な人

4. 最後の晩餐の場面

「ピリポはイエスに言った。『主よ。私たちに父を見せてください。そうすれば満足します』。イエスは彼に言われた。『ピリポ。こんなに長い間あなたがたといっしょにいるのに、あなたはわたしを知らなかったのですか。わたしを見た者は、父を見たのです。どうしてあなたは、「私たちに父を見せてください」と言うのですか』」(ヨハ14:8~9)

- (1) ピリポの願望は、彼の性質を反映させたものである。
 - ①恐らく彼は、神の顕現か、シャカイナグローリーを見たいと願ったのであろう。
 - ②人類の普遍的な願いである。
 - ③行き着く先は、偶像礼拝である。

- (2) イエスの回答は、驚愕の内容である。
 - ①イエスを見た者は、父を見たのである。

II. ナタナエル

1. 概略の紹介

- (1) ガリラヤのカナ出身

- ①恐らく漁師であろう。
- ②ヨハ21:2に登場する。
- ③ヨハネの福音書では、ナタナエル(神は与えた、God has given)で登場する。
- ④共観福音書では、バルトロマイ(トロマイの息子)で登場する。

(2) 福音書に彼が登場するのは、2箇所だけである。

2. イエスとの出会い

「ナタナエルは彼に言った。『ナザレから何の良いものが出るだろう』。ピリポは言った。『来て、そして、見なさい』。イエスはナタナエルが自分のほうに来るのを見て、彼について言われた。『これこそ、ほんとうのイスラエル人だ。彼のうちには偽りが無い』。ナタナエルはイエスに言った。『どうして私をご存じなのですか』。イエスは言われた。『わたしは、ピリポがあなたを呼ぶ前に、あなたがいちじくの木の下にいるのを見たのです』。ナタナエルは答えた。『先生。あなたは神の子です。あなたはイスラエルの王です』。イエスは答えて言われた。『あなたがいちじくの木の下にいるのを見た、とわたしが言ったので、あなたは信じるのですか。あなたは、それよりもさらに大きなことを見ることとなります』。そして言われた。『まことに、まことに、あなたがたに告げます。天が開けて、神の御使いたちが人の子の上を上り下りするのを、あなたがたはいまに見ます』

(ヨハ1:46~51)

(1) ピリポから紹介された。

- ①ナタナエルの反応は、「ナザレから何の良いものが出るだろう」であった。
- ②ガリラヤのカナ出身の彼は、ナザレのことをよく知っていた。

(2) イエスの応答

- ①「これこそ、ほんとうのイスラエル人だ。彼のうちには偽りが無い」
*最高のほめことばである。
- ②イエスは、彼がどこで何をしていたかを言い当てた。

(3) ナタナエルの信仰告白

- ①「先生。あなたは神の子です。あなたはイスラエルの王です」
- ②この時点での理解は不完全であるが、イエスがメシアであることは認めた。

3. 復活のイエスとの出会い

「この後、イエスはテベリヤの湖畔で、もう一度ご自分を弟子たちに現された。その現された次第はこうであった。シモン・ペテロ、デドモと呼ばれるトマス、ガリラヤのカナの

ナタナエル、ゼベダイの子たち、ほかにふたりの弟子がいっしょにいた」(ヨハ21:1~2)

- (1) ペテロ、アンデレ、ヤコブ、ヨハネが体験したことを、彼も体験した。
 - ①最初の出会いの時に語られたことばを、彼は体験した。
- (2) これ以外にも多くのことを体験したはずである。

結論：

1. ピリポは哲学者である。

- (1) 彼の長所は、知的、理性的であること(ギリシア的なものとの関連)
 - ①ナタナエルに対して説得力がある。
 - ②また、ギリシア人にもアピールする力がある。
- (2) 信じる前に、さまざまな角度から検証し、体験せねばならないタイプの人
 - ①決して悪いことではない。
 - ②しかし、それが彼の信仰の成長を阻んだ。
 - ③イエスの弟子訓練は、そこを修正するためのものであった。

(3) 復活のイエスの目撃者

- ①ヨハ20:24~25 トマスはいなかった。
- ②マタ28:16~20 大宣教命令を受けた。

②使1:13

「彼らは町に入ると、泊まっている屋上の間に上がった。この人々は、ペテロとヨハネとヤコブとアンデレ、ピリポとトマス、バルトロマイとマタイ、アルパヨの子ヤコブと熱心党员シモンとヤコブの子ユダであった」

2. ナタナエルはイスラエルの型である。

- (1) ナザレから出る者への懐疑心
- (2) イエス彼を、「まことのイスラエル人」(ヨハ1:47)(新共同訳)と呼ばれた。
 - ①彼が黙想していた箇所は、ヤコブがベテルで神と出会う箇所である。
- (3) 彼は、復活のイエスを顔と顔を合わせて対面した(ヨハ21:1~14)。
- (4) 彼の姿は、イスラエルの救いを祈るための動機付けとなる。
 - ①イエスを信じるユダヤ人は、「完成したユダヤ人」である。

「12使徒の選抜 - マタイ、トマス-」

§ 053 マコ 3 : 13~19、ルカ 6 : 12~16

1. はじめに

(1) 宣教の拡大のために、使徒たちを選抜し、彼らを各地に派遣する段階になった。

(2) 12使徒のリストは、4ヶ所に出て来る。

- ①マコ3章、マタ10章、ルカ6章、使1章
- ②同名の者、別名を持つ者などがいて、非常に難解である。
- ③4人一組で考えれば、分かりやすい。

(3) A. T. ロバートソンの調和表

(§ 53) 徹夜の祈りの後、イエスは12使徒を選ぶ。

マコ 3 : 13~19、ルカ 6 : 12~16

(4) これまでに6人取り上げた。

- ①ペテロ : キーマン
- ②アンデレ : 紹介者
- ③ヤコブ : 天国への一番槍
- ④ヨハネ : 主が愛された弟子
- ⑤ピリポ : 哲学者
- ⑥ナタナエル (バルトロマイ) : イスラエルの型

(5) 今回は、第2組の後半の2人を取り上げる。

- ⑦マタイと⑧トマス

<12使徒の歌 (ルカ 6 : 14~16) >

1. イエスの使徒たち12人、彼らは全員20代、
1組4人で活動し、御国の福音伝えます。
2. ペテロが最初の長(おさ)となり、弟アンデレそこに付き、
ヤコブとヨハネの兄弟も、御国のために仕えます。
3. ピリポの組の者たちは、バルトロ、別名ナタナエル、
マタイ、もとは取税人、トマス、あだ名がデドモ(双子)です。

4. ヤコブの父はアルパヨで、シモンの前歴熱心党、
別名タダイのユダがいて、裏切り者のユダ最後。

2. アウトライン

(1) マタイ

- ①概略の紹介
- ②召命を受けた場面
- ③食事会の場面

(2) トマス

- ①概略の紹介
- ②イエスとともに死のうとした場面
- ③イエスのことばを理解できないと言った場面
- ④イエスの復活を疑った場面

3. 結論

- (1) マタイの性格
- (2) トマスの性格

このメッセージは、マタイとトマスの人生から教訓を学ぼうとするものである。

I. マタイ

1. 概略の紹介

- (1) 4つのリストの中で、位置が変わる。
 - ①7番目か8番目
- (2) マタイという名の意味は、「ヤハウエからの贈り物」である。
 - ①アルパヨの子レビ(マコ2:14)とある。
 - ②このアルパヨは、9番目に出て来るヤコブの父アルパヨとは別人である。
 - ③当時は、2つの名前を持つ人がいた。
- (3) 今までに登場した使徒たちは、バプテスマのヨハネの弟子であった。
 - ①マタイは、バプテスマのヨハネの弟子ではなかった。

(4) 彼の職業は、取税人であった。

- ①カペナウムで関税(通行税)を徴収する取税人であった。
- ②ローマの官吏ではなく、国主ヘロデ・アンテパスに仕える取税人であった。
- ③税額を前納し、それ以降取り立てたものとの差額が、収入になった。

(5) 彼は相当な教育を受けていたであろう。

- ①アラム語
- ②ギリシア語

2. 召命を受けた場面

「イエスは、そこを去って道を通りながら、収税所にすわっているマタイという人をご覧になって、『わたしについて来なさい』と言われた。すると彼は立ち上がって、イエスに従った」(マタ9:9)

(1) マタイは、イエスの権威を認識した。

- ①突然起こったことではない。
- ②収税所は、情報の収集センターのようなものである。
- ③さらに、イエスは取税人や罪人たちの間で評判がよかった。

(2) これは、徹底的な従順である。

- ①ルカ5:28
「するとレビは、何もかも捨て、立ち上がってイエスに従った」
- ②マタイの福音書には、「何もかも捨て」という言葉はない。
- ③マタイにとっては、後戻りできない献身であった。

3. 食事会の場面

「イエスが家で食事の席に着いておられるとき、見よ、取税人や罪人が大ぜい来て、イエスやその弟子たちといっしょに食卓に着いていた」(マタ9:10)

(1) それからしばらくして、マタイは自宅で宴会を開いた。

- ①霊的新生を感謝する会である。
- ②古いマタイには考えられないような、気前のよいことが起こっている。

(2) 招かれた客

- ①イエスと使徒たち6人
- ②取税人や罪人(娼婦)が大ぜい

(3) 「いっしょに食卓に着いていた」

- ①ユダヤの視点では、食事をともにすることは、親密な交わりを意味する。
- ②マタイは取税人としての特権や富を捨てたが、イエスを友とするようになった。

(4) これ以降、マタイの記録は福音書には出てこない。

II. トマス

1. 概略の紹介

(1) 彼もまた、バプテスマのヨハネの弟子ではない。

(2) トマスという名前の意味

- ①双子（彼には双子の兄弟がいたのであろう）
- ②ギリシア語でデドモという。
- ③恐らく、ギリシア人との付き合いではデドモと呼ばれていたのであろう。

2. イエスとともに死のうとした場面

「そこで、イエスはそのとき、はっきりと彼らに言われた。『ラザロは死んだのです。わたしは、あなたがたのため、すなわちあなたがたが信じるためには、わたしがその場に居合わせなかったことを喜んでいますが。さあ、彼のところへ行きましょう』。そこで、デドモと呼ばれるトマスが、弟子の仲間に言った。「私たちも行って、主といっしょに死のうではないか」(ヨハ11:14~16)

(1) ラザロは死んだ。

- ①イエスがその場に居合わせなかったのは、よいことであった。
- ②ラザロを生き返らせることで、人々の信仰をかき立てることができるから。

(2) しかし、イエスがユダヤ地方に行くのは、危険なことであった。

- ①指導者たちが、イエスの命を狙っている。
- ②もしイエスが逮捕され、殺されたなら、弟子たちも同じ目に会うだろう。

(3) トマスは、他の弟子たちを鼓舞してこう言った。

「私たちも行って、主といっしょに死のうではないか」

- ①彼には、イエスに対する熱烈な愛と献身の思いがある。
- ②しかし、これは信仰の言葉ではない。
- ③これは、絶望の言葉である。

④情熱が、ペテロとは正反対の方向に向かう。

(例話) 盤面を見ているだけで、負けたと思った棋士

(4) トマスにはその意識がなかったが、ここにはアイロニー(皮肉)がある。

①彼は、イエスの贖罪の死の意味を理解していなかった。

・イエスは、ラザロの命と引き換えに、自分の命を犠牲にしようとしていた。

②後に、ほとんどの弟子たちが、殉教の死を遂げるようになる。

3. イエスのことばを理解できないと言った場面

『わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです。わたしの行く道はあなたがたも知っています』。トマスはイエスに言った。『主よ。どこへいらっしゃるのか、私たちにはわかりません。どうして、その道が私たちにわかりましょう』。イエスは彼に言われた。『わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません』(ヨハ14:3~6)

(1) 弟子は、ラビの教えが分からない場合は、質問をした。

①ここでは、12使徒全員が不思議に感じている。

②トマスが、群れを代弁して質問している。

(2) イエスの素晴らしい回答が与えられた。

①イエスはこれまでも、弟子たちに救いの道を教えて来られた。

②再度、確認される。

・救いの道はひとつだけである。

・イエスだけが救いの道である。

・イエスは、道、真理、いのち、そのものである。

4. イエスの復活を疑った場面

「十二弟子のひとりで、デドモと呼ばれるトマスは、イエスが来られたときに、彼らと一緒にはいなかった。それで、ほかの弟子たちが彼に『私たちは主を見た』と言った。しかし、トマスは彼らに『私は、その手に釘の跡を見、私の指を釘のところに差し入れ、また私の手をそのわきに差し入れてみなければ、決して信じません』と言った。八日後に、弟子たちはまた室内におり、トマスも彼らと一緒にはいた。戸が閉じられていたが、イエスが来て、彼らの中に立って『平安があなたがたにあるように』と言われた。それからトマスに言われた。『あなたの指をここに付けて、わたしの手を見なさい。手を伸ばして、わたしのわきに差し入れなさい。信じない者にならないで、信じる者になりなさい』。ト

マスは答えてイエスに言った。『私の主。私の神』。イエスは彼に言われた。『あなたはわたしを見たから信じたのですか。見ずに信じる者は幸いです』(ヨハ20:24~29)

- (1) トマスがなぜ他の使徒たちといっしょにいなかったのかは、分からない。
- (2) トマスの疑い
 - ①他の使徒たちが何かを見たことは否定していない。
 - ②彼は、イエスが復活の体を持たれたことを信じなかった。
 - ③それを信じるためには、触って確かめてみる必要がある。
- (3) イエスは、その言葉を聞いておられた。
 - ①8日目に、復活のイエスが現れた。
 - ②トマスは、「私の主。私の神」と叫んだ。
 - ・これは、トマスの信仰告白である。

結論：

1. マタイは、「神からの贈り物」である。
 - (1) 彼は、人々の富を奪うために、自分の才能を用いていた。
 - (2) しかし、その才能は「神からの贈り物」であることに気づいた。
 - (3) そして、彼自身が、他の人に対して「神からの贈り物」となった。
 - (4) 福音書にはわずかしか登場しないが、イエスの行いと教えを観察していた。
 - (5) そして、マタイの福音書を後世に遺した。
2. トマスは、「懐疑論者」である。
 - (1) 情熱家である。
 - (2) しかし、うつ気質の人であり、ものごとを否定的に見る人である。
 - (3) その彼の人格もまた、完成へと導かれた。
 - (4) ヨハネの福音書の2つの流れ
 - ①不信仰の拡大→最後は、イエスを十字架に付ける。
 - ②弟子たちの信仰の成長→トマスの信仰告白がクライマックスになっている。
 - (5) トマスが疑った結果、私たちが信じることができるようになった。
 - ①復活を信じるかどうかは、弟子たちを信頼するかどうかにかかっている。
 - (6) 彼は、ガリラヤ湖畔で復活のイエスに出会った中のひとりである(ヨハ21章)。
 - (7) 彼は、聖霊降臨を待つ信者の群れの中にいる(使1:13)。

「12使徒の選抜 - アルパヨの子ヤコブ、熱心党员シモン、別名タダイのユダ-」

§ 053 マコ 3 : 13~19、ルカ 6 : 12~16

1. はじめに

(1) 宣教の拡大のために、使徒たちを選抜し、彼らを各地に派遣する段階になった。

(2) これまでに8人取り上げた。

- ①ペテロ：キーマン
- ②アンデレ：紹介者
- ③ヤコブ：天国への一番槍
- ④ヨハネ：主が愛された弟子
- ⑤ピリポ：哲学者
- ⑥ナタナエル（バルトロマイ）：イスラエルの型
- ⑦マタイ：神からの贈り物
- ⑧トマス：懐疑論者

(3) 今回は、第3組の最初の3人を取り上げる。

⑨アルパヨの子ヤコブ、⑩熱心党员シモン、⑪別名タダイのユダ

<12使徒の歌（ルカ6：14~16）>

- 1. イエスの使徒たち12人、彼らは全員20代、
1組4人で活動し、御国の福音伝えます。
- 2. ペテロが最初の長（おさ）となり、弟アンデレそこに付き、
ヤコブとヨハネの兄弟も、御国のために仕えます。
- 3. ピリポの組の者たちは、バルトロ、別名ナタナエル、
マタイ、もとは取税人、トマス、あだ名がデドモ（双子）です。
- 4. ヤコブの父はアルパヨで、シモンの前歴熱心党、
別名タダイのユダがいて、裏切り者のユダ最後。

2. アウトライン

- (1) アルパヨの子ヤコブ
- (2) 熱心党员シモン

(3) 別名タダイのユダ

3. 結論：3人の人生から、教訓を学ぶ。

このメッセージは、アルパヨの子ヤコブ、熱心党员シモン、別名タダイのユダの人生から教訓を学ぼうとするものである。

I. アルパヨの子ヤコブ

1. ゼベダイの子ヤコブ(天国への一番槍)とは別人

2. 小ヤコブとは別人

(1) マコ 15 : 40

「また、遠くのほうから見ていた女たちもいた。その中にマグダラのマリヤと、小ヤコブとヨセの母マリヤと、またサロメもいた」

①小ヤコブとは、若い方のヤコブという意味である。

②小ヤコブとアルパヨの子ヤコブを同一人物と見る見解もある。

3. 主イエスの弟ヤコブとは別人

(1) イエスの奉仕に懐疑的な態度を取った。

①他の家族も同様であった。

(2) 後に信仰者となる。

①イエスの復活の目撃者となった(1コリ 15 : 7)。

②エルサレム教会の指導者となった(ガラ 2 : 9)。

③ガラ 1 : 18~19

「それから三年後に、私はケパをたずねてエルサレムに上り、彼のもとに十五日間滞在しました。しかし、主の兄弟ヤコブは別として、ほかの使徒にはだれにも会いませんでした」

④ヤコブは使徒と呼ばれている。

(3) ヤコブの手紙の著者である。

4. アルパヨの子ヤコブ

(1) 4つのリストの中で、常に9番目に登場する。

①3組目のリーダーであろう。

(2) イエス召天後、エルサレムの屋上の間に集っている(使1:13)。

①これ以外に情報はない。

II. 熱心党员シモン

1. 概略の紹介

(1) 恐らく、他の弟子たちと同様にガリラヤ出身であろう。

(2) 政治的には、極右である。

①今でいうテロリストである。

2. 熱心党について

(1) 使5:36~37

「というのは、先ごろチウダが立ち上がって、自分を何か偉い者のように言い、彼に従った男の数が四百人ほどありましたが、結局、彼は殺され、従った者はみな散らされて、あとかたもなくなりました。その後、人口調査のとき、ガリラヤ人ユダが立ち上がり、民衆をそそのかして反乱を起こしましたが、自分は滅び、従った者たちもみな散らされてしまいました」

①尊敬されている律法学者でパリサイ人のガマリエルの発言

②使徒たちの活動は、そのままにしておけという助言

(2) 2つのローマへの抵抗運動

①チウダの反乱

*400人ほどが殺された。

*詳細は分からない。

②ガリラヤ人ユダによる反乱

*人口調査のときに蜂起した(紀元6年、皇帝アウグスト、総督クレニオ)。

*増税に対する反乱である。

*ガリラヤのガマラ出身のユダが蜂起した。

*2000人が十字架に付けられた。

*ガリラヤの首都セフォリスが滅ぼされ、住民は奴隷に売られた。

(3) ガリラヤ人ユダの抵抗運動が、熱心党の始まりとなった。

- ①ガリラヤ人は熱しやすく、勇猛である。
 - ②それ以降、ユダの抵抗運動を継承する人々が、地下運動を展開した。
- (4) 彼らもまたメシアを待望するユダヤ人たちであった。
- ①武力によってメシア預言の成就を早めようとした点に問題があった。
- (5) シモンは、熱心党の革命運動から手を引き、イエスの神の国運動に参加した。

Ⅲ. 別名タダイのユダ

1. 3つの呼び名

- (1) イスカリオテでないユダ (ヨハ 14 : 22)
- ①イスカリオテのユダは、最後の晩餐の場を離れた。
 - ②もうひとりのユダとイスカリオテのユダを混同しないために明記されている。

- (2) タダイ (マコ 3 : 18、マタ 10 : 3)

- (3) ヤコブの子ユダ (ルカ 6 : 16、使 1 : 13)

- ①直訳は「ヤコブのユダ」である。
- ②「ヤコブの兄弟ユダ」とも訳せる。
- ③彼は、アルパヨの子ヤコブと兄弟である。
- ④彼は、ユダの手紙の著者である。

「イエス・キリストのしもべであり、ヤコブの兄弟であるユダから、父なる神に
あつて愛され、イエス・キリストのために守られている、召された方々へ」

(ユダ 1)

2. イエスに質問する場面

「『わたしの戒めを保ち、それを守る人は、わたしを愛する人です。わたしを愛する人は
わたしの父に愛され、わたしもその人を愛し、わたし自身を彼に現します。』 イスカリオ
テでないユダがイエスに言った。『主よ。あなたは、私たちにはご自分を現そうとしなが
ら、世には現そうとなさらないのは、どういうわけですか』 (ヨハ 14 : 21~22)

- (1) イエスの約束
- ①復活 (イエスは信者にのみ現れた)
 - ②聖霊降臨 (聖霊は信者にのみ下った)

(2) ユダの疑問

- ①彼もまた、王としてのメシア像を思い描いていた。
- ②世にご自身を現し、ローマの圧制からイスラエルを解放するメシアを期待した。
- ③彼は、イエスがなぜ自分自身を世に現そうとしないか疑問に感じた。

(3) イエスの回答は、助け主に到来に関するものであった。

結論：

1. アルパヨの子ヤコブ：隠れた偉人

- (1) 記録がほとんどない。
- (2) 貢献しなかったわけではない。
- (例話) 聖地旅行で、認知症の人をケアしていた婦人

2. 熱心党员シモン：転向者

- (1) 「転向」とは、弾圧により政治的立場や主義主張を変えること。
- (2) シモンの転向は、正しかった。
- (3) 熱心党の抵抗運動は、紀元66年の反乱に至る。
- (4) この反乱は、紀元70年のエルサレム崩壊とユダヤ人の世界離散をもたらした。
- (5) 現在のイスラエル国家が滅びない理由は、メシアニックジューの存在にある。
- (6) イスラエルの希望は、メシアにある。
- (7) クリスマンもまた、「転向者」である。

3. 別名タダイのユダ：ライオンハート

- (1) 彼は本来神の国のために戦う人物であるが、大いなる誤解の中にいた。
- (2) 彼は、啓示された真理のために戦うキリストの兵士となった。
- (3) **ユダの手紙3~4節**

「愛する人々。私はあなたがたに、私たちがともに受けている救いについて手紙を書こうとして、あらゆる努力をしていましたが、聖徒にひとたび伝えられた信仰のために戦うよう、あなたがたに勧める手紙を書く必要が生まれました。というのは、ある人々が、ひそかに忍び込んで来たからです。彼らは、このようなさばきに会うと昔から前もってしるされている人々で、不敬虔な者であり、私たちの神の恵みを放縦に変えて、私たちの唯一の支配者であり主であるイエス・キリストを否定する人たちです」

「12使徒の選抜 - イスカリオテのユダ-」

§ 053 マコ 3 : 13~19、ルカ 6 : 12~16

1. はじめに

(1) 12使徒のメッセージの最後

(2) これまでに11人取り上げた。

- ①ペテロ：キーマン
- ②アンデレ：紹介者
- ③ヤコブ：天国への一番槍
- ④ヨハネ：主が愛された弟子
- ⑤ピリポ：哲学者
- ⑥ナタナエル（バルトロマイ）：イスラエルの型
- ⑦マタイ：神からの贈り物
- ⑧トマス：懐疑論者
- ⑨アルパヨの子ヤコブ：隠れた偉人
- ⑩熱心党员シモン：転向者
- ⑪別名タダイのユダ：ライオンハート

(3) 今回は、第3組の最後に出て来るイスカリオテのユダを取り上げる。

- ①ユダがなぜイエスを裏切ったのかは、謎である。
- ②そのため、さまざまな意見が出てくる。

<12使徒の歌（ルカ6：14~16）>

- 1. イエスの使徒たち12人、彼らは全員20代、
1組4人で活動し、御国の福音伝えます。
- 2. ペテロが最初の長（おさ）となり、弟アンデレそこに付き、
ヤコブとヨハネの兄弟も、御国のために仕えます。
- 3. ピリポの組の者たちは、バルトロ、別名ナタナエル、
マタイ、もとは取税人、トマス、あだ名がデドモ（双子）です。
- 4. ヤコブの父はアルパヨで、シモンの前歴熱心党、
別名タダイのユダがいて、裏切り者のユダ最後。

2. アウトライン

- (1) 概略
- (2) 裏切りに至るステップ
- (3) 裏切り行為
- (4) 裏切りの結果

3. 結論：イスカリオテのユダの人生から、教訓を学ぶ。

このメッセージは、イスカリオテのユダの人生から教訓を学ぼうとするものである。

I. 概略

1. 呼び名

「イエスはイスカリオテ・シモンの子ユダのことを言われたのであった。このユダは十二弟子のひとりであったが、イエスを売ろうとしていた」(ヨハ6:71)

(1) イスカリオテ・シモンの子

- ①ユダの父親の名は、イスカリオテ・シモンである。
- ②「イスカリオテ」とは、「カリオテ出身の人」という意味である。
- ③彼の父親も彼自身も、カリオテ出身である。
- ④それで、イスカリオテ・ユダという。

(2) カリオテ

- ①ユダ(イスラエル南部)の町である。
- ②ヨシ15:25に、この町の名が登場する。

(3) 以上のことから、イスカリオテのユダだけがガリラヤ人でなかったことが分かる。

- ①彼は、都会人である。
- ②一般的に、ユダの住民はガリラヤ人たちを見下していた。
- ③ユダにも、そのような傾向があったと思われる。

2. イエスによる選抜

(1) イエスは、ユダの内に使徒としての可能性を見たはずである。

- ①でなければ、彼を選ぶことはなかったであろう。

(2) ユダは、使徒集団の中で重要な役割を果たしていた。

- ①彼は、金入れ(財布)を預かっていた(ヨハ12:6、13:29)。
- ②つまり、彼には管理能力があったのである。
- ③集団の財布を委ねられるのは、人格的に最も信頼されている者である。

(3) イスカリオテのユダは、12使徒のリストの中では常に最後に出て来る。

II. 裏切りに至るステップ

1. はじめに

- (1) 使徒の召命から裏切りに至るまでの情報は、ヨハネの福音書だけに出て来る。
- (2) イスカリオテのユダは、最初から邪悪な性格を宿していたと思われる。
 - ①徐々にその邪悪な性格が明らかになっていく。
 - ②イエスのことばは、時とともにユダの性格を鮮明に指摘するようになっていく。

2. 命のパンのメッセージが語られた場面

(1) ヨハ6:35

「イエスは言われた。『わたしがいのちのパンです。わたしに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者はどんなときにも、決して渴くことはありません』」

- ①5千人のパンの奇跡の後、カペナウムで語られたメッセージである。
- ②「天から下って来た」とは、自分は人間以上の存在であるという宣言である。
- ③ユダヤ人たちは、イエスをヨセフの子としてしか認識していなかった。
- ④彼らは、イエスの処女降誕に関しても、イエスの受肉に関しても無知であった。

(2) ヨハ6:41~42

「ユダヤ人たちは、イエスが『わたしは天から下って来たパンである』と言われたので、イエスについてつぶやいた。彼らは言った。『あれはヨセフの子で、われわれはその父も母も知っている、そのイエスではないか。どうしていま彼は「わたしは天から下って来た」と言うのか』」

- ①このメッセージの後で、弟子たちのうちの多くの者が離れ去った(ヨハ6:66)。
- ②さまざまな理由が考えられる。
 - *イエスが、彼らの期待するメシア像とは異なる方向に歩んでいるから。
 - *イエスのメッセージ(悔い改めと信仰)が気に入らなかったから。
 - *イエスの超自然的な自己宣言が信じられなかったから。

(3) ヨハ6:64

『しかし、あなたがたのうちには信じない者がいます。』——イエスは初めから、信じない者がだれであるか、裏切る者がだれであるかを、知っておられたのである——」

- ①イエスは、公生涯の最初から弟子の中で信じない者が出ることを知っていた。
- ②また、裏切り者がだれであるかを知っていた。
- ③ペテロは、イエスへの信頼をただちに告白した。

(4) ヨハ6:70~71

「イエスは彼らに答えられた。『わたしがあなたがた十二人を選んだのではありませんか。しかしそのうちのひとりには悪魔です』。イエスはイスカリオテ・シモンの子ユダのことを言われたのであった。このユダは十二弟子のひとりであったが、イエスを売ろうとしていた」

- ①イエスは、12人の中のひとりには悪魔だと言われた。
- ②悪魔の手先として働いているという意味であろう。
- ③ここでもイエスは、イスカリオテのユダの名を上げてはいない。
- ④ヨハネが説明を付け加えている。
- ⑤この段階で、ユダの心はすでにイエスから離れていた。
- ⑥彼が依然として使徒集団に留まるのは、別の動機から。
- ⑦彼は、忠実な使徒の仮面をかぶって活動を継続する。

3. マリアによる油注ぎの場面

(1) ヨハ12:3~5

「マリヤは、非常に高価な、純粋なナルドの香油三百グラムを取って、イエスの足に塗り、彼女の髪の毛でイエスの足をぬぐった。家は香油のかおりでいっぱいになった。ところが、弟子のひとりで、イエスを裏切ろうとしているイスカリオテ・ユダが言った。『なぜ、この香油を三百デナリに売って、貧しい人々に施さなかったのか』」

- ①マリアは、イエスの埋葬の準備をしていた。
- ②ユダは、その気前の良い行いに文句を言った。
- ③「なぜ、貧しい人々に施さなかったのか」とは、正論である。
- ④マタ26:8では、「弟子たちは憤慨して言った」となっている。
- ⑤マコ14:4では、「何人かの者が憤慨して互いに言った」となっている。

(2) ヨハ12:6

「しかしこう言ったのは、彼が貧しい人々のことを心に掛けていたからではなく、彼は盗人であって、金入れを預かっていたが、その中に収められたものを、いつも盗ん

でいたからである」

- ①これもまた、ヨハネによる注釈である。
- ②使徒たち全員が、同じ財布に金を入れた。
- ③それは、貧しい人々のためにも用いられた。
- ④ユダは、盗人である。また発覚していないが。
- ⑤ユダは、共通の財布から、少額を習慣的にかすめていた。

III. 裏切り行為

1. 姿を消す

(1) ユダは、収入源が断たれる時が近いことを認識した。

- ①イエスは、自らの死について語った。
- ②イエスは、悪の力が働いていることを知っていた。
- ③使徒集団から去る時が来ている。

(2) マタ 26 : 14~16

「そのとき、十二弟子のひとりで、イスカリオテ・ユダという者が、祭司長たちのところへ行って、こう言った。『彼をあなたがたに売るとしたら、いったいいくらくれますか』。すると、彼らは銀貨三十枚を彼に支払った。そのときから、彼はイエスを引き渡す機会をねらっていた」

- ①単にイエスの居所を教えるだけでなく、裁判で証人になることを提案した。
- ②銀貨30枚は奴隷を贖うための値段である(出21:32)。
- ③その価値を正確に言い当てるのは困難である。
 - * どの銀貨か明確には書かれていない。
 - * 購買力は時代によって変化する。
 - * ユダにとっては取引に値する額である。
- ④両者の間に契約が結ばれ、その場で報奨金の支払いが行われた。

(3) ルカ 22 : 3

「さて、十二弟子のひとりで、イスカリオテと呼ばれるユダに、サタンが入った」

- ①ユダは自分の心にサタンを招き入れたと言える。

2. 姿を現す

(1) ヨハ 13 : 2~4

「夕食の間のことであった。悪魔はすでにシモンの子イスカリオテ・ユダの心に、イ

エスを売ろうとする思いを入れていたが、イエスは、父が万物を自分の手に渡されたことと、ご自分が神から出て神に行くことを知られ、夕食の席から立ち上がって、上着を脱ぎ、手ぬぐいを取って腰にまとわれた」

- ①ユダが最後の晚餐(過越の食事)の席に同席している。
- ②彼は悪魔(サタン)の支配下にあった。
- ③イエスは、弟子たちの足を洗われた。

(2) ヨハ13:10~11

「イエスは彼に言われた。『水浴した者は、足以外は洗う必要がありません。全身きよいのです。あなたがたはきよいのですが、みながそうではありません』。イエスはご自分を裏切る者を知っておられた。それで、『みながきよいのではない』と言われたのである」

- ①イエスは、ユダが自分を裏切ることを知っておられた。
- ②ヨハネは、そのことを解説している。

(3) ヨハ13:21

「イエスは、これらのことを話されたとき、霊の激動を感じ、あかしして言われた。『まことに、まことに、あなたがたに告げます。あなたがたのうちのひとりが、わたしを裏切ります』

- ①イエスは、この時点でも、ユダという名を出していない。
- ②ペテロがヨハネに指示を出し、ヨハネがイエスに、裏切り者は誰かと聞いた。

(4) ヨハ13:26~27

「イエスは答えられた。『それはわたしがパン切れを浸して与える者です』。それからイエスは、パン切れを浸し、取って、イスカリオテ・シモンの子ユダにお与えになった。彼がパン切れを受けると、そのとき、サタンが彼に入った。そこで、イエスは彼に言われた。『あなたがしようとしていることを、今すぐしなさい』

- ①イエスの回答は、ヨハネだけが聞くことができた。
- ②パン切れを与えるのは、主人のもてなしの行為である。友情のしるし。
- ③友情のしるしが、裏切り者を特定する方法となった。
- ④サタンは、ついにユダを完全に支配するようになった。
- ⑤しかし、ヨハネでさえもイエスのことばの意味を理解できなかった。

3. 再度姿を消す

(1) ヨハ16:30

「ユダは、パン切れを受けるとすぐ、外に出て行った。すでに夜であった」

- ①イエスのユダに対することばは、神の計画を予定通りに進める力となった。
 - *イエスは、過越の祭りの間に十字架にかかる必要があった。
 - *祭司長たちは、祭りの後でイエスを殺そうとしていた。
- ②ユダは、新約のしるしとしてのパンとぶどう酒を受ける前に、そこを去った。
- ③ヨハネの福音書の中で、最も暗い箇所である。

4. 再度姿を現す

(1) ヨハ 18 : 2~3

「ところで、イエスを裏切ろうとしていたユダもその場所を知っていた。イエスがたびたび弟子たちとそこで会合されたからである。そこで、ユダは一隊の兵士と、祭司長、パリサイ人たちから送られた役人たちを引き連れて、ともしびとたいまつと武器を持って、そこに来た」

- ①イエスは、ゲツセマネの園で祈っておられた。
- ②そこに裏切り者のユダがやって来た。
 - *およそ 600 人のローマ兵
 - *祭司長、パリサイ人たちから派遣された役人たち
 - *たいまつと武器
- ③ユダは、イエスに口づけした (マタ 26 : 49)。

IV. 裏切りの結果

1. 後悔

(1) マタ 27 : 3~4

「そのとき、イエスを売ったユダは、イエスが罪に定められたのを知って後悔し、銀貨三十枚を、祭司長、長老たちに返して、『私は罪を犯した。罪のない人の血を売ったりして』と言った。しかし、彼らは、『私たちの知ったことか。自分で始末することだ』と言った」

- ①ユダは自責の念にかられたが、これは救いに至る悔い改めではない。
- ②彼は、銀貨 30 枚を返した。
- ③しかし、祭司長、長老たちは、取り合わなかった。
- ④彼らは、罪の道では友人であったが、義の道では他人同士である。

2. 自殺

(1) マタ 27 : 5~7

「それで、彼は銀貨を神殿に投げ込んで立ち去った。そして、外に出て行って、首をつった。祭司長たちは銀貨を取って、『これを神殿の金庫に入れるのはよくない。血の代価だから』と言った。彼らは相談して、その金で陶器師の畑を買い、旅人たちの墓地にした。それで、その畑は、今でも血の畑と呼ばれている」

- ①ユダは、銀貨を神殿に投げ込んで、別の場所で首をつって死んだ。
- ②自殺は、ユダヤ教では最悪の行為である。
- ③マタイによる皮肉
 - *祭司長たちは、大切なことは無視して、小さなことにこだわっている。
 - *イエスを殺すのは平気、血の代価を神殿の金庫に入れるのには抵抗がある。
- ④彼らは、陶器師の畑を買い、旅人たちの墓地にした。

結論：主の愛を拒み続けた人

1. 誤った見解（すべてユダの性格を上に取り上げるものである）

- (1) ユダは、愛国者であった。
 - ①イエスを、ユダヤ人の伝統を破壊する敵と見なした。
 - ②そのため、イエスを殺すことに手を貸した。
 - ③しかし、祭司長たちはユダを拒否したので、この説は成り立たない。
- (2) ユダは、イエスのメシアとしての啓示を早めるために、イエスを売り渡した。
 - ①ユダは、政治的メシア像を持っていた。
 - ②イエスは、いつまで経ってもその方向に動かないので、ユダの方から動いた。
 - ③ユダが自殺したのは、イエスに失望したからである。
 - ④しかし、イエスのユダを叱責する厳しいことばは、この説を否定している。
- (3) ユダは、裏切り者になるように定められていた。
 - ①神の計画があるのだから、こうなるのは当然である。
 - ②ユダの裏切りがなかったら、イエスは十字架にかかっていなかった。
 - ③これは、予定論の極端な適用である。
 - ④神の主権と人間の自由意志の問題は、簡単に解決できるようなものではない。
 - ⑤神の主権を認めると同時に、ユダの責任を問わなければならない。

2. 正しい見解（ユダには責任がある）

- (1) ユダの罪の進展に注目すべきである。
 - ①ユダには、最初から、能力とともに心の汚れ（盗人の性質）があった。

- ②彼は、共通の財布から少しずつ盗み始めた。
- ③彼は、イエスのことばを聞き、地上的成功の見込みがないことを感じ始めた。
 - *命のパンのメッセージ
- ④彼は、もっと盗み始めた。
- ⑤彼は、イエスから心が離れていても、それを隠して使徒集団の中にとどまった。
- ⑥彼は、イエスの叱責のことばを聞いて、サタンを心に迎えた。
 - *ベタニヤでの油注ぎ
- ⑦彼は、銀貨30枚でイエスを売り渡す約束をした。
- ⑧彼は、「今しなさい」というイエスのことばを聞いて、裏切りを実行に移した。
 - *最後の晚餐
- ⑨彼は、逮捕する者たちをゲツセマネの園に導いてきた。
- ⑩彼は、口づけでイエスを売り渡した。

(2) イエスの愛に注目すべきである。

- ①イエスは、決して裏切り者がユダであることを明かさなかった。
- ②最後の晚餐では、ユダはイエスの左の席にいた(2番目の席)。
- ③イエスは、ユダにしか分からないように、パンを与えた。
- ④イエスは、最後までユダに悔い改めの機会を与え続けた。
- ⑤ユダは、後悔はしたが、悔い改めはしなかった。
 - *彼は、自らの罪責感を処理しようとした。
 - *しかし、イエスとの関係を修復しようとはしなかった。
- ⑥主イエスを信頼するなら、赦されない罪はない。

「山上の垂訓」

§ 054 マタ 5 : 1～2、ルカ 6 : 17～19

1. はじめに

(1) 呼び名について

- ①マタ 5 : 1～8 : 1 は、通常、「山上の垂訓 (説教)」と呼ばれる。
- ②しかし、この名称は、説教が語られた場所を指しているだけである。
 - *ルカの福音書では、「平らな所」となっている。
- ③本当は、内容を表現する命名の方がよい。
 - *「メシアによる律法解釈」
 - *「律法を正しく解釈するメシアの権威」

(2) マタイとルカの比較

- ①山の上か、平らな所か。
- ②始まりと終わりが、似ている。
- ③全体の流れも似ている。
- ④ルカは、マタイの読者にとってのみ関係があると思われる箇所を省いている。
- ⑤さらにルカは、先に行ってから取り上げようとしているテーマも省いている。
- ⑥イエスは、同じメッセージを何度も繰り返されたと思われる。
- ⑦マタイとルカは、基本的には同じ内容を取り上げている。

(3) 今後の解説のプラン

- ①山上の垂訓の全体を概観する (総論)。
- ②テーマにそって内容を確認する (各論)。

(4) 文脈の重要性

2. アウトライン

- (1) 歴史的な文脈
- (2) 宗教的な文脈
- (3) メシアの生涯の文脈

3. 結論 : 山上の垂訓とは何か。

このメッセージは、山上の垂訓の本質について学ぼうとするものである。

I. 歴史的文脈

1. 中間時代

(1) 旧約聖書と新約聖書の間の時代

- ①約 350 年間
- ②非常に重要な時代であるが、一般的にそのような認識はない。
- ③アレクサンドロスの世界征服によるギリシア語の普及
- ④旧約聖書もまた、ギリシア語に訳された (70 人訳。LXX)。

(2) 支配者の変遷

- ①ペルシヤ
- ②アレクサンドロスのギリシア
- ③シリアのセレウコス朝
- ④独立の時代 (ハスモン朝)
- ⑤ローマ

2. メシア待望の時代

(1) 民衆は、ローマの圧制によって苦しめられていた。

- ①ローマの圧制から自分たちを解放してくれるメシアの到来を待ち望んでいた。
- ②メシア的王国の樹立を待ち望んでいた。
- ③ダビデ時代の再来

(2) 民衆は、パリサイ的律法 (口伝律法) に縛られていた。

- ①過去数百年の間に発展した口伝律法が、民衆の日常生活を縛っていた。
- ②彼らは、メシアがパリサイ的律法による義を認めてくれることを期待していた。

II. 宗教的文脈

1. 律法の時代と恵みの時代 (新約時代) の対比

(1) ディスペンセーションナリストでなくても、律法の時代と恵みの時代を区別する。

- ①その区別がないなら、今でもモーセの律法を実行せねばならないことになる。
- ②食物規定、衣服の規定
- ③「あなたがたの頭のびんの毛をそり落としてはならない。ひげの両端をそこな
ってはならない」(レビ 19 : 27)
- ④多くの場合、クリスチャンはモーセの律法の適用に関して混乱している。

(2) 律法の時代とは、モーセ契約が機能している時代である。

①イスラエルの民は、モーセの律法に従って生きるように命じられていた。

(3) 新約時代とは、新しい契約が機能している時代である。

①新しい契約の預言は、エレ31:31~37にある。

「見よ。その日が来る。——【主】の御告げ——その日、わたしは、イスラエルの家とユダの家とに、新しい契約を結ぶ。その契約は、わたしが彼らの先祖の手を握って、エジプトの国から連れ出した日に、彼らと結んだ契約のようではない。わたしは彼らの主であったのに、彼らはわたしの契約を破ってしまった。——

【主】

の御告げ——彼らの時代の後に、わたしがイスラエルの家と結ぶ契約はこうだ。——【主】の御告げ——わたしはわたしの律法を彼らの中に置き、彼らの心にこれを書きしるす。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる」

(エレ31:31~33)

(4) 新約時代は、メシアの死とともに始まった。

①山上の垂訓が語られた時は、まだ律法の時代であった。

②従って、山上の垂訓は新約時代について論じたものではない。

③それは、メシアによるモーセの律法の正しい解釈である。

2. 山上の垂訓の中心聖句は、マタ5:20である。

「まことに、あなたがたに告げます。もしあなたがたの義が、律法学者やパリサイ人の義にまさるものでないなら、あなたがたは決して天の御国に、入れません」

(1) 「律法学者やパリサイ人の義」とは、口伝律法を行うことによる義である。

(2) 「律法学者やパリサイ人の義にまさる義」とは、信仰による義である。

(3) イエスは、2つのことを否定された。

①イエスは、パリサイ人によるモーセの律法の解釈を否定された。

②口伝律法を行うことによって天の御国に入ることができるという教えを、否定された。

III. メシアの生涯の文脈

1. イエスは、旧約聖書の預言の成就として来られた。

(1) ユダヤの祭りは、メシアの生涯を予表している。

「山上の垂訓」

- ①春の祭り(4つ)は、メシアの初臨を予表している。
- ②中間期は、教会時代を予表している。
- ③秋の祭り(3つ)は、メシアの再臨を予表している。

(2) イエスは、モーセの律法の教えに従って生活された。

- ①この時代、モーセの律法は、依然として有効であった。
- ②イエスは、自分がメシアであることを民衆に示しておられた。
- ③この時点では、イスラエルの民はまだイエスのメシア性を拒否するまでには至っていない。

2. 山上の垂訓が語られたタイミング

(1) 安息日論争があった直後のことである。

- ①口伝律法を巡る、パリサイ人とイエスの論争
- ②その中でも、安息日論争が特に激しかった。

(2) さらに、12使徒が選抜された直後のことである。

- ①イエスは、12使徒と弟子たちに山上の垂訓を語られた。
- ②彼らはすでに、信仰により義とされている。

(3) イエスに対する興味が、非常に高まった時期である。

- ①イスラエルだけでなく、異邦人の地域からも人々が集まって来た。

結論：山上の垂訓とは何か。

1. 現代のクリスチャンに適用すべきものではない。

- (1) もしそうなら、私たちは、613のモーセの律法を実行せねばならなくなる。
- (2) ただし、山上の垂訓の中には、新約時代の律法に登場する要素もある。
 - ①新約時代の律法とは、「キリストの律法」(ガラ6:2)のことである。

2. 救いの道を示したものではない。

- (1) もしそれが救いの道を示したものであるなら、業による救いが可能となる。
- (2) しかし、聖書が教える方法は、常に、信仰と恵みによるものである。
- (3) 人が救われるのは、いつの時代でも、信仰と恵みによる。
- (4) この時代は、イエスをメシアとして信じるのが信仰の内容である。
- (5) 八福の教えは、信仰による義を獲得した人たちの特徴を述べたものである。

3. 律法の義に関するメシアの解釈である。

(1) パリサイ人による律法の義の解釈との対比がある。

①パリサイ人は、律法の外面的な服従にこだわった。

②イエスは、内面的服従と、外面的服従の両方を強調した。

(2) 鍵になる言葉

「昔の人々に、『人を殺してはならない。人を殺す者はさばきを受けなければならない』と言われたのを、あなたがたは聞いています。しかし、わたしはあなたがたに言います。兄弟に向かって腹を立てる者は、だれでもさばきを受けなければなりません。兄弟に向かって『能なし』と言うような者は、最高議会に引き渡されます。また、『ばか者』と言うような者は燃えるゲヘナに投げ込まれます」(マタ5:21~22)

①「〇〇と言われたのを、あなたがたは聞いています」：口伝律法のこと

②「わたしはあなたがたに言います」：メシアによるモーセの律法の解釈

4. 新約時代の信仰の内容

(1) 人は、福音の3要素を受け入れ、イエスに信頼を置いて救われる。

(2) 私たちの内には、神の作品を改善しようとする性質がある。

①何かを付け加えようとする。

②これは、改悪どころか、福音の破壊である。

(3) 付加物なしに、福音をそのまま受け入れる人だけが、神の義を手に入れることができる。

①特に、ロードシップ論に注意する必要がある。

「八福の教え」

§ 054 マタ 5 : 3~12、ルカ 6 : 20~26

1. はじめに

(1) 文脈の重要性

- ①文脈を無視して、山上の垂訓のある言葉を取り出すことが余りにも多い。
- ②イエスは、神の国の福音をもたらされた。
- ③当時のユダヤ人たちの関心事
 - *自分の義は、神の国に入るにふさわしいものか。
- ④彼らが教えられていた唯一の義は、パリサイ人の義であった。
 - *口伝律法を行うことによる義である。
- ⑤イエスは、信仰による義を紹介された。

(2) 山上の垂訓の本質

- ①山上の垂訓は、「メシアによる律法解釈」である。
 - *パリサイ人は、律法の外面的な服従にこだわった。
 - *イエスは、内面的服従と、外面的服従の両方を強調した。
- ②山上の垂訓は、救いの道を示したものではない。
 - *もしそれが救いの道を示したものであるなら、業による救いが可能となる。
 - *聖書が教える方法は、常に、信仰と恵みによるものである。
- ③山上の垂訓は、現代のクリスチャンに適用すべきものではない。
 - *もしそうなら、私たちは、613のモーセの律法を実行せねばならなくなる。
 - *ただし、山上の垂訓から多くの教訓を学ぶことができる。
 - *新約時代の律法とは、「キリストの律法」(ガラ6:2)のことである。
 - *山上の垂訓の教えの多くが、「キリストの律法」に登場する。
 - *十戒の内九戒までが、「キリストの律法」に登場する。

(3) 八福の教えの本質

- ①信仰による義を獲得した人たちの特徴(すでに得た)。
 - *イエスをメシアと信じる信仰
- ②信仰による義を獲得した人たちが目指すべき目標(完成への途上にある)。
- ③神に全面的に信頼した結果、内面の変化を経験する。
- ④外面のみを強調するパリサイ的義とは異なる。

2. アウトライン

- (1) 神の前での謙遜
- (2) 悔い改め
- (3) 神の恵みへの信頼
- (4) 神の義への渴望
- (5) 責任転嫁からの脱却
- (6) 信仰の結果
- (7) キリストの紹介
- (8) 迫害

3. 結論：八福の教えと新約時代のクリスチャン

このメッセージは、八福の教えの本質について学ぼうとするものである。

I. 神の前での謙遜

「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人たちのものだから」(3節)

- (1) 物質的貧しさとは違う。
 - ①経済的弱者、社会的弱者は、神の愛の対象である。
 - ②と同時に、裕福な者も神に愛されている。

- (2) 内面的な貧しさである。
 - ①現実的に、客観的に、自己評価ができていない人
 - ②自分の義に信頼を置いていない人
 - ③傲慢(プライド)とは正反対の性質を持った人
 - ④神にのみ信頼を置いている人

(例話) 綿畑に投資した人が財産すべてを失った。

II. 悔い改め

「悲しむ者は幸いです。その人たちは慰められるから」(4節)

- (1) 人生で味わうさまざまな悲しみとは違う。

- (2) 罪に関する悲しみのことである。
 - ①罪に対する感受性が豊かな人

②結果として、神に対して罪を告白する人

(3) イザ 61 : 3

「シオンの悲しむ者たちに、灰の代わりに頭の飾りを、悲しみの代わりに喜びの油を、憂いの心の代わりに賛美の外套を着けさせるためである。彼らは、義の樅の木、栄光を現す【主】の植木と呼ばれよう」

- ①シオンの悲しむ者たちとは、信仰による義人たちである。
- ②彼らは、頭に灰をかぶり、断食をし、喪に服したような状態である。
- ③神は彼らに喜びを与え、彼らを祝福される。
- ④彼らは、「義の樅の木、栄光を現す【主】の植木」と呼ばれる。

Ⅲ. 神の恵みへの信頼

「柔和な者は幸いです。その人たちは地を受け継ぐから」(5節)

(1) モーセのような人(民 12 : 3)

「モーセはその人となり柔和なこと、地上のすべての人にまさっていた」(口語訳)

(2) 主イエスのような人(マタ 11 : 29)

「わたしは柔和で心のへりくだった者であるから、わたしのくびきを負うて、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたの魂に休みが与えられるであろう」(口語訳)

(3) 静かで、動じることのない強さを持った人

- ①神への絶対的な信頼がある。
- ②神の権威を認め、それに従っている。
- ③神の恵みによって生きている。
- ④自分を実態以上に大きく見せる必要はない。

(4) 詩 37 : 11

「しかし柔和な者は国を継ぎ、豊かな繁栄をたのしむことができる」(口語訳)

Ⅳ. 神の義への渴望

「義に飢え渴く者は幸いです。その人たちは満ち足りるから」(6節)

(1) 飢え渴きは人間の本能である。

- ①食物

- ②愛
- ③神

(2) ここでは、靈的な意味で、飢え渴きという言葉が使用されている。

- ①完全な基準に基づいて生きたいという願い
- ②この文脈では、モーセの律法が完全な基準である。
- ③聖い生活への渴望

V. 責任転嫁からの脱却

「あわれみ深い者は幸いです。その人たちはあわれみを受けるから」(7節)

- (1) 自分に厳しく、他者にやさしい人
 - ①他者の必要に敏感に答える人

(例話) 罪を犯した直後のアダムとエバ

(2) 詩 18 : 25

「あなたは、恵み深い者には、恵み深く、全き者には、全くあられ、」

(3) 箴 11 : 17

「いつくしみある者はおのれ自身に益を得、残忍な者はおのれの身をそこなう」
(口語訳)

VI. 信仰の結果

「心のきよい者は幸いです。その人たちは神を見るから」(8節)

- (1) これこそ、信仰による救いの結果である。
 - ①魂の奥底に真理が宿っている。
- (2) 正しい動機で行動を起こしている。
 - ①神に喜ばれる行為を行っている。
 - ②これは、パリサイ人の義と大いに異なる点である。
- (3) 「神を見る」
 - ①イエスが神であることを認識する。

②神を実感として感じるようになる。

(4) 詩24:3~5

「だれが、【主】の山に登りえようか。だれが、その聖なる所に立ちえようか。手がきよく、心がきよらかな者、そのたましいをむなしいことに向けず、欺き誓わなかった人。その人は【主】から祝福を受け、その救いの神から義を受ける」

VII. キリストの紹介

「平和をつくる者は幸いです。その人たちは神の子どもと呼ばれるから」(9節)

- (1) 政治的平和とは無関係の箇所である。
- (2) キリストを伝達する人
- (3) 信者同志の間に平和をつくる人

VIII. 迫害

「義のために迫害されている者は幸いです。天の御国はその人たちのものだから。わたしのために人々があなたがたをののしり、迫害し、ありもしないことで悪口を浴びせるとき、あなたがたは幸いです。喜びなさい。喜びおどきなさい。天ではあなたがたの報いは大きいから。あなたがたより前にいた預言者たちを、人々はそのように迫害したのです」

(10~12節)

- (1) 常に神の基準によって生きている人
 - ①たとえ迫害が来ても、生き方を曲げない。
- (2) イエスをメシアと信じたユダヤ人にとっては、迫害は現実的なことであった。
- (3) 2テモ3:12

「確かに、キリスト・イエスにあって敬虔に生きようと願う者はみな、迫害を受けま

す」

結論：

1. 八福の教えは、信仰による義を得た者の特徴を示している。

(1) と同時に、信仰者が生きるべき目標を示している。

2. 八福の教えを実行することによって、義とされるのではない。

(1) いかなる律法を行ったとしても、それによって義とされることはない。

3. では、そのようにして八福の教えを実行することができるのか。

(1) 悲劇的信仰者の姿

①最大の悲劇は、律法を行うことによって聖化を達成しようとする事。

②この理解は、クリスチャン生活を律法主義的生活に追い込む。

(2) ロマ書7章クリスチャンとロマ書8章クリスチャンの違い

①前者は、自分で自分に重荷を課している。

②その人が苦しむのは、自然の成り行きである。

③後者は、聖霊の導きで歩む。

④その結果として、祝福と平安が与えられる。

(3) ロマ8:3~4

「肉によって無力になったため、律法にはできなくなっていることを、神はしてくださいました。神はご自分の御子を、罪のために、罪深い肉と同じような形でお遣わしになり、肉において罪を処罰されたのです。それは、肉に従って歩まず、御霊に従って歩む私たちの中に、律法の要求が全うされるためなのです」

①キリストを信じた瞬間、私たちは罪に対して死に、解放された。

②その結果、御霊に従って歩む自由が与えられた。

③御霊に従って歩むなら、結果的に律法の要求が全うされる。

④これが聖化である。

⑤すべての鍵は、「位置的真理」を思い出すことである。

(4) 昇天のイエスは、大祭司として執りなしをしておられる。

「メシアの義とパリサイ人の義」

§ 054 マタ 5 : 13~20

1. はじめに

(1) 山上の垂訓の本質

①山上の垂訓は、「メシアによる律法解釈」である。

*パリサイ人は、律法の外面的な服従にこだわった。

*イエスは、内面的服従と、外面的服従の両方を強調した。

②山上の垂訓は、救いの道を示したものではない。

③山上の垂訓は、現代のクリスチャンに適用すべきものではない。

(2) 山上の垂訓の構成

*ATロバートソンは、8つに区分している。

①八福の教え (5 : 3~12)

②メシアの義とパリサイ人の義 (5 : 13~20)

③メシアの義の6つの例 (5 : 21~48)

④義の実行の3つの例 (6 : 1~18)

⑤神への献身 (6 : 19~34)

⑥他者を裁くこと (7 : 1~6)

⑦祈りと黄金律 (7 : 7~12)

⑧たとえ話による結論 (7 : 13~8 : 1)

2. アウトライン

(1) 真の信仰者の特徴 (5 : 13~16)

①地の塩

②世界の光

(2) メシア来臨の目的 (5 : 17~20)

①NOT

②BUT

3. 結論

(1) モーセの律法とメシアニックジュー

(2) モーセの律法と異邦人信者

このメッセージは、メシアの義とパリサイ人の義について学ぼうとするものである。

I. 真の信仰者の特徴 (5:13~16)

1. 地の塩 (13節)

「あなたがたは、地の塩です。もし塩が塩けをなくしたら、何によって塩けをつけるのでしょうか。もう何の役にも立たず、外に捨てられて、人々に踏みつけられるだけです」

(1) この教えは、八福の教えの延長線上にある。

- ①信仰による義を獲得した人たちの8つの特徴 (すでに得た)。
- ②信仰による義を獲得した人たちが目指すべき目標 (完成への途上にある)。
- ③信仰による義は、外面のみを強調するパリサイ的義とは異なる。
- ④真の信仰者は、地の塩となる。

(2) 塩の役割

①味付けに役立つ

- * 憐み、励まし、祝福
- * 生きることが楽しくなる。
- * 信者同志の交わり (コイノニア)

②腐敗を防止する。

- * 塩は食物保存のために用いられた。
- * イスラエルは、真の信仰者の存在のゆえに破壊から守られた。
- * エリヤの時代の7000人
- * レムナント (イスラエルの残れる者)
- * 常に社会の中の少数者である。
- * 現代のメシアニックジューもまた、レムナントである。

(3) 塩が塩けをなくすことはあるのか。

(1) 当時の塩は、さまざまな不純物を含んだ塊であった。

- ①塩分が抜けて、不純物だけが残ることがあった。
- ②その場合は、塩味を回復する方法はない。
- ③塩けをなくした不純物の塊は、別の用途に用いるしかない。
- ④それは、道路を舗装するための材料となる。

(2) 私たちへの適用は多い。

- ①妥協的なクリスチャンは、迫害に合わないが、軽蔑される。

2. 世界の光 (14~16節)

「あなたがたは、世界の光です。山の上にある町は隠れる事ができません。また、あかりをつけて、それを柵の下に置く者はありません。燭台の上に置きます。そうすれば、家にいる人々全部を照らします。このように、あなたがたの光を人々の前で輝かせ、人々があなたがたの良い行いを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようにしなさい」

(1) 光は、暗やみで方向性を示してくれる。

①真の信者は、人々に霊的方向性を示す存在となる。

②「山の上にある町」

*エルサレムへの言及か。

*ガリラヤ湖畔の町々への言及か。

(2) 真の信者は、良い行いによって方向性を示す。

①良い行いは、救いの条件ではなく、救いの結果である。

(3)「天におられるあなたがたの父をあがめるようにしなさい」

①神を「父」と呼ぶのは、山上の垂訓で15回ある(ここが最初)。

②真の信者は、天の父に似てくる。

(4) ヨハ8:12

「イエスはまた彼らに語って言われた。『わたしは、世の光です。わたしに従う者は、決してやみの中を歩むことがなく、いのちの光を持つのです』」

①イエスが真の光である。

②私たちは、イエスの光を反射させる存在である。

③ヨハ12:35~36、12:46

II. メシア来臨の目的 (5:17~20)

1. NOT

「わたしが来たのは律法や預言者を廃棄するためだと思っはなりません」(17節a)

(1)「律法や預言者」とは、旧約聖書全体のことである。

①イエスが公生涯を送っておられた頃は、まだモーセの律法は有効であった。

②イエスは、モーセの律法に完全に従われた。

③イエスは、革命児ではない。

(2) パリサイ人たちは、モーセの律法を破壊していた。

- ①口伝律法(ミシュナ)を付加することは、モーセの律法の破壊につながる。
- ②当時、口伝律法はまだ成文化に至っていない。

2. BUT

「**廃棄するためではなく、成就するために来たのです。まことに、あなたがたに告げます。天地が滅びうせない限り、律法の中の一点一画でも決してすたれることはありません。全部が成就されます。だから、戒めのうち最も小さいものの一つでも、これを破ったり、また破るように人に教えたりする者は、天の御国で、最も小さい者と呼ばれます。しかし、それを守り、また守るように教える者は、天の御国で、偉大な者と呼ばれます**」

(17b~19節)

(1) メシア来臨の目的のひとつは、モーセの律法の成就である。

- ①イエスの死が有効である理由は、イエスが律法を完全に守ったことにある。

(2) イエスは、モーセの律法に最高の価値を置かれた。

- ①「まことに」は、「アーメン」である。

*マタイの福音書では、31回出て来る。

*ヨハネの福音書では、「アーメン、アーメン」と2回繰り返される。

*これから述べることが重要であることを示している。

- ②「**律法の中の一点一画でも決してすたれることはありません**」

*「**一点**」とは、ヘブル語アルファベットの「ユッド」。4分の1のサイズ。

*「**一画**」とは、角ばった角のこと。丸くなると別の文字になる。

- ③口伝律法は成文化されていないので、律法の中には含まれない。

(3) この聖句は、モーセの律法の永続性を教えているのではない(訳文の比較)。

「**天地が滅びうせない限り、律法の中の一点一画でも決してすたれることはありません。全部が成就されます**」(新改訳)

「**すべてのことが実現し、天地が消えうせるまで、律法の文字から一点一画も消え去ることはない**」(新共同訳)

- ①メシアはモーセの律法を完ぺきに実行した。

- ②それゆえ、メシアの死は、罪の贖いの死として有効であった。

- ③メシアの死によって、モーセの律法は成就し、廃棄された。

(4) 山上の垂訓の中心聖句

「**まことに、あなたがたに告げます。もしあなたがたの義が、律法学者やパリサイ人**

の義にまさるものでないなら、あなたがたは決して天の御国に、入れません」(20節)

- ①律法学者やパリサイ人の義とは、口伝律法を行うことによって得る義である。
- ②それよりも勝る義とは、信仰による義である。
- ③どちらの義を採用するかで、倫理的、道徳的生活が違って来る(次回の学び)。

結論:

1. モーセの律法とメシアニックジャー

(1) メシアニックジャーは、イスラエル社会ではアウトサイダー扱いをされている。

- ①物理的迫害(放火、傷害、脅迫など)。
- ②精神的迫害(職業上うける差別、交流の断絶など)

(2) しかし彼らは、現代のレムナントである。

- ①彼らの存在のゆえに、神はイスラエルを守られる。
- ②このことを信仰的に確信することは、内的にエネルギーとなる。

(3) メシアニックジャーには、律法を守る自由も、守らない自由もある。

- ①この場合の律法とは、多くの場合、ユダヤ教の伝統である。
 - *つまり、口伝律法である。
 - *ユダヤ教の食物規定の中心は、肉と乳製品の区別である。
- ②もし律法を守ることが救いの条件になっているなら、それは間違っている。
- ③律法を守ることが救いの条件でないなら、それはそのユダヤ人の自由である。

(4) 一般的傾向

- ①救われる前に厳格に律法を守っていたユダヤ人は、守らなくなる。
- ②救われる前に無関心であったユダヤ人は、律法を守るようになる。

2. モーセの律法と異邦人信者

「しかし私たちは知っています。律法は、もし次のことを知っていて正しく用いるならば、良いものです。すなわち、律法は、正しい人のためにあるのではなく、律法を無視する不従順な者、不敬虔な罪人、汚らしい俗物、父や母を殺す者、人を殺す者、不品行な者、男色をする者、人を誘拐する者、うそをつく者、偽証をする者などのため、またそのほか健全な教えにそむく事のためにあるのです」(1テモ1:8~10)

(1) 「律法は、もし次のことを知っていて正しく用いるならば、良いものです」

- ①2つのことを知る必要がある。
- (2) モーセの律法は、未信者には効果を発揮する。
 - ①律法を実行しようとする人は、必ず失敗する。
 - *私たちは、こうすべきである。
 - *私たちは、そうしなかった。
 - *私たちには、できない。
 - *We ought, we haven't, we can't.
 - ②律法は、私たちをメシアに導く家庭教師(養育係)である。
- (3) モーセの律法は、信者にとっては無効になった。
 - ①「律法は、正しい人のためにあるのではなく」
 - ②メシアを信じた私たちは、家庭教師から独立した。
 - ③しかし、新約時代の信者が無法な生活に入ったということではない。
 - ④私たちは、「キリストの律法」の下にある。
 - *1 コリ 9 : 21
 - *ガラ 6 : 2
 - ⑤モーセの律法には、罰が伴っていた。
 - *メシアの死は、その罰を身に受けた死であった。
 - *その結果、私たちはその罰から解放された。
 - ⑥キリストの律法には、罰は伴っていない。
 - *罪の種を蒔けば、自ら刈り取りをすることになるのは事実である。
 - *キリストの律法は、信者の霊的成長のために与えられている。

「メシアの義の6つの例」

§ 054 マタ 5 : 21~48

1. はじめに

(1) 山上の垂訓の構成

* ATロバートソンは、8つに区分している。

- ① 八福の教え (5 : 3~12)
- ② メシアの義とパリサイ人の義 (5 : 13~20)
- ③ メシアの義の6つの例 (5 : 21~48)
- ④ 義の実行の3つの例 (6 : 1~18)
- ⑤ 神への献身 (6 : 19~34)
- ⑥ 他者を裁くこと (7 : 1~6)
- ⑦ 祈りと黄金律 (7 : 7~12)
- ⑧ たとえ話による結論 (7 : 13~8 : 1)

(2) きょうは、③メシアの義の6つの例を取り上げる。

2. アウトライン

- (1) 殺人 (21~26 節)
- (2) 姦淫 (27~30 節)
- (3) 離婚 (31~32 節)
- (4) 誓い (33~37 節)
- (5) 復讐 (38~42 節)
- (6) 敵への愛 (43~48 節)

3. 結論 : 現代的適用

このメッセージは、メシアの義の6つの例を学ぼうとするものである。

I. 殺人 (21~26 節)

1. 繰り返されるフレーズ

(1) 「昔の人々に、〇〇と言われたのを、あなたがたは聞いています」

- ① これは、パリサイ人の口伝律法のことである。
 - ② 口伝律法 (ミシュナ) は、紀元 220 年頃までは文書化されていなかった。
 - ③ イエスが聖書に言及する時は、「〇〇と書かれている」と言う。
- (例話) ユダヤ人は、誤って書かれた文字でも、そのままにしておく。

(2) 「しかし、わたしはあなたがたに言います」

①これは、メシアによる律法解釈である。

②メシアが、モーセの律法の意図を解き明かすのである。

(3) 以上のフレーズが、6回出て来る。

①イエスは、口伝律法を否定し、モーセの律法の正しい解釈を示した。

2. 21～22節

「昔の人々に、『人を殺してはならない。人を殺す者はさばきを受けなければならない』と言われたのを、あなたがたは聞いています。しかし、わたしはあなたがたに言います。兄弟に向かって腹を立てる者は、だれでもさばきを受けなければなりません。兄弟に向かって『能なし』と言うような者は、最高議会議に引き渡されます。また、『ばか者』と言うような者は燃えるゲヘナに投げ込まれます」

(1) 殺人は、モーセの律法が与えられる前から禁じられていた。

「人の血を流す者は、人によって、血を流される。神は人を神のかたちにお造りになったから」(創9:6)

(2) 殺人禁止令は、モーセの律法にも登場する。

①出20:13と申5:17

(3) パリサイ人たちはこの規定を知っていた。

①殺人を犯してはならない。

②人を殺した者は、さばきを受ける。

③しかし彼らは、これを肉体的な死に限定していた。

(4) イエスは、外面に出た殺人という行為の原因まで問題にする。

①心に「殺人という卵」を産むと、それが孵化して「殺人鳥」が飛ぶ。

(5) 怒りが不義である3つの例

①兄弟に向かって腹を立てる。

*理由なくして怒ること

*正当な怒り：神の栄誉が傷つけられたとき、他の人が傷つけられたとき

*復讐心から来る怒りは、正当な怒りではない。

*ほとんどの人が、自分の怒りには正当な理由があると思うものである。

*そういう人は、法廷に訴えられる。

②兄弟を侮辱する。

*「能なし」「ばか者」「愚か者」

*アラム語で「ラカ」

*「頭が空っぽ」「価値がない」という意味である。

*最初のものよりも、悪質である。

*そういう人は、サンヘドリンに訴えられる。

③兄弟をののしる。

*「ばか者」「愚か者」「ばか者」

*ギリシア語で「モロス」

*道徳的に破たんした者、生きるに値しない者

*現代風に言うと「死ぬ」であろう。英語では、「God damn you!」である。

*そういう言葉を使う人は、罪人であり、ゲヘナに投げ込まれる。

*ゲヘナは、ヒンノムの谷(Gehinnom)から出た言葉。「火の池」と同義語。

(6) 以上の教えによれば、自分は殺人とは無関係だと主張できる人はいない。

3. 23～24 節

「だから、祭壇の上に供え物をささげようとしているとき、もし兄弟に恨まれていることをそこで思い出したなら、供え物はそこに、祭壇の前に置いたままにして、出て行って、まずあなたの兄弟と仲直りをしなさい。それから、来て、その供え物をささげなさい」

(1) 不当な怒りやその他の理由で、兄弟の気分を害した場合

①その人の供え物は、神に喜ばれない。

②すぐに和解のための行動を起こすべきである。

4. 25～26 節

「あなたを告訴する者とは、あなたが彼といっしょに途中にある間に早く仲良くなりなさい。そうでないと、告訴する者は、あなたを裁判官に引き渡し、裁判官は下役に引き渡して、あなたはついに牢に入れられることとなります。まことに、あなたに告げます。あなたは最後の一コドラントを支払うまでは、そこから出ては来られません」

(1) イエスは戒めているのは、自分の非を認めない態度、裁判好きの態度である。

①自分の非を認めない人は、裁判の結果投獄され、財産をも失う。

II. 姦淫 (27～30 節)

1. 27～28 節

「『姦淫してはならない』と言われたのを、あなたがたは聞いています。しかし、わたしはあなたがたに言います。だれでも情欲をいだいて女を見る者は、すでに心の中で姦淫を犯したのです」

(1) モーセの律法は、姦淫を禁止した。

①出 20 : 14、申 5 : 18

(2) パリサイ人の教えとイエスの教えの対比

①パリサイ人は、実際の行為を問題にした。

②イエスは、内面の清さも問題にした。

(3) 罪は、心の中から始まり、それを育てるなら、行為につながる。

(例話) きせる乗車：どの段階で罪を犯したと言えるか。

2. 29～30 節

「もし、右の目が、あなたをつまづかせるなら、えぐり出して、捨ててしまいなさい。からだの一部を失っても、からだ全体ゲヘナに投げ込まれるよりは、よいからです。もし、右の手があなたをつまづかせるなら、切って、捨ててしまいなさい。からだの一部を失っても、からだ全体ゲヘナに落ちるよりは、よいからです」

(1) 字義通りの解釈と、文字通り解釈の違い

①字義通りとは、著者の意図通りに解釈すること。

②文字通りとは、字面通りに受け取ること。

(2) ここの意味は、誇張法であろう。

①実際に目をえぐり出したとしても、その人は依然として心に罪を抱くであろう。

②実際に右の手を失っても、左の手で罪を犯すであろう。

③イエスの意図は、罪の要素を完全に取り去りなさいということ。

④これは、新生のみによって可能となる。

III. 離婚 (31～32 節)

(1) 現在、最も論争のあるテーマである。

(2) 先に行ってから、取り上げる。

IV. 誓い (33～37 節)

1. 33 節

「さらにまた、昔の人々に、『偽りの誓いを立ててはならない。あなたの誓ったことを主に果たせ』と言われていたのを、あなたがたは聞いています」

(1) モーセの律法は、【主】の御名によって誓うことを禁止している。

①レビ 19 : 12、民 30 : 2、申 23 : 21

(2) ユダヤ人たちは、巧妙な方法で、守らなくてもよい誓いの方法を作り出した。

①天をさして誓う。

②地をさして誓う。

③エルサレムをさして誓う。

④頭をさして誓う。

2. 34～36 節

「しかし、わたしはあなたがたに言います。決して誓ってはいけません。すなわち、天をさして誓ってはいけません。そこは神の御座だからです。地をさして誓ってもいけません。そこは神の足台だからです。エルサレムをさして誓ってもいけません。そこは偉大な王の都だからです。あなたの頭をさして誓ってもいけません。あなたは、一本の髪の毛すら、白くも黒くもできないからです」

(1) イエスは、パリサイ人の誓いを偽善だと断罪された。

①通常の会話での誓いは、一切無用である。

(2) 神の御名の代替物は、すべて無効である。

①天をさして誓う。天は神の御座である。

②地をさして誓う。地は神の足台である。

③エルサレムをさして誓う。偉大な王の都である。

④頭をさして誓う。人間は神の創造物である。

3. 37 節

「だから、あなたがたは、『はい』は『はい』、『いいえ』は『いいえ』とだけ言いなさい。それ以上のことは悪いことです」

(1) 必要以上に強い言葉を用いることは、心の邪悪さを示している。

①そのような人の心は、悪魔と罪の支配下にある。

V. 復讐 (38～42 節)

1. 38 節

「『目には目で、歯には歯で』と言われたのを、あなたがたは聞いています」

(1) モーセの律法には、罰則に関する規定がある。

①出 21 : 24、レビ 24 : 20、申 19 : 21

②これは、罪を罰せよという命令であり、罰則の限界を定めたものでもある。

③また、処罰は政府の専権事項であり、個人が行うものではない。

(2) この規定を、「lex talionis」という。

①「同害刑法」(報復法) という意味である。

2. 39～41 節

「しかし、わたしはあなたがたに言います。悪い者に手向かってはいけません。あなたの右の頬を打つような者には、左の頬も向けなさい。あなたを告訴して下着を取ろうとする者には、上着もやりなさい。あなたに一ミリオン行くと強いるような者とは、いっしょに二ミリオン行きなさい」

(1) 報復法は、被害者の権利は保護されている。

①しかし、義人はその権利を必ずしも主張しなくていい。

②義人は、謙遜で無私の心を持っている。

(2) 義人が権利を放棄する例

①右の頬を打たれた時、仕返しをしないで逆のことをする。

②下着を取られた時、代価を請求しないで逆のことをする。

③ローマの官憲が荷物を1マイル運べと命じたら、自発的に2マイル行く。

3. 42 節

「求める者には与え、借りようとする者は断らないようにしなさい」

(1) 現代人には、非常に困難な教えである。

①天に宝を積むことをいつも考えている人には、可能である。

②求めている人は、本当の必要をかかえているということが前提になっている。

③真実は分からない。騙されたとしても、困っている人を拒否するよりはいい。

VI. 敵への愛 (43～48 節)

1. 43節

『自分の隣人を愛し、自分の敵を憎め』と言われたのを、あなたがたは聞いています」

(1) モーセの律法は、隣人への愛を命じている。

①レビ19:18

②「自分の敵を憎め」という教えは、モーセの律法にはない。

③ただし、詩篇には神の義を求める祈りがある(詩139:21~22)。

(2) パリサイ人の教えでは、隣人を愛することは、敵を憎むことと表裏一体となった。

2. 44~47節

「しかし、わたしはあなたがたに言います。自分の敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい。それでこそ、天におられるあなたがたの父の子どもになれるのです。天の父は、悪い人にも良い人にも太陽を上らせ、正しい人にも正しくない人にも雨を降らせてくださるからです。自分を愛してくれる者を愛したからといって、何の報いが受けられるでしょう。取税人でも、同じことをしているではありませんか。また、自分の兄弟にだけあいさつしたからといって、どれだけまさったことをしたのでしょうか。異邦人でも同じことをするではありませんか」

(1) イエスは、敵を愛し、彼らのために祈るように命じた。

①天の父が示しておられる愛を実践する。

(2) 自分の兄弟だけを愛しても、報酬を受けることはできない。

①未信者の取税人でも、同じことはしている。

②未信者の異邦人でも、同じことをしている。

③この両者は、パリサイ人たちが最も軽蔑した人たちである。

3. 48節

「だから、あなたがたは、天の父が完全なように、完全でありなさい」

(1) 文脈で理解する必要がある。

①罪が全くない状態を言っているのではない。

②上記6つの例についての成熟を言っている。

③つまり、信者の霊的成熟を問題にしているのである。

結論:

1. 殺人(21~26節)

(1) 罪人の裁きには、軽重がある。

①憎む→「ラカ」と言う→「モロス」と言う。

②法廷→サンヘドリン→ゲヘナ

(2) 1コリ 11 : 27~30

「したがって、もし、ふさわしくないままでパンを食べ、主の杯を飲む者があれば、主のからだと血に対して罪を犯すこととなります。ですから、ひとりひとりが自分を吟味して、そのうえでパンを食べ、杯を飲みなさい。みからだをわきまえないで、飲み食いするならば、その飲み食いが自分をさばくこととなります。そのために、あなたがたの中に、弱い者や病人が多くなり、死んだ者が大ぜいいます」

①コリント教会における聖餐式の混乱

②原因は、分裂、分派。

③その状態のまま聖餐式を行っても、祝福はない。

④「自分を吟味する」とは、和解を促す言葉である。

⑤「みからだをわきまえないで」とは、主の死の意味を考えないでという意味。

2. 姦淫 (27~30 節)

(1) 2ペテ 2 : 14

「その目は淫行に満ちており、罪に関しては飽くことを知らず、心の定まらない者たちを誘惑し、その心は欲に目がありません。彼らはのろいの子です」

①教会時代に登場する偽教師たちの描写

②外面は威厳に満ちていても、内面は汚れている。

(2) 誘惑に会うことと、そこに留まることとは、別のことである。

①誰にでも誘惑は来る。

②その誘惑を心に留め、それを育てた時に、罪が入り込む。

(3) 情欲を抱いた時、私たちの心は神から遠く離れている。

3. 離婚 (31~32 節)

4. 誓い (33~37 節)

(1) すべての場合に、誓いが禁止されているわけではない。

①法廷での誓い

②福音の真理の伝達

(2) 実例

①イエスの例 (マタ 26 : 63)

②パウロの例 (2 コリ 1 : 23、ガラ 1 : 20)

5. 復讐 (38~42 節)

(1) ロマ 12 : 17~21

「だれに対してでも、悪に悪を報いることをせず、すべての人が良いと思うことを図りなさい。あなたがたは、自分に関する限り、すべての人と平和を保ちなさい。愛する人たち。自分で復讐してはいけません。神の怒りに任せなさい。それは、こう書いてあるからです。『復讐はわたしのすることである。わたしが報いをする、と主は言われる。』もしあなたの敵が飢えたなら、彼に食べさせなさい。渴いたなら、飲ませなさい。そうすることによって、あなたは彼の頭に燃える炭火を積むことになるのです。悪に負けてはいけません。かえって、善をもって悪に打ち勝ちなさい」

(2) 1 ペテ 2 : 22~23

「キリストは罪を犯したことがなく、その口に何の偽りも見いだされませんでした。ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、おどすことをせず、正しくさばかれる方にお任せになりました」

6. 敵への愛 (43~48 節)

(1) ロマ 12 : 14

「あなたがたを迫害する者を祝福しなさい。祝福すべきであって、のろってはいけません」

(2) 敵に対する愛は、感情的なものではなく、意志による決断である。

まとめ

(1) マタ 5 : 20 が中心聖句である。

「まことに、あなたがたに告げます。もしあなたがたの義が、律法学者やパリサイ人の義にまさるものでないなら、あなたがたは決して天の御国に、入れません」

①信仰による義

②聖霊の内住

③聖霊の導きに敏感になる。

「義の実行の3つの例」

§ 054 マタ 6 : 1~18

1. はじめに

(1) 山上の垂訓の構成

* A T ロバートソンは、8つに区分している。

- ① 八福の教え (5 : 3~12)
- ② メシアの義とパリサイ人の義 (5 : 13~20)
- ③ メシアの義の6つの例 (5 : 21~48)
- ④ 義の実行の3つの例 (6 : 1~18)
- ⑤ 神への献身 (6 : 19~34)
- ⑥ 他者を裁くこと (7 : 1~6)
- ⑦ 祈りと黄金律 (7 : 7~12)
- ⑧ たとえ話による結論 (7 : 13~8 : 1)

(2) きょうは、④義の実行の3つの例を取り上げる。

2. アウトライン

- (1) 施し (1~4 節)
- (2) 祈り (5~15 節)
- (3) 断食 (16~18 節)

3. 結論 : 現代的適用

このメッセージは、義の実行の3つの例を学ぼうとするものである。

I. 施し (1~4 節)

1. 1 節

「人に見せるために人前で善行をしないように気をつけなさい。そうでないと、天におられるあなたがたの父から、報いが受けられません」

(1) ユダヤ教が教える敬虔は、3つの行為によって示される。

- ① 祈り
- ② 断食
- ③ 施し

(2) 裁きの日に、この3つの行為に基づいて裁きが行われる。

(3) イエスは、その3つの行為を例として取り上げるために、大原則を語った。

- ①敬虔とは、人に示すものではない。
- ②敬虔とは、その人と神との関係において示されるものである。
- ③山上の垂訓には、「父」という言葉が18回出て来る。
- ④外に出た行為ではなく、動機が問題にされる。父との関係。

2. 2節

「だから、施しをするときには、人にほめられたくて会堂や通りで施しをする偽善者たちのように、自分の前でラッパを吹いてはいけません。まことに、あなたがたに告げます。彼らはすでに自分の報いを受け取っているのです」

(1) 貧しい人を集めるために、会堂や通りでラッパが吹かれた。

- ①当然、野次馬が集まってくる。
- (2) 施しをする人は、すべてに自分の報いを受け取っている。
- ①「報い」とは、ギリシア語で「ミスソス」である。
 - ②商売用語で、「報酬」「対価」のこと。
 - ③人の前で善行を行ったので、人からの評価を受けた。

3. 3～4節

「あなたは、施しをするとき、右の手のしていることを左の手に知られないようにしなさい。あなたの施しが隠れているためです。そうすれば、隠れた所で見ておられるあなたの父が、あなたに報いてくださいます」

(1) 「右の手のしていることを左の手に知られないようにしなさい」

- ①これは誇張法である。
- ②善行は、隠れて行うものである。

(2) 動機が正しい人は、父からの報いを受けることができる。

II. 祈り (5～15節)

1. 5～6節

「また、祈るときには、偽善者たちのようであってははいけません。彼らは、人に見られたくて会堂や通りの四つ角に立って祈るのが好きだからです。まことに、あなたがたに告げます。彼らはすでに自分の報いを受け取っているのです。あなたは、祈るときには自分の

奥まった部屋に入りなさい。そして、戸をしめて、隠れた所におられるあなたの父に祈りなさい。そうすれば、隠れた所で見ておられるあなたの父が、あなたに報いてくださいます」

(1) パリサイ人たちは、日に3度集まって祈っていた。

- ①その動機は、人に見られるためである。
- ②イエスは彼らを、偽善者たちと呼ばれた。
- ③彼らは、人からの報いを受け取っている。

(2) 義人の祈りは、神に対するものである。

- ①その人は、神からの報いを受ける。

2. 7～8節

「また、祈るとき、異邦人のように同じことばを、ただくり返してはいけません。彼らはことば数が多ければ聞かれると思っているのです。だから、彼らのまねをしてはいけません。あなたがたの父なる神は、あなたがたが願う前に、あなたがたに必要なものを知っておられるからです」

(1) 異邦人の祈りを避ける。

- ①同じことばの繰り返し
- ②ことば数の多い祈り

(2) パリサイ人も同じ過ちを犯していた。

- ①この時期、決まった祈りの言葉が容認されるかどうか議論されていた。
 - ・真実な心で祈れば容認されるというのが一般的見解であった。
- ②その後、ユダヤ教は祈禱書を確立するようになる。
 - ・そこには、あらゆる状況に対応するための祈りの言葉が書かれている。
- ③今日でも、ユダヤ教徒は祈禱書を用いている。

(3) 自発的祈り、心からの祈りが、イエスが勧める祈りである。

3. 9～13節

「だから、こう祈りなさい。『天にいます私たちの父よ。御名があがめられますように。御国が来ますように。みこころが天で行われるように地でも行われますように。私たちの日ごとの糧をきょうもお与えください。私たちの負いめをお赦してください。私たちも、私たちに負いめのある人たちを赦しました。私たちを試みに会わせないで、悪からお救いください。』【国と力と栄えは、とこしえにあなたのものだからです。アーメン。】」

「義の実行の3つの例」

はじめに：これは、「主の祈り」と呼ばれているものである。

- ①厳密には「主が教えてくださった弟子たちの祈り」である。
- ②この祈りは模範としての祈りである。祈りには明確な組み立てが必要である。
- ③ルカ 11：1～4でも、この祈りが登場する。
 - ・タイミングは、イスラエルがイエスのメシア性を拒否して以降である。
- ④6つの要素がある。
- ⑤前半の3つが神の御心に関するもの、後半の3つが自分の必要に関するもの。

(1) 「天にいます私たちの父よ」

- ①この呼びかけは、神への完全な信頼の中から生まれる。
- ②「私たち」とあるので、この祈りは共同体のそれである。
- ③聖書の祈りのパターンは、常に父なる神への呼びかけである。
 - ・イエスや聖霊に呼びかけても罪ではないが、聖書的模式ではない。
- ④十字架以降、私たちはイエスを通して父に呼びかける。

(2) 「御名があがめられますように」

- ①神の偉大さや性質を思い起こし、神をたたえる段階。
- ②神の永遠性、偏在性、愛の性質などについて黙想する。
- ③神が大きくなると、問題は小さくなる。

(3) 「御国が来ますように。みこころが天で行なわれるように地でも行なわれますように」

- ①「神の国の計画」が進展することを願う祈り。
- ②教会時代においては、教会のため、牧師や役員のため、宣教師のために祈る。
- ③まだ救われていない人が救われるように祈る。
- ④自分がどのような方法で神の国拡大のために奉仕ができるかについても、祈る。

(4) 「私たちの日ごとの糧をきょうもお与えください」

- ①食物以外のさまざまな必要についても
 - ・経済的試練、人間関係の試練、肉体的試練
- ②「日々の戦い」に必要な力が与えられるようにという祈りである。

(5) 「私たちの負い目をお赦してください。私たちも、私たちに負いめのある人たちを赦しました」

- ①これは、罪の赦しを求める祈りである。

「義の実行の3つの例」

- ②「主の祈り」の組み立てに従うなら、罪の告白は祈りの冒頭に来なくてもよい。
- ③他の人の罪を赦すことが、罪が赦される条件となる、という意味ではない。

(6) 「私たちが試みに会わせないで、悪からお救いください」

- ①霊的な戦いの中で、守りが与えられるように。
- ②古くからあるユダヤ人の祈りとの対比で、こう解説する学者もいる。
「試みに会ったとき、罪を犯すことはありませんように」
- ③信者は、この世から隔離された「無風状態」の中に置かれるのではない。
 - ・敵は、この世、肉、悪魔である。
- ④クリスチャンは、この世で患難を経験するが、この世にあって勝利する。

4. 14～15節

「もし人の罪を赦すなら、あなたがたの天の父もあなたがたを赦してくださいます。しかし、人を赦さないなら、あなたがたの父もあなたがたの罪をお赦しになりません」

- (1) 人を赦すことが、赦される条件になるというのではない。
 - ①天の父から赦された者は、隣人を赦すようになるという意味である。

III. 断食 (16～18節)

1. 16節

「断食するときには、偽善者たちのようにやつれた顔つきをしてはいけません。彼らは、断食していることが人に見えるようにと、その顔をやつすのです。まことに、あなたがたに告げます。彼らはすでに自分の報いを受け取っているのです」

- (1) 新約聖書には、断食せよという命令はない。
 - ①それは自発的なものでなければならない。
- (2) パリサイ人の断食は、週に2回行われていた。
 - ①断食には報いがあると考えられていた。
 - ②パリサイ人は、食物だけでなく、水も断っていた(健康によくない)。
 - ③それ以外の楽しみも断つ。
 - ・髪の毛にオイルを塗ること
 - ・肌の乾燥を防ぐために、オイルを塗ること
 - ④その結果、断食していることが顔に現れる。

2. 17～18節

「しかし、あなたが断食するときには、自分の頭に油を塗り、顔を洗いなさい。それは、断食していることが、人には見られないで、隠れた所におられるあなたの父に見られるためです。そうすれば、隠れた所で見ておられるあなたの父が報いてくださいます」

(1) 神は、断食という行為に感動されるのではない。

①ここでも、動機が問われている。

結論：

1. 奉仕の動機は正しいか。

(例話) McGee

- ・ある会合で、いくら献金を捧げるかを言わせるようにと依頼された。
- ・そうしないと、1ドルしかささげ物ない人があるというのがその理由である。
- ・これは、ラッパを吹くことである。
- ・後で分かったのだが、依頼人その人が、こういう捧げた方をしていた。

(例話) McGee

- ・集会の前に、小切手を手渡す人がいた。
- ・私が何も言わないので、憤慨した。
- ・裕福な割に、少額であった。
- ・郵便配達人が、小切手を渡した。
- ・集会が終わるまで開けるな、誰にも言うなという。
- ・その額は、裕福な人の倍あった。

(1) 神と自分の関係。そこに第3者が入った途端に、聖書的献金でなくなる。

(2) 現代の教会へのチャレンジ

①献金者名の公表

- ・もちろん、極端に走ってはならない。

②規模を競う傾向

③信仰によって繁栄や健康が得られるという教え

2. 祈りは父なる神との生き生きした関係から出ているか。

(1) 主の祈りは、このように祈れというガイドラインである。

(2) 異邦人のように同じことばを、ただくり返してはいけないと教えられている。

(3) 「主の祈り」を意味のないことばのくり返しにしていないか。

(4) 主の祈りによって、真の祈りの回復が可能となる。

3. 聖書的敬虔とは、父との関係である。

「神への献身」

§ 054 マタ 6 : 19~34

1. はじめに

(1) 山上の垂訓の構成

* AT ロバートソンは、8つに区分している。

- ① 八福の教え (5 : 3~12)
- ② メシアの義とパリサイ人の義 (5 : 13~20)
- ③ メシアの義の6つの例 (5 : 21~48)
- ④ 義の実行の3つの例 (6 : 1~18)
- ⑤ 神への献身 (6 : 19~34)
- ⑥ 他者を裁くこと (7 : 1~6)
- ⑦ 祈りと黄金律 (7 : 7~12)
- ⑧ たとえ話による結論 (7 : 13~8 : 1)

(2) きょうは、⑤の神への献身を取り上げる。

- ① これらの内容の多くは、後になって教会時代にも適用されるものである。
- ② しかし、ここでのイエスの説明は、モーセの律法の意図を解説したものである。
- ③ イエスは特に、口伝律法(ミシュナ)を否定された。

2. アウトライン

- (1) お金について (19~24 節)
- (2) 思い煩いについて (25~34 節)

3. 結論 : 現代的適用

このメッセージは、神への献身について学ぼうとするものである。

I. お金について (19~24 節)

1. 19~21 節

「自分の宝を地上にたくわえるのはやめなさい。そこでは虫とさびで、きず物になり、また盗人が穴をあけて盗みます。自分の宝は、天にたくわえなさい。そこでは、虫もさびもつかず、盗人が穴をあけて盗むこともありません。あなたの宝のあるところに、あなたの心もあるからです」

- (1) ユダヤ的背景

「神への献身」

- ①ユダヤ教では、物質的豊かさは、神の祝福を受けていることの証拠となった。
- ②彼らは、「神は、愛する者を富ませる」と教えていた。
- ③それゆえ、パリサイ人たちは熱心に富を追及した。

(2) 裕福なユダヤ人たちの財産管理法

*盗人に盗まれないために

- ①両替人に投資をする。
- ②神殿に預ける。

*いかなる盗人でも、神のものを盗むことには抵抗があった。

- ③地下に埋めたり、洞窟に隠したりした。

*その場合、衣服には虫が付く。

*金属にはさびが付く。

(3) 天に宝を蓄える。

- ①地上の宝は一時的である。

- ②ヤコ5:1~3

「聞きなさい。金持ちたち。あなたがたの上に迫って来る悲慘を思って泣き叫びなさい。あなたがたの富は腐っており、あなたがたの着物は虫に食われており、あなたがたの金銀にはさびが来て、そのさびが、あなたがたを責める証言となり、あなたがたの肉を火のように食い尽くします。あなたがたは、終わりの日に財宝をたくわえました」

- ③しかし、天に蓄えられた宝は永遠である。

- ④天に宝を蓄えるとは、永遠に価値あることのために、才能、時、金などを用いることである。

- ⑤天に宝があれば、私たちの心もそこにある。

*バランスの取れた人生観を持つようになる。

*物に対する執着も、将来への不安もなくなる。

2. 22~23 節

「からだのあかりは目です。それで、もしあなたの目が健全なら、あなたの全身が明るいですが、もし、目が悪ければ、あなたの全身が暗いでしょう。それなら、もしあなたのうちの光が暗ければ、その暗さはどんなでしょう」

(1) 訳文の比較

- ①「からだのあかりは目です」(新改訳)
- ②「体のともし火は目である」(新共同訳)

③「目はからだのあかりである」(口語訳)

(2) ユダヤ的背景

①多くの人が、目から光が出て、ものが見えるようになると考えていた。

*つまり、目がランプの役割を果たしていると考えていたのだ。

*目から光が入るという考え方もあった。

*ここでは、その両方の考え方が反映されている。

②「目が健全なら」: 英語で「single」である。

③「目が悪ければ」: 英語で「evil」である。

④寛容な人と、貪欲な人が対比されている。

(3) お金に関して正しい視点を持たなければ、その人の人生は暗いものになる。

①その人は、ランプなしで夜道を歩いているかのようだ。

②またその人は、外光が入らない家に住んでいるかのようだ。

3. 24節

「だれも、ふたりの主人に仕えることはできません。一方を憎んで他方を愛したり、一方を重んじて他方を軽んじたりするからです。あなたがたは、神にも仕え、また富にも仕えるということはできません」

(1) ふたりの主人が、ひとりの奴隷を共有することはない。

①奴隷に対する要求がぶつかり合う。

(2) ひとりの奴隷が、ふたりの主人に仕えることもない。

①どちらかを優先させることになる。

(3) 人は、神と富の両方に仕えることはできない。

①「富」は「マモン」である。

②ギリシア語では「マモウナス」である。

*元の意味は、「自信」「確信」、英語の「confidence」である。

*比喩的に「富」を現す。擬人法的使用。

*それが神格化され、偶像となる。

③金持ちは、自信がある。自身の源は、「マモン」という偶像である。

④問うべきは、「私は物質に仕えているのか、神に仕えているのか」である。

II. 思い煩いについて (25～34 節)

1. 25 節

「だから、わたしはあなたがたに言います。自分のいのちのことで、何を食べようか、何を飲もうかと心配したり、また、からだのことで、何を着ようかと心配したりしてはいけません。いのちは食べ物よりたいせつなもの、からだは着物よりたいせつなものではありませんか」

(1) 思い煩いは、神に信頼していない人の心の状態である。

①ここで取り上げられているのは、きょうの食事や衣服のことではない。

②5年後、10年後、20年後への不安である。

(2) 当時の庶民の生活

①生活の必需品しか持っていない人が大半であった。

②パレスチナでは雨が、エジプト人ではナイル川の氾濫が、食物を提供した。

③人々は、毎年、思い煩いの中にいた。

2. 26～27 節

「空の鳥を見なさい。種蒔きもせず、刈り入れもせず、倉に納めることもしません。けれども、あなたがたの天の父がこれを養っていてくださるのです。あなたがたは、鳥よりも、もっとすぐれたものではありませんか。あなたがたのうちだれが、心配したからといって、自分のいのちを少しでも延ばすことができますか」

(1) ここは、カル・バホメル (大から小へ) の議論である。

①ユダヤ的教授法である。

(2) 空の鳥が大である。

①被造の世界の動物たちは、意識的に生産活動をしているわけではない。

②しかし、神は彼らを養ってくださる。

(3) 人が小である。

①人は鳥よりも優れている。

②それゆえ、神が人を養ってくださるのは、より容易である。

(4) これは、労働を否定したり、怠惰を奨励したりしているのではない。

①2テサ3:10には、「働きたくない者は食べるな」という言葉がある。

②ましてや、あなたがたの場合は、労働に従事しているのだから…。

(5) 心配しても、寿命は延びない。

3. 28～30 節

「なぜ着物のことで心配するのですか。野のゆりがどうして育つのか、よくわきまえなさい。働きもせず、紡ぎもしません。しかし、わたしはあなたがたに言います。栄華を窮めたソロモンでさえ、このような花の一つほどにも着飾ってはいませんでした。きょうあつても、あすは炉に投げ込まれる野の草さえ、神はこれほどに装ってくださるのだから、ましてあなたがたに、よくして下さらないわけがありませんか。信仰の薄い人たち」

(1) 野のゆり(野の花)が大である。

- ①恐らくアネモネであろう。
- ②アネモネの紫色とソロモンの王服の色が対比されている。
- ③野の花は、労せずして美しく着飾っている。
- ④野の花は、枯れると炉に投げ込まれる。
- ⑤そのような野の花がこれほど着飾っているのである。

(2) 人が小である。

- ①人は、野のゆりよりも優れている。
- ②それゆえ、神が人によくしてくださるのは、容易なことである。

4. 31～34 節

「そういうわけだから、何を食べるか、何を飲むか、何を着るか、などと言って心配するのはやめなさい。こういうものはみな、異邦人が切に求めているものなのです。しかし、あなたがたの天の父は、それがみなあなたがたに必要であることを知っておられます。だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。だから、あすのための心配は無用です。あすのことはあすが心配します。労苦はその日その日に、十分あります」

(1) 神を知らない異邦人は、富の追求だけで人生を終える。

(2) 思い煩いへの処方箋

- ①天の父は、私の必要をすべてご存じである。
- ②「神の国とその義をまず第一に求める」
 - *神の支配と神の御心を優先させる。
 - *その人には、必要なものが与えられる。

(3) 信者の基本的な人生観

- ①将来のことを心配しない。
- ②きょうという日を、精一杯生きる。

5. ここに書かれていることは、絶対的な原則ではない。
- (1) 迫害の時には、信仰者は物質的欠乏や、時には死を経験することさえある。
 - (2) しかし、信仰者の魂は害から守られる。

結論：

1. きょうのテーマは、「将来の生活の保証」である。
- (1) これは、極めて現代的テーマでもある。
 - (2) 物質の重要性を否定してはならない。
 - (3) バランスを崩すことが問題なのである。
 - (4) 将来への不安は、不信仰から出ている。
 - (5) 不信仰が能動的に働くと、富の追及に至る。
 - (6) 不信仰が受動的に働くと、思い煩いに至る。

2. 能動的不信仰

- (1) マタ6:21

「あなたの宝のあるところに、あなたの心もあるからです」

- ①地上の富に心が囚われているなら、その人の心は地上にある。
- ②天に宝を蓄えている人の心は、天上にある。
- ③富に仕えている人の問題は、本来あるべき人生を生きていないことにある。

3. 受動的不信仰

- (1) マタ6:30

「きょうあっても、あすは炉に投げ込まれる野の草さえ、神はこれほどに装ってくださるのだから、ましてあなたがたに、よくして下さらないわけがありませんか。
信仰の薄い人たち」

- ①思い煩いは、信仰の問題である。

4. 物質主義と思い煩いが否定される理由

- (1) 神から与えられた人生も、その目的も、破壊されるから。
- (2) 神を愛し、神を礼拝し、神に仕えることが、人生の目的である。
- (3) 神は、私たちがその日その日を、喜んで生きることを願っておられる。

「他者を裁くこと、祈りと黄金律」

§ 054 マタ7:1~12

1. はじめに

(1) 山上の垂訓の構成

* ATロバートソンは、8つに区分している。

- ① 八福の教え (5:3~12)
- ② メシアの義とパリサイ人の義 (5:13~20)
- ③ メシアの義の6つの例 (5:21~48)
- ④ 義の実行の3つの例 (6:1~18)
- ⑤ 神への献身 (6:19~34)
- ⑥ 他者を裁くこと (7:1~6)
- ⑦ 祈りと黄金律 (7:7~12)
- ⑧ たとえ話による結論 (7:13~8:1)

(2) きょうは、⑥と⑦を取り上げる。

- ① 文脈を確認する必要がある。
- ② 山上の垂訓は、メシアによるモーセの律法の解釈である。
- ③ イエスは特に、口伝律法(ミシュナ)を否定された。

2. アウトライン

- (1) 他者を裁くこと (1~6節)
- (2) 祈り (7~11節)
- (3) 黄金律 (12節)

3. 結論: 現代的適用

このメッセージは、他者を裁くこと、祈りと黄金律について学ぼうとするものである。

I. 他者を裁くこと (1~6節)

はじめに「裁く」という言葉について

- (1) ギリシア語では、「クリノウ」という動詞である。
 - ① 分別する、より分ける、差別する、という意味。
 - ② 英語の「critic」という言葉はここから来ている。

(2) 「クリノウ」することは必要である。

- ①しかし、あらかじめ判断を下しておくこと (prejudgment) は、不当である。
- ②これは、偏見 (pre-judice) である。
- ③イエスが戒めているのは、習慣的なあらゆる捜しや鋭くて不当な批判である。

1. 1～2節 裁きに関する一般原則

「さばいてはいけません。さばかれないためです。あなたがたがさばくとおりに、あなたがたもさばかれ、あなたがたが量るとおりに、あなたがたも量られるからです」

(1) イエスは山上の垂訓において、口伝律法 (ミシュナ) を否定しておられた。

- ①パリサイ人たちは、モーセの律法の外側に多くの規則や伝統を作り上げた。
- ②口伝律法の目的は、人々がモーセの律法に違反しないようにするためであった。
- ③イエス時代になると、口伝律法が人々を束縛していた。

(2) 「裁くな」という命令は、口伝律法に基づいて裁くなという意味である。

- ①当時は、口伝律法にどれくらい従っているかで、その人の霊性が評価された。
- ②これは、聖書の教えを逸脱した行為であった。
- ③口伝律法で人を裁くなら、同じ口伝律法で裁かれる。

(3) すべての裁きは、聖書に基づいて行われるべきである。

2. 3～5節 援助者の心構え

「また、なぜあなたは、兄弟の目の中のちりに目をつけるが、自分の目の中の梁には気がつかないのですか。兄弟に向かって、『あなたの目のちりを取らせてください』などどうして言うのですか。見なさい、自分の目には梁があるではありませんか。偽善者よ。まず自分の目から梁を取りのけなさい。そうすれば、はっきり見えて、兄弟の目からも、ちりを取り除くことができます」

(1) 「裁くな」という命令は、普遍的なものではない。

- ①口伝律法による裁きは禁止されている。
- ②聖書に基づいた裁きは、どうしても必要である。
*その場合、霊的な洞察力や知恵が必要となる。

(2) 誇張法による教え

- ①他者を助けようとする必要が出て来た。
- ②兄弟の目に「ちり」を見つけた。
- ③しかし、助けようとする人の目には「梁」が入っている。

④その人は、偽善者である。

3. 6節 援助すべきかどうかの判断

「聖なるものを犬に与えてはいけません。また豚の前に、真珠を投げてはなりません。それを足で踏みにじり、向き直ってあなたがたを引き裂くでしょうから」

(1) 他者を助けようとするとき、それを好まない人もいる。

(例話) 福音に耳を傾けない家族、親戚、友人

①時が来ていない。

②愛と祈りの実践

(2) 絵画的例話

①聖なるもの、真珠とは、福音、聖書に基づく助言などを指す。

②犬、豚とは、粗野な人、肉的な人を指す。

*聖書時代は、犬の評価はこのようなものであった。

*犬は凶暴で、野犬化し、人の肉を食べたり、血をなめたりする。

*豚はユダヤ人が忌み嫌うものであった。

「美(うるは)しき婦(をんな)のつつしみなきは金(きん)の環(わ)の豕(ぶた)の鼻(はな)にあるが如(ごと)し」(箴11:22)

II. 祈り (7～11節)

1. 7～8節 祈りの原則

「求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます。だれであれ、求める者は受け、捜す者は見つけ出し、たく者には開かれます」

(1) 祈りの必要性

①山上の垂訓の教えは、神の助けがなければ実行不可能である。

②それゆえ、祈りの必要性が生じる。

(2) 祈りの型は、すでに「主の祈り」で教えられていた。

①ここでは、父なる神が私たちの祈りを歓迎する方が示される。

②ここでの祈りは、「同じ言葉を繰り返す」祈りではない。

③「求めなさい」、「捜しなさい」、「たたきなさい」は、すべて現在形。

④これは、継続する動作を示している。

(3) イエスの御名による祈りは、まだ教えられていない。

①この時代は、まだ律法の時代であった。

2. 9～11節 祈りが聞かれるという保証

「あなたがたも、自分の子がパンを下さいと言うときに、だれが石を与えるでしょう。また、子が魚を下さいと言うのに、だれが蛇を与えるでしょう。してみると、あなたがたは、悪い者ではあっても、自分の子どもには良い物を与えることを知っているのです。とすれば、なおのこと、天におられるあなたがたの父が、どうして、求める者たちに良いものを下さらないことがありますしょう」

(1) 小から大への議論

①地上の父と天の父の対比

(2) 地上の父は、子どもに良いものを与える。

①パンと石の対比

②魚と蛇の対比

③卵とさそりの対比 (ルカ 11 : 12)

(3) もし子どもが危ないものを求めたなら、それは与えない。

(4) 地上の父が子どもをこれほど愛しているなら、天の父はなおさら私たちが愛してください。

Ⅲ. 黄金律 (12節)

1. 12節

「それで、何事でも、自分にしてもらいたいことは、ほかの人にもそのようにしなさい。これが律法であり預言者です」

(1) ここで黄金律が登場する理由

①父なる神の愛が啓示された。

②黄金律は、イエスをメシアと信じた者が目標とすべき行動原理である。

(2) レビ 19 : 18

「復讐してはならない。あなたの国の人々を恨んではならない。あなたの隣人をあなた自身のように愛しなさい。わたしは【主】である」

- (3) イエスよりも100年ほど前のラビ・ヒレル
 - ①ユダヤ教への改宗希望者が、律法全体を教えて欲しいと願った。
 - ②ヒレルは、「自分がされたくないことを、人にするな」と答えた。
 - ③これは、黄金律の受動的実践である。
 - ④イエスは、黄金律の能動的実践を説かれた。

- (4) 「これが律法であり預言者です」
 - ①黄金律が、旧約聖書の精神の要約である。

結論：

1. 裁きについて

- (1) 「さばいてはいけません」というのは、普遍的な命令ではない。

- ①イエスは、口伝律法を基にした裁きを否定した。
- ②裁いてはならない場合と、裁きが必要な場合とがある。

- (2) 裁いてはならない場合

- ①動機を裁いてはならない。神だけが知っておられる。
- ②見かけで裁いてはならない。

「あなたがたの会堂に、金の指輪をはめ、りっぱな服装をした人が入って来、またみすばらしい服装をした貧しい人も入って来たとします。あなたがたが、りっぱな服装をした人に目を留めて、『あなたは、こちらの良い席におすわりなさい』と言ひ、貧しい人には、『あなたは、そこで立っていなさい。でなければ、私の足もとにすわりなさい』と言うとすれば、あなたがたは、自分たちの間で差別を設け、悪い考え方で人をさばく者になったのではありませんか」(ヤコ2:1~4)

- ③グレイゾーンに関して、人を裁いてはならない。

「あなたがたは信仰の弱い人を受け入れなさい。その意見をさばいてはいけません。何でも食べてよいと信じている人もいますが、弱い人は野菜よりほかには食べません。食べる人は食べない人を侮ってはいけなしいし、食べない人も食べる人をさばいてはいけません。神がその人を受け入れてくださったからです。あなたはいったいだれなので、他人のしもべをさばくのですか。しもべが立つのも倒れるのも、その主人の心次第です。このしもべは立つのです。なぜなら、主には、彼を立たせることができるからです。ある日を、他の日に比べて、大事だと考える人もいますが、どの日も同じだと考える人もいます。それぞれ自分の心の中で確信を持ちなさい」(ロマ14:1~5)

④他のクリスチャンたちの奉仕を裁いてはならない。

(3) 裁きが必要な場合

①教会内の罪

「あなたがたの間に不品行があるということが言われています。しかもそれは、異邦人の中にもないほどの不品行で、父の妻を妻にしている者がいるとのことです。それなのに、あなたがたは誇り高ぶっています。そればかりか、そのような行いをしている者をあなたがたの中から取り除こうとして悲しむこともなかったのです。私のほうでは、からだはそこにいなくても心はそこにおり、現にそこにいるのと同じように、そのような行いをした者を主イエスの御名によってすでにさばきました」(1コリ5:1~3)

②教会内の争い

「あなたがたの中には、仲間の者と争いを起こしたとき、それを聖徒たちに訴えないで、あえて、正しくない人たちに訴え出るような人がいるのでしょうか。あなたがたは、聖徒が世界をさばくようになることを知らないのですか。世界があなたがたによってさばかれるはずなのに、あなたがたは、ごく小さな事件さえもさばく力がないのですか。私たちは御使いをもさばくべき者だ、ということを知らないのですか。それならこの世のことは、言うまでもないではありませんか」(1コリ6:1~3)

③教理上の間違い

「みことばを宣べ伝えなさい。時が良くても悪くてもしっかりやりなさい。寛容を尽くし、絶えず教えながら、責め、戒め、また勧めなさい。というのは、人々が健全な教えに耳を貸そうとせず、自分につごうの良いことを言ってもらうために、気ままな願いをもって、次々に教師たちを自分たちのために寄せ集め、真理から耳をそむけ、空想話にそれて行くような時代になるからです」

(2テモ4:2~4)

(例話) ある婦人からの質問

「最近 ARAMAIC ENGLISH NEW TESTAMENT を読んでいるのですが、その中ですべて神を信じる者は豚肉を食べてはいけないという解説がありました。私自身あまり肉類を食べないのもあって、以前はレビ記に出てくる食物規定を深く考えることなく読んでいたのですが、今回豚肉の件から、では海の中にいるものでも鱗、ひれの無いものは食べてはいけない…いかやタコが含まれているのでこれらを好んで食べる日本人信者には大変なチャレンジですよ。…」

回答:「Netzarim movement」、訳すと、「ナザレ派運動」

2. 祈りについて

(1) これはブランクチェックではない。

①聞かれない祈り

「あなたがたは、ほしがっても自分のものにならないと、人殺しをします。うらやんでも手に入れることができないと、争ったり、戦ったりします。あなたがたのものにならないのは、あなたがたが願わないからです。願っても受けられないのは、自分の快樂のために使おうとして、悪い動機で願うからです」

(ヤコ4:2~3)

②聞かれる祈り

「何事でも神のみこころにかなう願いをするなら、神はその願いを聞いてくださるということ、これこそ神に対する私たちの確信です」(1ヨハ5:14)

3. 黄金律について

(1) クリスマン生活は、禁止事項に囲まれた生活ではない。

①イエスの教えは、ラビ・ヒレルの教えとは異なり、積極的なものであった。

②この教えが普遍的に実行されるようになれば、世の中は変わる。

③国同士の関係、会社、学校、家庭、そして教会における人間関係

(2) 恵みの時代の生活原則

「それは、肉に従って歩まず、御霊に従って歩む私たちの中に、律法の要求が全うされるためなのです」(ロマ8:4)

「たとえ話による結論」

§054 マタ7:13~8:1

1. はじめに

(1) 山上の垂訓の構成

*ATロバートソンは、8つに区分している。

- ①八福の教え (5:3~12)
- ②メシアの義とパリサイ人の義 (5:13~20)
- ③メシアの義の6つの例 (5:21~48)
- ④義の実行の3つの例 (6:1~18)
- ⑤神への献身 (6:19~34)
- ⑥他者を裁くこと (7:1~6)
- ⑦祈りと黄金律 (7:7~12)
- ⑧たとえ話による結論 (7:13~8:1)

(2) きょうは、⑧を取り上げる。

- ①山上の垂訓は、メシアによるモーセの律法の解釈である。
- ②イエスは特に、口伝律法(ミシュナ)を否定された。
- ③きょうの箇所は、山上の垂訓の総まとめである。

「まことに、あなたがたに告げます。もしあなたがたの義が、律法学者やパリサイ人の義にまさるものでないなら、あなたがたは決して天の御国に、入れません」
(マタ5:20)

- ④パリサイ人の義と信仰による義が対比されている。
- ⑤きょうの箇所では、4つの対比が出て来る。
- ⑥これらの対比は、強い警告の言葉になっている。

2. アウトライン

- (1) 2つの道 (13~14節)
- (2) 2本の木 (15~20節)
- (3) 2種類の告白 (21~23節)
- (4) 2人の建築家 (24~27節)

3. 結論：山上の垂訓のまとめ

このメッセージは、山上の垂訓の総まとめについて学ぼうとするものである。

I. 2つの道 (13~14節)

1. ユダヤ教では、2つの道は良く知られた教えであり、格言である。

(1) 申 30 : 19~20a

「私は、きょう、あなたがたに対して天と地とを、証人に立てる。私は、いのちと死、祝福とのろいを、あなたの前に置く。あなたはいのちを選びなさい。あなたもあなたの子孫も生き、あなたの神、【主】を愛し、御声に聞き従い、主にすぎるためだ」

(2) エレ 21 : 8

「あなたは、この民に言え。【主】はこう仰せられる。『見よ。わたしはあなたがたの前に、いのちの道と死の道を置く』」

(3) 詩 1 篇も、2つの道について歌っている。

2. 門と道は、ともに主イエスが使用した比喩的言葉である。

(1) ヨハ 10 : 9

「わたしは門です。だれでも、わたしを通過して入るなら、救われます。また安らかに出入りし、牧草を見つけます」

(2) ヨハ 14 : 6

「イエスは彼に言われた。『わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません』」

3. 13~14節

「狭い門から入りなさい。滅びに至る門は大きく、その道は広いからです。そして、そこから入って行く者が多いのです。いのちに至る門は小さく、その道は狭く、それを見いだす者はまれです」

(1) 大きな門と広い道

①古代都市の城壁と門

②正面にある門は大きく、多くの人が入り出ることができる。

③大きな門は広い道につながっている。

④広い道は、多くの人が行き来する道である。

(2) 大きな門と広い道は、パリサイ人の義である。

①パリサイ人たちは、ユダヤ人として生まれたなら、天の御国に入ると教えていた。

②律法による外面的義を求めていた。

③口伝律法をどれだけ実践したかで、御国での報酬が決まると考えていた。

④それが大きな門であり、広い道である理由は、多くの人がそれを採用するから。

(3) 狭い門と狭い道

①裏側にある門は狭く、少人数の人しか通れない。

②狭い門は狭い道につながっている。

③狭い道には、人影がまばらである。

(4) 狭い門と狭い道は、信仰による義である。

①モーセの律法が要求する義の規準

②この段階では、イエスをメシアと信じる信仰による義である。

③狭い門と狭い道は、イエス・キリストだけが救いの道であることを示している。

II. 2本の木 (15～20節)

1. 15節

「にせ預言者たちに気をつけなさい。彼らは羊のなりをしてやって来るが、うちは食欲な狼です」

(1) にせ預言者の存在

①ユダヤ人たちは、真の預言者が今も存在するとは信じていなかった。

②しかし、にせ預言者の系譜は依然として続いていると信じていた。

③ここでのにせ預言者とは、にせ教師のことである。

④にせ教師は、誤った教理を教え、狭い門と狭い道を広げようとする。

(2) にせ預言者の風貌

①外側は羊のように柔和で無害である。

②内側は狼のように食欲で危険である。

2. 16～18節

「あなたがたは、実によって彼らを見分けることができます。ぶどうは、いばらからは取れないし、いちじくは、あざみから取れるわけがないでしょう。同様に、良い木はみな良い実を結ぶが、悪い木は悪い実を結びます。良い木が悪い実をならせることはできないし、また、悪い木が良い実をならせることもできません」

(1) にせ預言者の見分け方

①実によって彼らを見分ける。

②これは、単純な見分け方である。

「たとえ話による結論」

- ③これは、確実な見分け方である。
- ④これは、普遍的に適用できる見分け方である。

(2) たとえ

- ①ぶどうといちじくは、大量に消費される有益な産物である。
- ②いばらとあざみは、農業に有害なものである。
- ③よい実が有害な植物から取れるはずがない。

(3) 大原則

- ①良い木は、良い実を結ぶ。
- ②良い木は、信仰による義を獲得した人たちである。
- ③悪い木は、悪い実を結ぶ。
- ④悪い木は、にせ教師たちである。

3. 19～20 節

「良い実を結ばない木は、みな切り倒されて、火に投げ込まれます。こういうわけで、あなたがたは、実によって彼らを見分けることができるのです」

- (1) にせ教師たちの運命は、火に投げ込まれることである。
 - ①永遠の滅びである。

(2) 「あなたがたは、実によって彼らを見分けることができるのです」

- ①16 節と同じ言葉の繰り返しである。
- ②文学的手法で、この語句が括弧の役割を果たしている。

III. 2 種類の告白 (21～23 節)

1. 21 節

「わたしに向かって、『主よ、主よ』と言う者がみな天の御国に入るのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行う者が入るのです」

- (1) 口先だけの告白は、パリサイ人の義である。
 - ①にせ教師たちは、外面的な現れにこだわった。

(2) 「天におられるわたしの父のみこころを行う者」は、信仰による義を獲得した者である。

- ①イエスは父なる神を、「天におられるわたしの父」と呼ばれた。

2. 22～23 節

「その日には、大ぜいの者がわたしに言うでしょう。『主よ、主よ。私たちはあなたの名によって預言をし、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって奇蹟をたくさん行ったではありませんか。』しかし、その時、わたしは彼らにこう宣告します。『わたしはあなたがたを全然知らない。不法をなす者ども。わたしから離れて行け』」

(1) 超自然的な現象が起こっても、それが神からのものとは限らない。

- ① エジプトの魔術師たち
- ② 奇蹟の源がサタンだということもある。

(2) もしそれが神からのものだとしても、それは信仰の証明とはならない。

- ① 最大の問題は、その人がメシアを知らないことである。
- ② メシアもまた、その人を知らないと言われる。

(3) 「その日には」とは、終末的裁きの日のことである。

IV. 2人の建築家 (24～27 節)

1. 24～25 節

「だから、わたしのこれらのことばを聞いてそれを行う者はみな、岩の上に自分の家を建てた賢い人に比べることができます。雨が降って洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけたが、それでも倒れませんでした。岩の上に建てられていたからです」

(1) 賢い建築家

- ① イエスのことばを聞いてそれを行う者
- ② 信仰による義を獲得している人
- ③ 信仰が行動に結びついている。

(2) 岩の上に家を建てる

- ① 岩とは、メシアのことである。またメシアによる旧約聖書の解釈のことである。
- ② 信仰による義を土台に、人生を築くことである。
- ③ その家は、何が起きても、破壊されることはない。
- ④ 裁きの日にも、壊れることはない。

2. 26～27 節

「また、わたしのこれらのことばを聞いてそれを行わない者はみな、砂の上に自分の家を

建てた愚かな人に比べることができます。雨が降って洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけると、倒れてしまいました。しかもそれはひどい倒れ方でした」

(1) 愚かな建築家

- ①イエスのことばを聞いても、それを実行に移さない人
- ②パリサイ人の義を追求している人
- ③外面だけを整えようとしている人

(2) 砂の上に家を建てる

- ①砂の上とは、ワジのことである。
- ②砂とは、パリサイ人の教えのこと、口伝律法のことである。
- ③その家は、裁きの日には崩れ去る。

3. 7:28~8:1

「イエスがこれらのことばを語り終えられると、群衆はその教えに驚いた。というのは、イエスが、律法学者たちのようにではなく、権威ある者のように教えられたからである。イエスが山から降りて来られると、多くの群衆がイエスに従った」

(1) イエスの教えは、革命的であった。

- ①律法学者の教えとは異なる。
- ②権威ある教えであった。
- ③多くの群衆が、その教えに感動を覚えた。

結論：山上の垂訓のまとめ

1. イエスの教えの特徴

- (1) 愛
- (2) いのち
- (3) 動き
- (4) 絵【たとえ話】
- (5) オーソリティ (権威)

2. 山上の垂訓のまとめ

- (1) メシアによる律法の義の解釈は、パリサイ人による律法の義の解釈とは異なっていた。
 - ①内面の重視か、外面の重視か。
- (2) メシアは、パリサイ的ユダヤ教を否定された。

- ①これが、パリサイ人たちがイエスを公に拒否することにつながる。
- (3) 山上の垂訓は、知恵ある者と愚かな者を2分する。
 - ①神の目から見て知恵ある者
 - *この世からは、愚かな者と見られる。
 - *その人は、メシアにだけ信頼を置いて生きる。
 - *その人は、内的変化を経験した結果、行動が変化する。
 - ②この世から見て知恵ある者
 - *神からは、愚かな者と見られる。
 - *その人は、目に見えるものしか信用しない。
 - *その人は、悔い改めを知らない。
 - *その人は、今という時のためにだけ生きている。
 - *その人は、自分のためにだけ生きている。
- (4) イエスが示した2つの道
 - ①救いか、滅びか。
 - ②豊かなクリスチャン生活か、実りの少ないクリスチャン生活か

「病に対する権威」

§ 055 マタ 8 : 5~13、ルカ 7 : 1~10

1. はじめに

(1) イエスは山上の垂訓を終えて、カペナウムに帰った。

(2) 文脈の確認

①福音書のこの辺りでは、イエスの教えと奇跡が、交互に出て来る。

②奇跡は、イエスがメシアであり、その教えに権威があることの「しるし」。

③1 コリ 1 : 22~24

「ユダヤ人はしるしを要求し、ギリシヤ人は知恵を追求します。しかし、私たちは十字架につけられたキリストを宣べ伝えるのです。ユダヤ人にとってはつまり、異邦人にとっては愚かでしょうが、しかし、ユダヤ人であってもギリシヤ人であっても、召された者にとっては、キリストは神の力、神の知恵なのです」

*ユダヤ人の特徴は、「しるしを見たら信じる」ということ。

*ギリシヤ人の特徴は、「理性的探求によって信じる」ということ。

*求道者には、ユダヤ型とギリシヤ型がある。

④これから2つの奇跡が起こるが、これによって、イエスのメシア性の証明の箇所は終わる。

⑤それ以降、イエスのメシア性を巡る論争が始まる。

(3) A. T. ロバートソンの調和表

百人隊長のしもべの癒し (§ 55)

並行記事 マタ 8 : 5~13

2. アウトライン

(1) 問題の発生 (1~5 節)

(2) イエスの対応 (6~9 節)

(3) 結果 (10 節)

3. 結論：現代的適用

(1) ルカの福音書の中の「驚き」について

(2) 異邦人の信仰について

このメッセージは、驚きと信仰について学ぼうとするものである。

I. 問題の発生 (1~5 節)

1. 1 節

「イエスは、耳を傾けている民衆にこれらのことばをみな話し終えられると、カペナウムに入られた」

- (1) カペナウムは、イエスが自ら選んだホームタウンである。
- (2) イエスはここを伝道の拠点とされた。
- (3) イエスここで、多くの奇跡を行われた。

2. 2~5 節

「ところが、ある百人隊長に重んじられているひとりのしもべが、病気で死にかけていた。百人隊長は、イエスのことを聞き、みもとにユダヤ人の長老たちを送って、しもべを助けに来てくださるようお願いした。イエスのもとに来たその人たちは、熱心をお願いして言った。『この人は、あなたにそうしていただく資格のある人です。この人は、私たちの国民を愛し、私たちのために会堂を建ててくれた人です』」

(1) 百人隊長

- ①通常は、60人~80人の兵士を統治し、指揮する。
- ②ローマ帝国の軍政においては、百人隊長が主要な骨格を形成していた。
- ③由緒ある家系の出で、非常に魅力的な人が多かった。

(2) しもべが死にかけていた。

- ①この時代、主人がしもべのことをこれほど気にかけるのは、珍しいことである。
- ②当時のローマ兵の職務への献身の度合い
 - *兵役に就いている約20年間は、結婚をしない。
 - *ただし、派遣された地で妾を持つことが多かった。
 - *ローマ帝国は、この程度のことは目こぼしをした。
 - *ただし、百人隊長が妾を持つことは稀であった。
 - *任地が他の兵士よりも短期で変わる。高潔な人格を持っていた。
- ③百人隊長にとっては、病気のしもべは家族同然の存在であったのだろう。

(3) ユダヤ人の長老たち

- ①彼らはラビたちである。
- ②ラビたちが、異邦人の百人隊長の代理となるのは、極めて珍しいケースである。
- ③さらに、ラビたちはイエスをメシアとは信じていないのである。
- ④しかも彼らは、イエスに熱心をお願いした。

(4) ラビたちが行動した理由

- ①この百人隊長は、イスラエル人を愛していた。
- ②その愛は、会堂建設となって表現された。

(5) マタイの福音書では、百人隊長が直接イエスのもとに来ている。

- ①ルカは事実を書いている。
- ②マタイは要約を書いている(代理人を派遣することは、本人が行くことである)。

II. イエスの対応 (6~9節)

1. 6~8節

「イエスは、彼らと一しょに行かれた。そして、百人隊長の家からあまり遠くない所に来られたとき、百人隊長は友人たちを使いに出して、イエスに伝えた。『主よ。わざわざおいでくださいませんように。あなたを私の屋根の下にお入れする資格は、私にはありません。ですから、私のほうから何うことさえ失礼と存じました。ただ、おことばをいただきさせてください。そうすれば、私のしもべは必ずいやされます。と申しますのは、私も権威の下にある者ですが、私の下にも兵士たちがいまして、そのひとりに『行け』と言えは行きますし、別の者に『来い』と言えは来ます。また、しもべに「これをせよ」と言えは、そのとおりにいたします』

(1) イエスが百人隊長の家に行くのは、例外的なことである。

- ①百人隊長は、「神を恐れる異邦人」であった。
- ②彼には、儀式的汚れが残っていた。
- ③特に食物規定上の問題があった。
- ④ラビたちが例外を設けることをイエスに願ったので、イエスはそれに応答した。

(2) ここにも、マタイとルカの記述の違いがある。

- ①マタイでは、百人隊長自身が語っている。
- ②ルカでは、百人隊長は友人たちを使いに出している。

*彼らは、百人隊長によって送られた2つ目のグループである。

(3) 百人隊長の謙遜

- ①ラビたちは、「この人は、あなたにそうしていただく資格のある人です」(4節)と語っていた。
- ②彼自身は、「あなたを私の屋根の下にお入れする資格は、私にはありません」と語っている。
- ③また、「ですから、私のほうから何うことさえ失礼と存じました」と語ってい

る。

(4) 百人隊長の信仰

①彼は、権威の意味を体験的に知っていた。

*彼の指揮下には、100人近い兵士たちがいた。

*兵士は、上官の命令によって動く人たちであった。

*彼自身もまた、上官の指揮下に置かれていた。

*上官の命令が下れば、有無を言わずに従った。

②彼は、イエスには権威があり、病はその権威に服すると信じていた。

*そこで、イエスのことばだけを求めた。

2. 9節

「これを聞いて、イエスは驚かれ、ついて来ていた群衆のほうに向いて言われた。『あなたがたに言いますが、このようなりっぱな信仰は、イスラエルの中にも見たことはありません』」

(1) 福音書では、イエスは2度驚いている。

①マコ6:6

「イエスは彼らの不信仰に驚かれた。それからイエスは、近くの村々を教えて回られた」

*ナザレは、イエスの故郷である。イエスにとって最も身近な町。

*ナザレは、イスラエル全体の象徴である。

*そのナザレの人々が、不信仰な態度を示した。

②ルカ7:9

*イエスは、異邦人の百人隊長の信仰に驚いた。

*ルカは、異邦人の信仰の進展を描いている。

*それが、この箇所、マタイよりもルカの情報の方が豊富な理由である。

*イスラエル人の中でこの異邦人のような信仰を発揮した人はいない。

(2) マタ8:10~12

「イエスは、これを聞いて驚かれ、ついて来た人たちにこう言われた。『まことに、あなたがたに告げます。わたしはイスラエルのうちのだれにも、このような信仰を見たことはありません。あなたがたに言いますが、たくさんの人が東からも西からも来て、天の御国で、アブラハム、イサク、ヤコブといっしょに食卓に着きます。しかし、御国の子らは外の暗やみに放り出され、そこで泣いて歯ざしりするのです』」

- ①「天の御国」とは、千年王国（メシア的王国）のことである。
- ②「たくさんの人が東からも西からも来て」は、多くの異邦人の救いを示す。
- ③「天の御国で、アブラハム、イサク、ヤコブといっしょに食卓に着きます」は、千年王国における祝された生活を示す。
- ④「御国の子ら」は、ユダヤ人として生まれたなら御国に入れると考えていた信仰のないユダヤ人たちを示す。
- ⑤ユダヤ人といえども、信仰がなければ滅びる。

III. 結果 (10 節)

1. 10 節

「使いに来た人たちが家に帰ってみると、しもべはよくなっていた」

- (1) この癒しは、百人隊長のイエスの対する信仰のゆえに起こったものである。
 - ①イエスは、百人隊長が信じた通り、病に対する権威を示された。

- (2) ユダヤ人の間には、奇跡を行う人の記録が流布していた。
 - ①しかし、距離が離れた人を癒したという記録はない。
 - ②それゆえ、この奇跡は特別なものとなった。

- (3) イエスのメシア性は、再び示された。
 - ①やもめの息子の蘇生（7：11～17）により、「メシア性の証明」は終わる。
 - ②それから先は、「イエスのメシア性に関する論争」のテーマが展開される。

結論：

1. ルカの福音書の中の「驚き」について

- (1) 今は、驚きのない時代である。
 - ①しかし、驚きはルカの福音書を貫くひとつのテーマである。

- (2) ギリシア語では「サウマゾウ」である。
 - ①1：21 ザカリヤが神殿で暇取った時、人々は不思議に思った。
 - ②1：63 ザカリヤが「彼の名はヨハネ」と書いた時、人々は驚いた。
 - ③2：18 羊飼いの話しを聞いて、人々は驚いた。
 - ④2：33 預言者シメオンが幼子について語ることに、イエスの両親は驚いた。
 - ⑤4：22 ナザレでのイエスのメッセージを聞き、人々は驚いた。

- ⑥7:9 イエスは百人隊長の信仰に驚いた。
- ⑦8:25 嵐を静める奇跡を見て、弟子たちは驚いた。
- ⑧9:43 悪霊の追い出しを見て、人々は驚いた。
- ⑨11:14 口をきけなくする悪霊の追い出しを見て、人々は驚いた。
- ⑩11:38 イエスが食前の清めをしないので、パリサイ人は驚いた。
- ⑪20:26 律法学者、長老たちによって送られた問者は、イエスの知恵ある答えに驚いた。
- ⑫24:12 ペテロは、墓の中に亜麻布だけがあるのを見て、驚いた。
- ⑬24:41 復活のイエスを見た弟子たちは、嬉しさのあまり信じられず、驚いていた。

(3) 私たちは、福音書に記録されたイエスを見て驚き、信仰に導かれる。

- ①イエスは、不思議な誕生を経験された方。
- ②イエスは、自らがメシアであると宣言された方。
- ③イエスは、自然界に対する権威をお持ちの方。
- ④イエスは、悪霊に対する権威をお持ちの方。
- ⑤イエスは、人間が作った律法を否定される方。
- ⑥イエスは、いかなる問いにも答えることのできる知恵ある方。
- ⑦イエスは、死に対する権威をお持ちの方。

2. 異邦人の信仰について

(1) ルカは、異邦人の信仰に光を当てている福音記者である。

- ①先に行くほど、異邦人の信仰が広がって行く。

(2) ルカは、4人の百人隊長を取り上げている。

①ルカ7章のカペナウム在住の百人隊長

- *その信仰によって、イエスを驚かせた。
- *彼は、イスラエルを愛し、祝福した異邦人である。
- *アブラハム契約のゆえに、彼は祝福を受けた(創12:3)。

②ルカ23:47の百人隊長

「この出来事を見た百人隊長は、神をほめたたえ、『ほんとうに、この人は正しい方であった』と言った」

- *マルコは、「神の子」としている。
- *ルカの読者には、無実であるということが大きな意味を持った。

③使10章のコルネリオという百人隊長

*彼は、異邦人で最初の信者となった。

*彼は、神を恐れる異邦人であった。

*彼もまた、アブラハム契約のゆえに祝福を受けた。

「彼は敬虔な人で、全家族とともに神を恐れかしこみ、ユダヤの人々に多くの施しをなし、いつも神に祈りをしていたが、」(使10:2)

④使27章のユリアスという百人隊長

*彼は、親衛隊の百人隊長であった。

*非常な榮譽が伴う隊である。

*彼は、パウロの命を助けた。

「しかし百人隊長は、パウロをあくまでも助けようと思って、その計画を押さえ、泳げる者がまず海に飛び込んで陸に上がるように、それから残りの者は、板切れや、その他の、船にある物につかまって行くように命じた。こうして、彼らはみな、無事に陸に上がった」(使27:43~44)

(3) 4人の百人隊長は、私たちの信仰の手本である。

①権威の意味を知っていた。

②アブラハム契約の祝福を受けた。

「死に対する権威」

§ 056 ルカ 7 : 11~17

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①山上の垂訓は終わった。
- ②福音書のこの辺りでは、イエスの教えと奇跡が、交互に出て来る。
- ③奇跡は、イエスがメシアであり、その教えに権威があることの「しるし」。
*ユダヤ人はしるしを求めた。
- ④イエスのメシア性を示す2つの奇跡
*百人隊長のしもべの癒し (§ 55)
*やもめの息子の蘇生 (§ 56)
- ⑤今回は、2番目の奇跡を取り上げる。
- ⑥これ以降、イエスのメシア性を巡る論争に入っていく。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

ナインで起こったやもめの息子の蘇生 (§ 56)

2. アウトライン

- (1) 問題の発生 (11~12 節)
- (2) イエスの対応 (13~14 節)
- (3) 結果 (15~17 節)

3. 結論：現代的適用

- (1) 文脈を意識することの重要性
 - ①特に、歴史的な文脈に注目する。
- (2) イエスの憐み
- (3) 私たちが受ける救いの型

このメッセージは、イエスの憐みについて学ぼうとするものである。

I. 問題の発生 (11~12 節)

1. 11 節

「それから間もなく、イエスはナインという町に行かれた。弟子たちと大ぜいの人の群れがいっしょに行った」

「死に対する権威」

(1) カペナウムからナインへ

- ①カペナウムの南西約30キロの町。旧約聖書にはその名は出ていない。
 - ②かつては大いに栄えた町であったようだが、今では小さな村である。
 - ③ヨセフスは、ガリラヤからエルサレムに上る途中にある町だと書いている。
 - ④イズレエルとカルメル山は、イズレエルの谷の中央と西を抑えている。
 - ⑤その間に、タボル山、ナザレ、メギド、そしてナインなどが位置する。
 - ⑥タボル山からナインまでは、車で1時間弱である。
- (例話) ヨッシーの質問 新約聖書ではナインについてどう書かれているのか。

(2) イエスの後には、弟子たちと大勢の群衆が付いて来ていた。

- ①喜びと希望に満ちた行列である。

2. 12節

「イエスが町の門に近づかれると、やもめとなった母親のひとり息子が、死んでかつぎ出されたところであった。町の人たちが大ぜいその母親につき添っていた」

(1) ナインの町には城壁はなかった。

- ①家並の間の空間にある門で、道路がそこから町に中に入っていたのであろう。

(2) 葬送の行列がイエスの行列とぶつかった。

- ①当時の習慣では、葬送の列が来ると、仕事を止めて参加することになっていた。
- ②この葬送は、非常に悲劇的であった。
 - *ひとり息子の死(男性の親族がいるようには思えない)
 - *「青年」(ネアニスコス)は、40歳以下の者を指す言葉である。
 - *ひとり息子に死なれたやもめは、共同体の慈善に頼るしかない。
 - *やもめの保護は、旧新約聖書の主要テーマである。
 - *特に、神との契約の中の条項として取り上げられる(申命記が重要)。
 - *新約聖書では、1テモ5:3~16を参照。
- ③こういう場合は、母親が先頭、次に棺、その後に町の人たちが付いた。

(3) ここには、2つの異なる性質のものの衝突がある。

- ①悲しみと喜び
- ②汚れと聖さ
- ③死と命
- ④いずれが勝つのか、見てみよう。

II. イエスの対応 (13～14節)

1. 13節

「主はその母親を見てかわいそうに思い、『泣かなくてもよい』と言われた」

(1) 当時の哲学者たちの言葉

「泣いてはいけない。泣いても何もよいことはない」

(2) イエスの言葉

「泣かなくてもよい」

①イエスは、悲しみの原因を取り除くことができる。

②イエスは、これから解決を与えようとしておられる。

(3) イエスの憐み

「主はその母親を見てかわいそうに思い、」(新改訳)

「主はこの母親を見て、憐れに思い、」(新共同訳)

「主はこの婦人を見て深い同情を寄せられ、」(口語訳)

「痛々しい母親の姿を見てかわいそうに思ったイエスは、」(リビングバイブル)

①ギリシア語では、「スプラנקニゾマイ」という動詞である。

②語源は、「スプラנקナ」(内臓、腸である。私たちは「心」と言う)である。

③直訳は、「同情のはらわたを持たれ」ということである。

2. 14節

「そして近寄って棺に手をかけられると、かついでいた人たちが立ち止まったので、『青年よ。あなたに言う、起きなさい』と言われた」

(1) 葬送の列を妨害したり、止めたりするのは、律法違反である。

①棺をかついでいた人たちは、立ち止まった。

②イエスに対する信仰を持っていたのか、あるいは、権威に圧倒されたのか。

(2) イエスは棺に手をかけられた。

①当時のユダヤ人たちは、箱型の棺は使用していなかった。

②一枚の板に死体を載せて運んでいた。

③棺に触れると、1日の間汚れた者となる。

「汚れた者が触れるものは、何でも汚れる。その者に触れた者も夕方まで汚れる」

(民 19 : 22)

④死体に触れると、7日間汚れた者となる。

「どのような人の死体にでも触れる者は、七日間、汚れる」

(民19:11)

- ⑤死体に触れることは、ユダヤ教では最も強い汚れとなる。
 - ⑥通常は、家族だけが死んだ者に触れる。
- (3) 汚れが、汚れていない人に影響を与える。
- ①イエスの場合はその逆で、影響力はイエスから汚れた物に向かって流れた。
- (4) 「青年よ。あなたに言う、起きなさい」
- ①ことばを発するだけで、死に勝利された。
 - ②イエスのことばには、創造主の力と権威がある。

Ⅲ. 結果 (15～17 節)

1. 15 節

「すると、その死人が起き上がって、ものを言い始めたので、イエスは彼を母親に返された」

- (1) 死人が起き上がって、ものを言い始めた。
- ①青年が生き返ったことの明確な証拠である。
- (2) イエスは、彼を母親に返された。
- ①青年に信仰があったわけではない。
 - ②母親に信仰があったわけでもない。
 - ③受ける側の信仰は問われていない。
 - ④イエスの憐みが、この奇跡を起こしたのである。

2. 16 節

「人々は恐れを抱き、『大預言者が私たちのうちに現れた』とか、『神がその民を顧みてくださった』などと言って、神をあがめた」

- (1) 人々は恐れを抱いた。
- ①人々とは、ユダヤ人の指導者たちではなく、一般庶民である。
- (2) 人々は神をあがめた。
- ①エリヤやエリシャを思い出し、「大預言者」と言っている。
 - ②神がその民を顧みてくださった。

③彼らは、神ご自身が人の姿を取って来てくださったことまでは知らなかった。

3. 17節

「イエスについてこの話がユダヤ全土と回りの地方一帯に広まった」

(1) バプテスマのヨハネの話につながっていく。

結論：

1. 文脈を意識することの重要性

(1) 特に、歴史的な文脈に注目する。

(2) 地理的情報（アハブ王の時代）

①エリヤの活動場所は、イズレエル、カルメル山。

②エリシャの活動場所は、シュネム、カルメル山。

(3) エリヤとエリシャの奇跡

①エリヤは、ツアレファテのやもめの息子を蘇生させた（1列17：17～24）。

・3度身を伏せた。

②エリシャは、シュネムのやもめの息子を蘇生させた（2列4：4～37）。

・身を伏せた。息子は7回くしゃみをした。

③しかしイエスは、ことばだけでいやした。

(4) 人々は、この奇跡によってイエスをエリヤとエリシャの再来として理解した。

(5) 日本人とキリスト教の関係を歴史的な文脈の中で考える。

①徳川幕府による禁教令以前の日本人は、相当数の者がキリスト教を受容した。

②禁教令以降、キリスト教は邪宗門となった。

③キリシタン時代の歴史と日本人の精神性を掘り起こす作業が、伝道のために有効であろう。

2. イエスの憐み

(1) ルカは、イエスが助けた3人の子どもたちの話を記録している。

①ナインのやもめの息子の蘇生（ルカ7：11～17）

②会堂管理者ヤイロの娘の蘇生（12歳くらい）（ルカ8：42）

③悪霊につかれた息子の解放（ルカ9：38）

(2) この3人は、全員「ひとり子」である。

①イエスの憐みは、ひとり子のために嘆いている親に向けられた。

②父なる神と子なる神の痛みが、その背景にあるように感じられる。

(3) ヨハ3:16

「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである」

3. 私たちが受ける救いの型

(1) この奇跡の記録は、文字通りに解釈する必要がある。

(2) と同時に、適用としては、靈的救いの型になっていると考えられる。

①私たちは靈的に死んでいた。

「あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって、そのころは、それらの罪の中にあってこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者として今も不従順の子らの中に働いている靈に従って、歩んでいました」(エペ2:1~2)

*無力であった。

*助けを求めることさえできなかった。

②神はイエスを送ってくださった。

「しかし、あわれみ豊かな神は、私たちが愛してくださったその大きな愛のゆえに、罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、——あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです——キリスト・イエスにおいて、ともによみがえらせ、ともに天の所にすわらせてくださいました。それは、あとに来る世々において、このすぐれて豊かな御恵みを、キリスト・イエスにおいて私たちに賜る慈愛によって明らかにお示しになるためでした。あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。行いによるものではありません。だれも誇ることのないためです」(エペ2:4~9)

*この青年は、それ以降どういう生涯を送ったのだろうか。

*イエス・キリストの憐みと力を証ししたに違いない。

*私たちの将来の目標は決まっている。

*私たちは、神の作品である。

*良い行いをするために、キリスト・イエスにあって造られた。